1997 AIDS 文化フォーラム in 横浜

実施報告書

日　時：１９９７年8月8日（金）から１０日（日）
会　場：かながわ県民センター
主　催：「1997 AIDS 文化フォーラム in 横浜」組織委員会
共　催：神奈川県　　後　援：横浜市／川崎市／横須賀市

ご　挨　拶

１９９４年から４年継続して「ＡＩＤＳ文化フォーラム　ｉｎ　横浜」を開催できたことを皆様と共に感謝し、喜びを分かち合いたいと思います。

今年もこのフォーラムは市民による市民のための手づくりフォーラムとして手弁当型で運営することができました。

私たちはＡＩＤＳへの様々な取り組みの中で、共に生き、連帯し、未来への希望をつなぐ集いとすることを願い、テーマを今回「未来へのつどい」としました。

現在、日本においては確実に感染者が増加しているにもかかわらず実際には社会の関心も薄らぎ、マスコミ報道も減少しています。私たちはそのことへの危機意識をもってプログラムの参加を呼びかけた結果、新たなニーズに応えるべく新しい試みが数多く取り入れられ、多様なプログラムを展開することができました。そのプログラムは６８を数え、加えて３つのシンポジウムを実施できました。

１９９７年度の参加者数は４６００人を越え、過去最高となりました。参加者の地域は北海道、宮城、福島、新潟、栃木、茨城、群馬、埼玉、千葉、東京、長野、静岡、愛知、岐阜、滋賀、京都、大阪、兵庫、広島、愛媛、香川、徳島、山口、福岡、大分、長崎、宮崎、鹿児島、沖縄までとなりました。

今年も会場の運営に当たっては、市民ボランティア１６０名が支え、年齢は１２歳から７２歳で市民が作るにふさわしい構成でした。

講座の主催者は、従来は東京、神奈川が中心でしたが、今年は関東以外の北海道、滋賀、徳島、広島、鹿児島からの参加がありフォーラムの広がりを見せました。

シンポジウムでは医療・教育・ボランティアについてこれからの積極的な取り組みに向けて様々な提言がなされました。「ＨＩＶ医療の可能性を探る」では、最新の薬物療法や検査の紹介をもとに感染者の方自身がＱＯＬを高めた生活をするために必要な理解とサポート上の問題点等を明らかにしました。「ＡＩＤＳ・教育現場からの挑戦」では、学校現場でチームティーチングを取り入れた教師の積極的な取り組みや、知識だけでなく実感できる「生きる力」を育てる多様な取り組みが必要であることが明らかになりました。

「ボランティアって何だ！」ではボランティアが市民権を問い直されている時期の中でその原点を問いました。

どのプログラムも充実した内容でしたが、特に「ＰＷＡのネットワークを考える」ではＨＩＶに感染している５人の方がプレゼンテーターとなりネットワークを組むために必要な問題点について議論する機会がこのフォーラムで全国で初めてもたれたことは非常に意義あるものとなりました。

３日間のフォーラムが手弁当型で行われたことは大変なことでしたが、それだけに成功裏に終了した喜びをすべての方々と分かち合いたいと思います。心より感謝申し上げます。

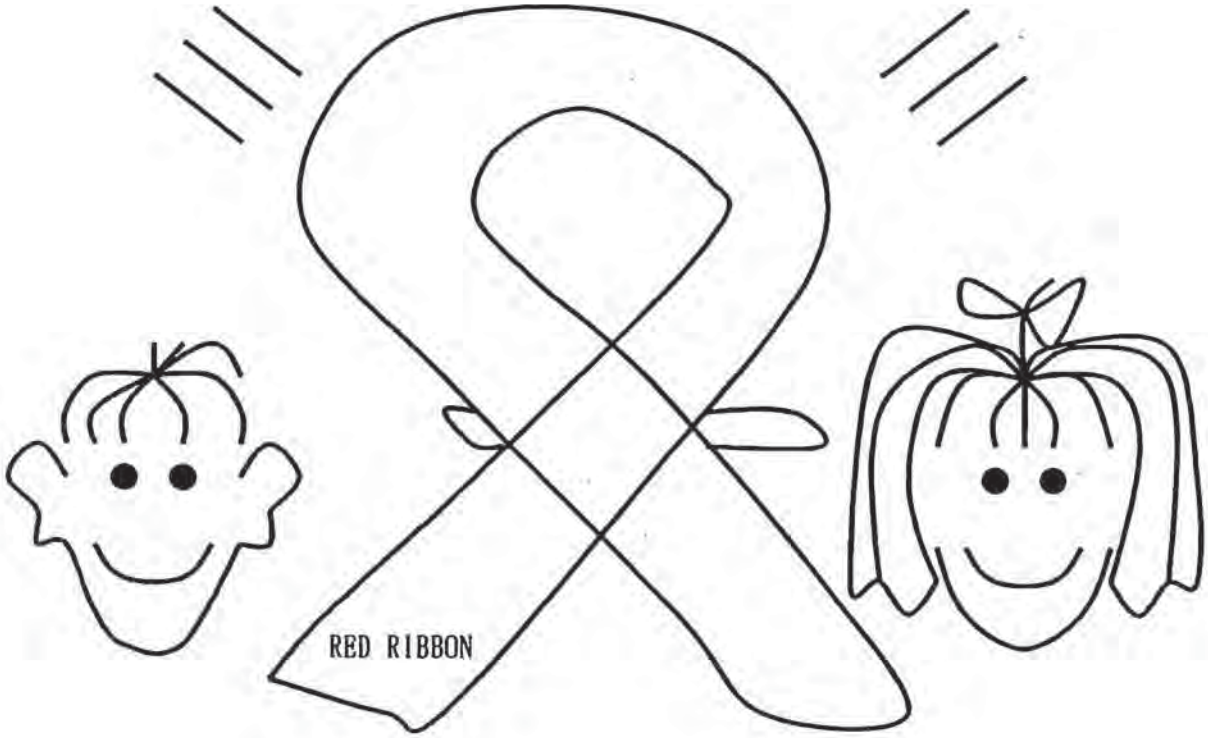
私たちのＡＩＤＳ文化フォーラムは常にその時々のニーズに敏感に応え、新しい試みをする場であり続けようと願ってやみません。皆様の今後の活動に期待しながら「１９９７ＡＩＤＳ文化フォーラム　ｉｎ　横浜」の報告とさせていただきます。

１９９８年３月１５日

「１９９７　ＡＩＤＳ文化フォーラム　ｉｎ　横浜」　組織委員会委員長　吉村恭二
実行委員会委員長　広瀬　誠

1997 AIDS 文化フォーラム in 横浜

未来へのつどい



AIDSへの様々な取り組みの中で、共に生き、連帯し、未来へ希望をつなぐ集い！

1．開催経過

今回で4回を数えたＡＩＤＳ文化フォーラムでしたが、ここで今までの開催経過を振り返ってみたいと思います。

ＡＩＤＳ文化フォーラムは、１９９４年8月に開催された「第１０回国際エイズ会議」に連動して始まりました。参加費が8万円という高額で、医療関係者中心の国際エイズ会議に対して、市民のための国際エイズ会議を市民の手で実施しようという趣旨で、国内外のＮＧＯが集い、様々な視点でＨＩＶ／ＡＩＤＳの問題に取り組みました。県国際交流協会を主会場に9日間、６２プログラムに4，３０５名という参加者を迎え、偏見と差別でのみ語られたＡＩＤＳという病気に対する市民レベルの新しいアプローチとの高い評価を得ました。

第2回の文化フォーラムは、『ここでの成果を一過性のものに終わらせることなく、継続して欲しい』という全国のＡＩＤＳに係わるＮＧＯからの強い要望を受け、１９９５年8月に開催しました。会期を3日間に縮小しながらも、「ともに生きる」というテーマで３１のプログラムに2，２００人が集まりました。また、この年から横浜ＹＭＣＡで「ＡＩＤＳボランティア育成講座（県委託事業）」もスタートし、受講生がフィールドワークの場として文化フォーラムの運営に参加し、幅広い世代のボランティアの活躍は延べ１７９名にも及びました。

第3回は、１９９６年8月「ともに生きるから連帯へ」というテーマで3日間、３４のプログラムに1，６００名の参加がありました。ボランティア育成講座の卒業生が「かながわレッドリボンクラブ」を組織し、プログラム参加したり、川崎市でもボランティア講座がスタートするなど、フォーラムを支える人たちが多彩になってきました。しかし、参加者の減少やプログラムのマンネリ化、ＡＩＤＳに対する社会的関心の落ち込みなど、様々な課題も明らかになってきた年とも言えます。

今回の「1997 AIDS 文化フォーラム in 横浜」（第4回）は、この様な積み重ね、継続があって開催されたわけです。今年は前年を評価し、検証するなかで、実行委員会主催のシンポジウムを開催しフォーラムの方向性を示すとともに、より多くの一般の人たちの参加を得るために映画等の文化的な側面からのアプローチや、手を挙げてくる参加団体を待つだけでなく、教育や企業、ＰＷＡといった視点で参加してほしい団体へ積極的に呼びかけていくこと、さらに、会場をより交通至便のかながわ県民センターに移し、会場規模も倍に拡大し、様々な新たな挑戦の年となりました。（次ページの実施要項で募集）

１９９４年（第1回）	１９９５年（第2回）	１９９６年（第3回）
会期：8月6日～１４日	会期：8月１１日～１３日	会期：8月9日～１１日
会場：県国際交流協会他	会場：県国際交流協会	会場：県国際交流協会
主催：AIDS文化ﾌｫｰﾗﾑ組織委員会	主催：AIDS文化ﾌｫｰﾗﾑ組織委員会	主催：AIDS文化ﾌｫｰﾗﾑ組織委員会
共催：神奈川県	共催：神奈川県	共催：神奈川県
後援：横浜・川崎・横須賀市	後援：横浜・川崎・横須賀市	後援：横浜・川崎・横須賀市
実施：AIDS文化ﾌｫｰﾗﾑ実行委員会	実施：AIDS文化ﾌｫｰﾗﾑ実行委員会	実施：AIDS文化ﾌｫｰﾗﾑ実行委員会
ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ:会場内58　会場外4	ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ:会場内31	ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ:会場内34
ﾃｰﾏ：市民と海外NGOによるAIDS会議	ﾃｰﾏ：ともに生きる	ﾃｰﾏ：ともに生きるから連帯へ
参加者数：4,305 名	参加者数：2,200 名	参加者数：1,600 名
関連事業：第10回国際AIDS会議	関連事業：第14回日本思春期学会	関連事業：夏のかながわﾚｯﾄﾞﾘﾎﾞﾝ月間

2．実施要項

「１９９７　ＡＩＤＳ文化フォーラム　ｉｎ　横浜」実施要項

名　　称：「１９９７　ＡＩＤＳ文化フォーラム　ｉｎ　横浜」
開催期間：１９９７年8月8日（金）～１０日（日）　3日間
開催場所：かながわ県民センター（横浜市神奈川区鶴屋町２－２４－２）

テーマ：「未来へのつどい」　── ＡＩＤＳの様々な取り組みの中で、共に生き、連帯し、未来への希望をつなぐ集いとする。 ──
目　　的：AIDSの啓発について医学面だけでなく幅広い文化的側面から積極的に捉える
広く市民に開かれたフォーラムとし、特に若い世代の参加を期待し工夫する
市民、ボランティア、AIDS関係団体間の交流と情報交換の場とする
全国各地の市民の手による、市民のための手弁当型フォーラムとする
ジャンル：心とＡＩＤＳ
文化とＡＩＤＳ
教育とＡＩＤＳ
人権とＡＩＤＳ
社会とＡＩＤＳ
医療とＡＩＤＳ
女性とＡＩＤＳ
企業とＡＩＤＳ
ボランティアとＡＩＤＳ
セクシュアリティとＡＩＤＳ　他
開催方法：当日の参加はすべて手弁当、入場無料である
発表に必要なものは、参加側で準備する
日程・時間帯・場所の調整は、実行委員会で行う
プログラム構成：一般募集するプログラム
領域をカバーするプログラム
実行委員会の企画するプログラム
留意点：高校生や青年が参加できる工夫
専門家のためのプログラムより市民が参加できる工夫
ターゲットを絞ったプログラムの工夫
学校関係者他の参加
命と心のバランスのある内容
エイズＮＧＯ情報支援
フォーラムにボランティア参加できる工夫

主　　催：「１９９７　ＡＩＤＳ文化フォーラム　ｉｎ　横浜」組織委員会
共　　催：神奈川県
後　　援：横浜市　川崎市　横須賀市
事務局：〒２３１　横浜市中区常盤町１－７　横浜ＹＭＣＡ内
ワールド・コミュニケーション・センター

（この要項で、参加の募集と実行委員会の企画を行い次ページのプログラム構成となった。）

3、プログラム

「１９９７　ＡＩＤＳ文化フォーラム　ｉｎ　横浜」　～未来への集い～

日　時　：１９９７年８月８日（金）～１０日（日）　１０：００～２０：００
会　場　：かながわ県民センター（横浜市神奈川区鶴屋町２－２４－２）
主　催　：「1997 AIDS文化フォーラム in 横浜」実行委員会　　共　催：神奈川県
事務局　：横浜ＹＭＣＡ（☎045-662-3721）　入場料：無　　料

日	時間	B会場（２Ｆホール）	C会場（３０１室）	D会場（３０２室）
８日（金）	10:00 ① 12:00	映画「秋　桜」（コスモス） P18 監督／すずきじゅんいち 出演／小田茜・松下恵他		
	13:00 ② 15:00	12~13時 すずき監督を迎えてのフリートーク	エイズの模擬授業 P26 （性を語る会：北沢杏子）	朗読ワークショップ P27 （H. I. Voice・Act）
	15:30 ③ 17:30	「HIV医療の可能性を探る」 P20　シンポジウム(1) （実行委員会）	何ができるかAAAと一緒に考えよう P31 （Act Against AIDS）	Video Against AIDS P32 アメリカのAIDS市民運動 （財）横浜市女性協会）
	18:00 ④ 20:00	映画「秋　桜」 P18	ますますPositive P35 （バトリック & 仲也）	ある日の保健室 P36 （AIDSネットワーク横浜）
９日（土）	10:00 ① 12:00	映画「秋　桜」 P18		Video Against AIDS P39　教育とAIDS （実行委員会）
	13:00 ② 15:00	「みずら」から見た P43　外国人女性への人権侵害 （かながわ・女のスペース"みずら"）	ONE WORLD P44　AIDS POSTER （HIVと人権・情報センター東京）	いのちの輝き！ P45　石田吉明フォトエッセイより （滋賀エイズを考える会）
	15:30 ③ 17:30	「AIDS・教育現場からの挑戦」 P22　シンポジウム(2) （実行委員会）	AIDS を生きる P49　人々の気持ち （HIVと人権・情報センター東京）	PWAとの関わりから P50　人権と共生を考える （鹿児島/エイズを正しく知る会）
	18:00 ④ 20:00	H. I. Voice 劇場 P54 （H. I. Voice・Act）	「共生」を「強制」でなくどうツクル? P55 （HIVと人権・情報センター東京）	みずか嬢が考える P56　HIV/AIDSのコト （CAI・性風俗研究会）
１０日（日）	10:00 ① 12:00	映画「秋　桜」 P18	女性とＡＩＤＳ P60　※女性に限定 （吉永陽子）	克服！感染経路差別 P61 （加藤　孝）
	13:00 ② 15:00	ＰＷＡのネットワークを考える P65 （ポジティブネットワーク）	同性間性行為とAIDS P66 （エイズアクション）	米国のエイズ医療・ P67　ボランティアの現状 （フレンズフォーライフ/高松）
	15:30 ③ 17:30	「ボランティアって何だ!」 P24　シンポジウム(3) （実行委員会）		Video Against AIDS P71　ＰＷＡ （実行委員会）
	18:00 ④ 20:00		★閉会式・交流会	

関連イベント

P86 ☆横浜ＹＭＣＡ☆ かながわ AIDSボランティア育成講座 基礎知識とフィールドワーク	P87 ☆川崎市健康・検診センター☆ かわさき AIDSボランティア講座 （川崎市健康福祉局）	P88 ☆相鉄ジョイナス ４Ｆ☆ 横浜エイズウィーク'９７ イベント＆パネル展 （横浜AIDS市民活動センター）

※Ｐは報告の掲載項です

開催概要

ＡＩＤＳへの様々な取り組みの中で、共に生き、連帯し、未来への希望をつなぐ集いとする。

開催目的：ＡＩＤＳの啓発について、医学面だけでなく幅広い文化的側面から積極的に捉える
：広く市民に開かれたフォーラムとし、特に若い世代の参加を期待し工夫する
：市民、ボランティア、ＡＩＤＳ関係団体間の交流と情報交換の場とする
：全国各地の市民の手による、市民のための手弁当（ボランタリー）型フォーラムとする

日	時間	Ｅ会場（３０３室）	Ｆ会場（３０４室）	Ｇ会場（３０５室）	Ａ会場
8日（金）	10:00 ① 12:00			★開会式 12:45~13:00	1F 駅場
	13:00 ② 15:00	鹿児島大学 P28 医学部病院裁判（中前康友）	キルトをぬいながら P29 エイズを語る（ＡＢＣキルト）	バリアフリー P30 企業・地域・医療（ソクラテス プロジェクト）	① ＡＩＤＳを生きる（土橋正之写真展）P85 ② ＮＧＯ活動発表パネル展（展示内容は下記のとおり）
	15:30 ③ 17:30	コンドーム・バージン☆女編 P33 ⇨ 女男編 ⇦ P33（かながわレッドリボンクラブ）（横浜エイズ勉強会）		AIDS福祉が欲しかった P34（加藤 孝）	
	18:00 ④ 20:00	PEER EDUCATION P37 女性から女性へ（高村文子）	インターネットとパソコンによる 中止 PWA/H 支援活動（ライフ・エイズ・プロジェクト）	最新のウイルス学 P38（玉川重徳）	
9日（土）	10:00 ① 12:00	乳幼児をもつママへ P40 はじめての性教育（CSR/岡村聡子）	タイ女性支援 P41 から学んだこと（"みずら"/レッドリボンクラブ）	AIDS 教育公開授業 P42 小・中学校編（千葉/ぴーせいふ・いちかわ）	
	13:00 ② 15:00	マザーテレサと P46 その活動（グループＰＡＺ）	キルトディスプレイと P47 テディベアワークショップ（メモリアル・キルト・ジャパン）	AIDS 教育公開授業 P48 高校編（神奈川/高校教師）	
	15:30 ③ 17:30	コミュニティ・パートナシップ・プログラム P51 企業とAIDS（リーバイ・ストラウス ジャパン）	AIDS電話相談員 P52 パネルディスカッション（横浜いのちの電話）	病気・ケガの種類によってどうして P53 こんなに差がある？ 日本の福祉（HIV不当解雇訴訟支援団）	
	18:00 ④ 20:00	対話が拓く医療 P57 -薬害エイズから学ぶ-（薬害エイズを追求する市民ネットワーク）	こども買春防止に P58 向けて・現状報告（STOP子ども買春の会/YMCA同盟）	医者が語るAIDS教育 P59（北海道/「ストップ・エイズ」ジャパン実行委員会・及川敬）	
10日（日）	10:00 ① 12:00	異文化の中でAIDS P62 と共に生きる（CRI-ラテンプロジェクト）	オーストラリアの P63 エイズ医療体制（国立呉病院/井原章裕）	AIDS患者・HIV感染者 P64 の社会的役割（せかんど かみんぐあうと）	
	13:00 ② 15:00	性教育グッズで伝える P68 いのちの大切さ（横浜エイズ 勉強会）	同性愛者のための電話 P69 相談・統計報告（動くゲイとレスビアンの会/アカー）	ＰＨＡのための法的 P70 サポートと環境の改良（AIDS予防法を考える会）	
	15:30 ③ 17:30	Safer Sex Workshop P72 for Gay Men（ぷれいす東京）	愛と思いやり P73 私たちがAIDSから学べること（土橋正之）	8/8-10Ａ会場 P83 10分でわかるAIDSコーナー（かながわレッドリボンクラブ）	
	18:00 ④ 20:00				

Ａ会場（展示場）

(1)：AIDSの教材－学校で、保健所で（性を語る会）
(2)：リボンプロジェクトジャパン活動紹介（リボンプロジェクトジャパン）
(3)：電話相談とAIDS（有縁支援いのちの山彦電話東京支部）
(4)：AIDS教育を考える＝メッセージキルト（徳島県池田保健所）
(5)：H. I. Voice Digest展（H. I. Voice編集局）
(6)：English Education &AIDS（JAPANet）
(7)：ＣＲＩ活動紹介展（ＣＲＩ）
(8)：同性間性行為とAIDS（エイズアクション）
(9)：紹介！性教育グッズ（横浜エイズ 勉強会）
(10)：キルトとテディベア（メモリアル・キルト・ジャパン）
(11)：マザーテレサの活動（グループ PAZ）
(12)：クリスマスツリーにレッドリボンを（かながわレッドリボンクラブ）
(13)：ルーマニアの子ども達とAIDS（Act Against AIDS）
(14)：スタンプラリー終点（横浜AIDS市民活動センター）
(15)：レッドリボンＴシャツ販売（奈良HIV訴訟を支える会）
(16)：AIDS福祉が欲しかった（東京AIDS福祉勉強会）

P 75 76 77 78 P 79 80 81 82

4．組織と会場

ＡＩＤＳ文化フォーラム組織委員会

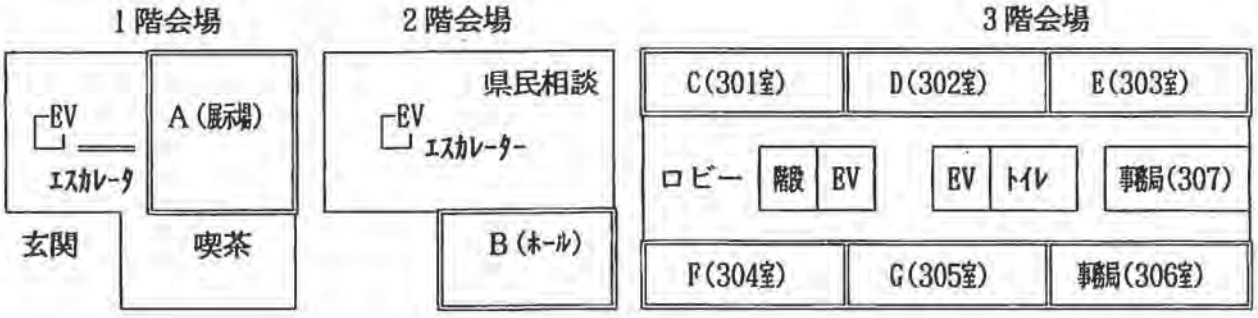
唐崎　旬代（横浜ＹＷＣＡ）
川本　譲次（横浜商工会議所）
小久保一利（かながわともしび財団）
榊原　高尋（横浜いのちの電話）
田代　正樹（横浜青年会議所）
濱尾　文郎（カトリック横浜司教区）
吉村　恭二（横浜ＹＭＣＡ）

ボランティア募集中！
希望者は
AIDS文化フォーラム　事務局まで

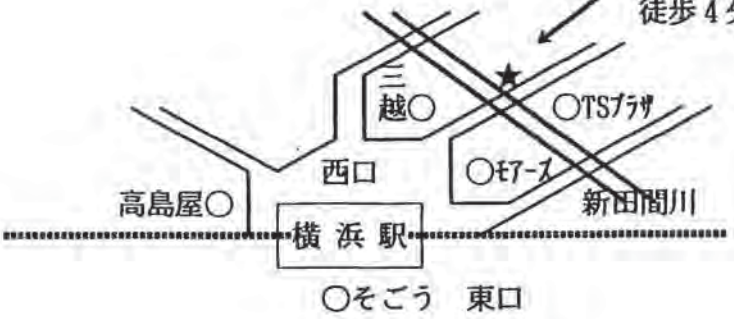
ＡＩＤＳ文化フォーラム実行委員会

岩室　紳也（鎌倉保健所）
笠原　隆　（横浜AIDS市民活動センター）
金　　迅野（神奈川県国際交流協会）
高村　文子（横浜エイズ勉強会）
長沢　勲　（横浜ＹＭＣＡ）
広瀬　誠　（医師）
松江　勝美（横浜市海外交流協会）
吉永　陽子（長谷川病院／家族機能研究所）
岡島　龍彦（Ｈ．Ｉ．Ｖｏｉｃｅ・Ａｃｔ）
鹿股久美子（かながわレッドリボンクラブ）
小島　隆士（横浜いのちの電話）
多田由加里（かながわ県民活動サポートセンター）
早川　徳治（神奈川県衛生部）
細井　保路（カトリック横浜司教区）
矢部　尚美（ＹＭＣＡ　ＡＣＴ）
千代木ひかる（事務局）

会場案内



〒221 横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2
かながわ県民センター　TEL 045-312-1121
横浜駅西口より　FAX 045-312-4810
徒歩４分



問い合わせ先

AIDS 文化フォーラム 事務局
〒231 横浜市中区常盤町1-7
横浜ＹＭＣＡ内
TEL 045-662-3721
FAX 045-651-0169

5．今回の特色

(1)会場の条件の変化

開催会場を、第１回から第３回までの山下公園前の神奈川県国際交流協会（３会議室とラウンジ、交流コーナー）から、横浜駅西口のかながわ県民センター（展示場、ホール、７会議室）に移すことにより、会場規模を拡大するとともに、展示場やホールを使って多彩なプログラムを組むことができるようになりました。

また、この県民センターには、ボランティア活動を総合的に支援する「かながわ県民活動サポートセンター」が６階から１１階に設置されており、従来ＡＩＤＳ文化フォーラムに係わりのなかったボランティア団体へのプログラム参加や、運営ボランティアとしての参加の呼びかけが可能となりました。

(2)実行委員会の取り組み

実行委員会も第３回を終わっての危機感から、早い時期からスタートするとともに、従来の文化フォーラムと異なり、(a)実行委員会主催のプログラム持つこと。(b)一般市民も呼び込めるプログラムを持つこと。の２つの特徴を打ち出すこととしました。そのため、準備会や小委員会を含め実行委員会を頻繁に開催しました。

① 3月 6日（金）「テーマについて」　② 3月31日（火）「全体のフレーム」
③ 5月12日（火）「ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ 応募状況」　④ 5月19日（火）「仮チラシの作成」
⑤ 6月 4日（木）「呼びかけﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ 」　⑥ 6月 9日（火）「広報・ＰＲ戦略」
⑦ 6月23日（火）「ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱについて」　⑧ 7月14日（月）「進捗状況の確認」
⑨ 7月18日（金）「会場運営の詰め」　⑩ 8月 2日（日）「ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ･ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ」
⑪ 8月 5日（日）「報道機関を訪問」　⑫ 8月 8～10日　「会期中のﾐｰﾃｨﾝｸﾞ」
⑬ 9月 5日（土）「 評 価 会 」　⑭10月 8日（木）「報告書のフレーム」
⑮12月 4日（金）「報告書の原稿回収状況」及び座談会「AIDS文化ﾌｫｰﾗﾑ を語る」

(3)支える体制の充実

第１回から継続して事務局を引き受けた横浜ＹＭＣＡの全面的なバックアップを中心に神奈川県や横浜市、川崎市、横須賀市の広報協力、資金提供してくれたカトリック山手教会、カトリック横浜司教区福祉委員会、横浜商工会議所、エイズ予防財団等、さらにボランティアとして、エイズボランティア講座の受講生、かながわレッドリボンクラブのメンバー、一般参加の多数のボランティアの方々が素晴らしい働きをしてくれました。

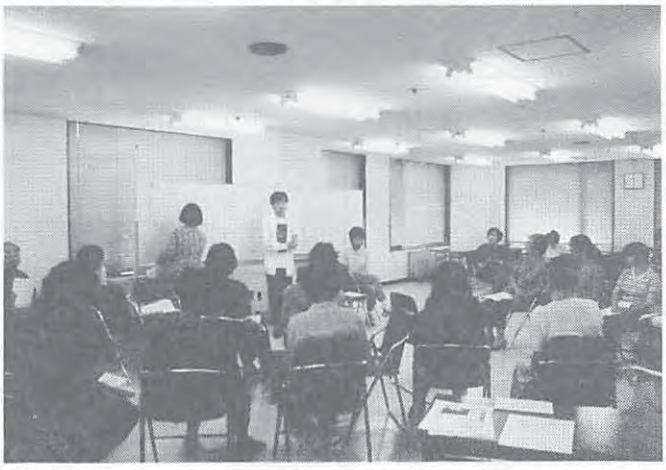
そして全国から集まった4,600 人の参加者の方々が、このフォーラムに継続する勇気と自信を与えてくれました。多くのアンケートから、かけがえのない1997年の夏を共に過ごせた喜びを読み取ることができました。

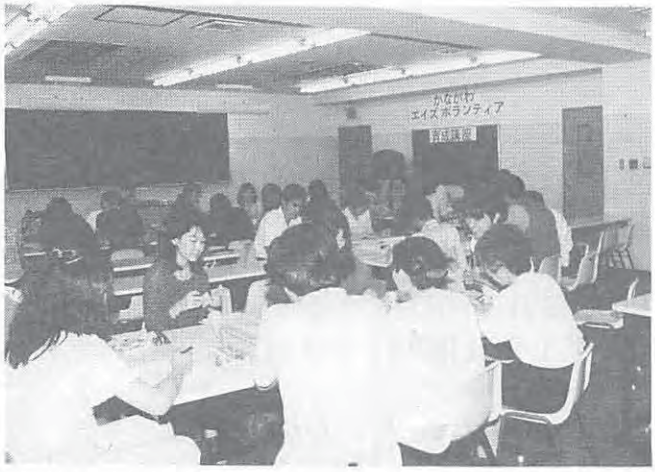
6．開催の実績

参加団体数	５８団体
プログラム数	７６プログラム
ボランティア	１６０名（12歳～72歳）

参加者の地域	３０都道府県（北海道~沖縄）
入場者総数	４，６０７名
（１日平均）	（１，５３６名）

7．会場の記録




かながわ
エイズボランティア

スタンプラリー

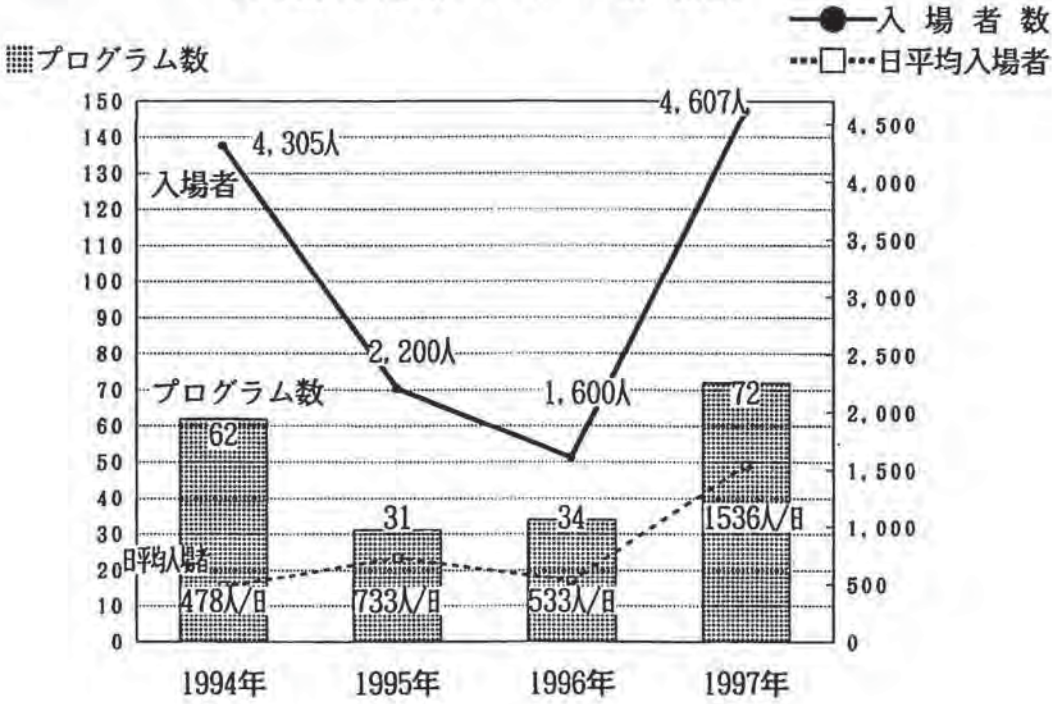
LOVE

8．入場者等の推移

開催経過

回数 概要　年度	第１回 １９９４	第２回 １９９５	第３回 １９９６	第４回 １９９７
開催日 開催日数	8月 6～14日 （９日間）	8月11～13日 （３日間）	8月 9～11日 （３日間）	8月 8～10日 （３日間）
開催場所	神奈川県 国際交流協会	同左	同左	かながわ 県民センター
プログラム数 （１日当たり）	６２ (6.9)	３１ (10.3)	３４ (11.3)	７２ (24.0)
参加者数 （１日当たり）	4,305 名 （ 478名）	2,200 名 （ 733名）	1,600 名 （ 533名）	4,607 名 （1536名）
関連行事等	第１０回 国際AIDS会議	日本 思春期学会	夏のかながわ ﾚｯﾄﾞﾘﾎﾞﾝ月間	夏のかながわ ﾚｯﾄﾞﾘﾎﾞﾝ月間

（４年間の入場者／プログラム数の推移）



プログラム報告

第　2　章

第3回かながわエイズポスターコンテスト　一般の部　入賞作品　井田 三和子

第 2 章

プログラム報告（発表の部）

掲載頁

◆会場平面図／B会場（2階ホール）C～G会場（3階会議室） 16-17

○実行委員会企画

8日①－B他　映画「秋桜（コスモス）」……（神奈川県・実行委員会） 18-19
8日③－B　シンポジウム(1)「ＨＩＶ医療の可能性を探る」……（実行委員会） 20-21
9日③－B　シンポジウム(2)「ＡＩＤＳ・教育現場からの挑戦」……（実行委員会） 22-23
10日③－B　シンポジウム(3)「ボランティアって何だ!」……（実行委員会） 24-25

○参加プログラム

8月8日（金）
②－C　エイズの模擬授業……（性を語る会：北沢杏子） 26
②－D　朗読ワークショップ……（H.I.Voice・Act） 27
②－E　鹿児島大学　医学部病院裁判……（中前康友） 28
②－F　キルトをぬいながらエイズを語る……（ＡＢＣキルト） 29
②－G　バリアフリー「企業・地域・医療」……（ソクラテス プロジェクト） 30

③－C　何ができるかＡＡＡと一緒に考えよう……（Act Against AIDS） 31
③－D　Video Against AIDS「アメリカのAIDS市民運動」……（財横浜市女性協会） 32
③－E　コンドーム・バージン☆女編……（かながわレッドリボンクラブ） 33
③－F　コンドーム・バージン☆男編……（横浜エイズ勉強会） 33
③－G　ＡＩＤＳ福祉が欲しかった……（加藤　孝） 34

④－C　ますますPositive……（パトリック & 紳也） 35
④－D　ある日の保健室……（AIDSネットワーク横浜） 36
④－E　PEER EDUCATION　「女性から女性へ」……（高村文子） 37
④－E　インターネットとパソコンによるPWA/H支援活動……（ライフ・エイズ・プロジェクト） [illegible]
④－G　最新のウイルス学……（玉川重徳） 38

8月9日（土）
①－D　Video Against AIDS「教育とAIDS」……（実行委員会） 39
①－E　はじめての性教育「乳幼児をもつママへ」……（CSR/岡村聡子） 40
①－F　タイ女性支援から学んだこと……（“みずら”/レッドリボンクラブ） 41
①－G　ＡＩＤＳ教育公開授業　小・中学校編……（千葉／ぴーぱいぷ・いちかわ） 42

②－B　「みずら」から見た外国人女性への人権侵害……（かながわ・女のスペース“みずら”） 43
②－C　ONE WORLD AIDS POSTER……（HIVと人権・情報センター東京） 44
②－D　いのちの輝き！　石田詩朗フォトエッセイより……（滋賀エイズを考える会） 45
②－E　マザーテレサとその活動……（グループＰＡＺ） 46
②－F　キルトディスプレイとテディベアワークショップ……（メモリアル・キルト・ジャパン） 47
②－G　AIDS教育公開授業　高等学校編……（神奈川／高校教師） 48

③－C　AIDSを生きる人々の気持ち……（HIVと人権・情報センター 東京） 49
③－D　PWH/Aとの関わりから人権と共生を考える……（鹿児島／エイズを正しく知る会） 50
③－E　企業とAIDS「コミュニティ・パートナシップ・プログラム」……（リーバイ・ストラウス ジャパン） 51
③－F　AIDS電話相談員「バネルディスカッション」……（横浜いのちの電話） 52
③－G　病気・ケガの種類によってどうしてこんなに差がある？ 日本の福祉……（HIV不当解雇訴訟支援団） 53

④－B　H.I.Voice 劇場……（H.I.Voice・Act） 54
④－C　「共生」を「強制」でなくどうツクル？……（HIVと人権・情報センター 東京） 55
④－D　みずか嬢が考えるHIV/AIDSのコト……（ＣＡＩ・性風俗研究会） 56
④－E　対話が拓く医療「薬害エイズから学ぶ」……（薬害エイズを追求する市民ネットワーク） 57
④－F　こども買春防止に向けて・現状報告……（STOP子ども買春の会/日本YMCA同盟） 58
④－G　医者が語るAIDS教育……（北海道/「ストップ・エイズ」ジャパン実行委員会・及川敬） 59

第 2 章

プログラムの○数字は時間区分を表し、アルファベットは会場を表しています。

8月10日（日）

①－C	女性とAIDS　※女性に限定	（吉永陽子）	60
①－D	克服！感染経路差別	（加藤　孝）	61
①－E	異文化の中でAIDSと共に生きる	（CRI－ﾗﾃﾝﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ）	62
①－F	オーストラリアのエイズ医療体制	（国立感染症研究所/井原章裕）	63
①－G	ＡＩＤＳ患者・ＨＩＶ感染者の社会的役割	（せかんど かみんぐあうと）	64
②－B	ＰＷＡのネットワークを考える	（ﾎﾟｼﾞﾃｨﾌﾞﾈｯﾄﾜｰｸ）	65
②－C	同性間性行為とAIDS	（エイズアクション）	66
②－D	米国のエイズ医療・ボランティアの現状	（ﾌﾚﾝｽﾞﾌｫｰﾗｲﾌ/ 浜松）	67
②－E	性教育グッズで伝える「いのちの大切さ」	（横浜エイズ勉強会）	68
②－F	同性愛者のための電話相談・統計報告	（働くｹﾞｲとﾚｽﾋﾞｱﾝの会=ｱｶｰ）	69
②－G	ＰＨＡのための法的サポートと環境の改良	（AIDS予防法を考える会）	70
③－D	Video Against AIDS「ＰＷＡ」	（実行委員会）	71
③－E	Safer Sex Workshop for Gay Men	（ぷれいす東京）	72
③－F	愛と思いやり「私たちがAIDSから学べること」	（土橋正之）	73

プログラム報告（展示の部）

◆会場平面図／Ａ会場（１階展示場）　74

8月8日（金）～10日（日）

Ａ－(1)	ＡＩＤＳの教材－学校で、保健所で	（性を語る会）	75
Ａ－(2)	リボンプロジェクトジャパン活動紹介	（ﾘﾎﾞﾝﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄｼﾞｬﾊﾟﾝ）	75
Ａ－(3)	電話相談とＡＩＤＳ	（有志支援いのちの山彦電話東京支部）	76
Ａ－(4)	ＡＩＤＳ教育を考える＝メッセージキルト	（徳島県池田保健所）	76
Ａ－(5)	Ｈ．Ｉ．Ｖｏｉｃｅ　Ｄｉｇｅｓｔ展	（H.I.Voice編集局）	77
Ａ－(6)	Ｅｎｇｌｉｓｈ　Ｅｄｕｃａｔｉｏｎ＆ＡＩＤＳ	（JAPANetwork）	77
Ａ－(7)	ＣＲＩ活動紹介展	（ＣＲＩ）	78
Ａ－(8)	同性間性行為とＡＩＤＳ	（エイズアクション）	78
Ａ－(9)	紹介！性教育グッズ	（横浜エイズ勉強会）	79
Ａ－(10)	キルトとテディベア	（ﾒﾓﾘｱﾙ・ｷﾙﾄ・ｼﾞｬﾊﾟﾝ）	79
Ａ－(11)	マザーテレサの活動	（グループ　ＰＡＺ）	80
Ａ－(12)	クリスマスツリーにレッドリボンを	（かながわﾚｯﾄﾞﾘﾎﾞﾝｸﾗﾌﾞ）	80
Ａ－(13)	ルーマニアの子ども達とＡＩＤＳ	（Act Against AIDS）	81
Ａ－(14)	Yokohama AIDS Week'97 スタンプラリー	（横浜AIDS市民活動ｾﾝﾀｰ）	81
Ａ－(15)	レッドリボンＴシャツ販売	（奈良HIV感染を支える会/東京支部）	82
Ａ－(16)	ＡＩＤＳ福祉が欲しかった	（東京AIDS福祉勉強会）	82
Ａ－(17)	１０分でわかるＡＩＤＳコーナー	（かながわﾚｯﾄﾞﾘﾎﾞﾝｸﾗﾌﾞ）	83
Ａ－(18)	ＡＩＤＳ資料展	（神奈川県）	83
Ａ－(19)	ＡＩＤＳを生きる「土橋正之写真展」	（神奈川県）	84-85

関連プログラム報告

◆周辺会場（横浜YMCA他）

○	かながわＡＩＤＳボランティア育成講座	（横浜YMCA・神奈川県）	86
○	かわさきＡＩＤＳボランティア講座	（川崎市健康福祉局）	87
○	Yokohama AIDS Week '97 in JOINUS	（横浜AIDS市民活動ｾﾝﾀｰ）	88

B会場の平面図

かながわ県民センター　2階平面図（ホール）

14m

スクリーン 5.5m×2.2m

2260☎
受付

天井高さ 5.25m

ステージ高さ 0.77m

卓上M　M　M　机

スタンドM

2.5m
（舞台下に椅子収納可）
舞台
（映画上映時には机を下げる）

7.5m

⑳

ワイヤレスM　ワイヤレスM

○○○○○○○○○○○　○○○○○○○○○○○

○○○（ 260席＝10脚×13列×2ブロック ）○○○○

⑮

19m

エスカレーター

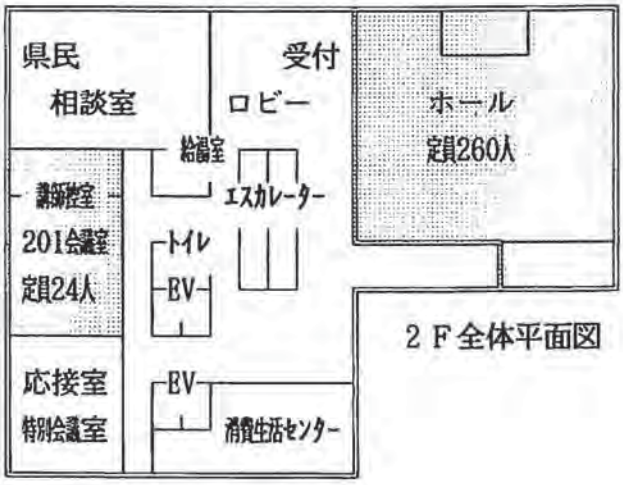
MJ

☎公衆電話

⇦講師控室
201会議室（事務局控室）

コンセント 20A 2回路
15A 4回路

（会議用テーブル60脚）
倉庫



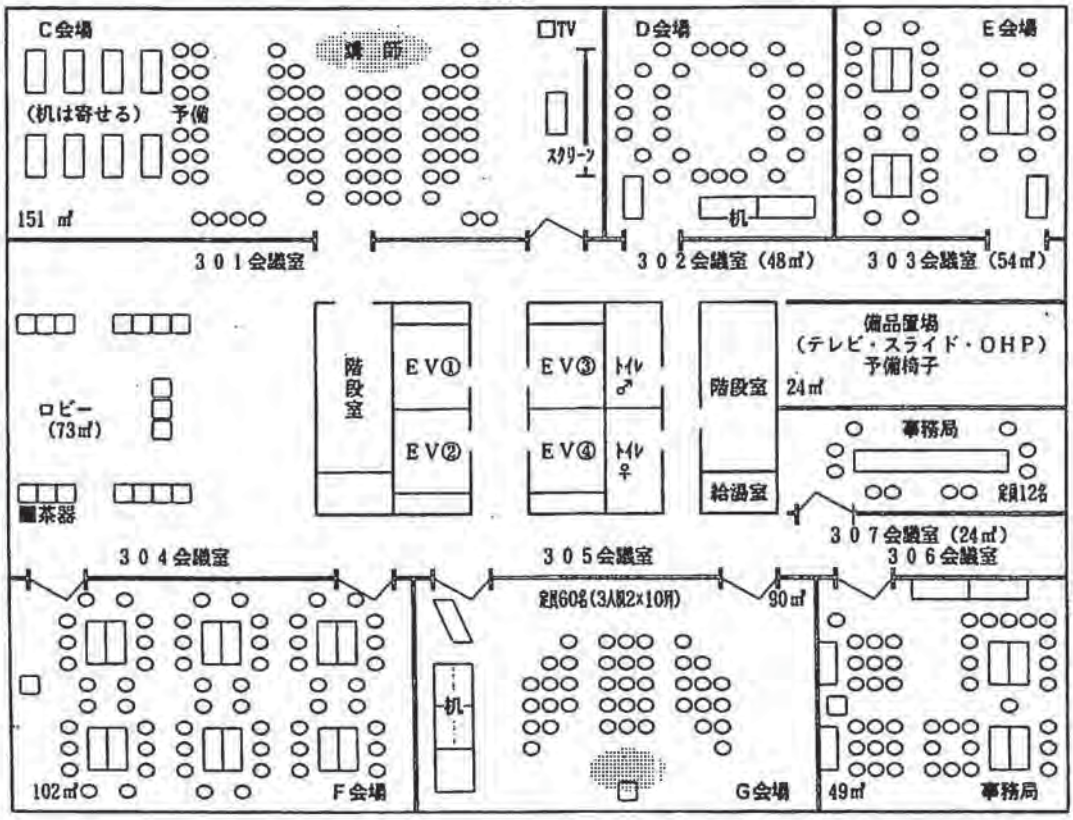
2F全体平面図

☆主なホール附帯設備

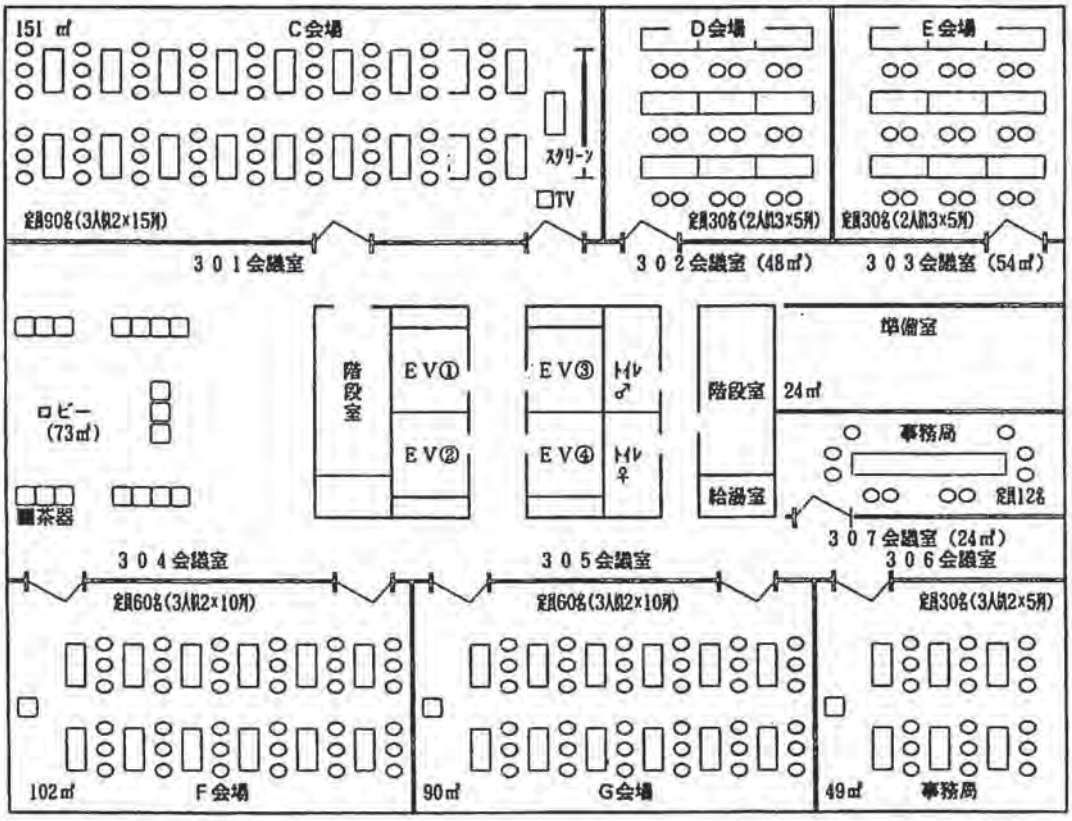
○椅子（折りたたみ 連結式）260脚（独立式）10脚
○テーブル（折りたたみ、3人用）60本（前板付）5本
○演台2台　○黒板2台　○掲示板
○マイク（スタンド式・卓上式）5台
（ワイヤレス式／ハンド・タイピン型）各2台
○16㎜映画映写装置　2台

C～G会場の平面図

AIDS文化フォーラム会場設営図（かながわ県民センター3階会議室平面図）
応用形



AIDS文化フォーラム会場配置図（かながわ県民センター3階会議室平面図）
基本形



（会場のレイアウトは様々でした。下図＝基本形⇨上図＝応用形）

①－B 他

映 画 「 秋 桜 」

主 催／1997 AIDS 文化フォーラム in 横浜実行委員会　　神奈川県衛生部保健予防課

ねらい

映画という文化的な表現を通して、このＡＩＤＳ文化フォーラムへの新たな参加者を開拓し、若い世代を中心としたより多くの一般の人々に、ＨＩＶ／ＡＩＤＳのことを考えるキッカケの場を提供する。『話題の映画を見たい！』を入口に、ＡＩＤＳに興味をもってもらい他のフォーラムプログラムへの参加を促す。

ながれ

ねらいを実現するため、毎日、午前の時間帯のコマで上映することとし、映画の鑑賞後に、その日のプログラムの全体を案内した。（結果として平均して他に２つのプログラムにも参加した模様）

さらに、この映画上映に対する批判を何件か電話で受けたことから、すずきじゅんいち監督を招いて意見交換の場を初回上映後に設定した。

満席だった場内の観客のほとんどの方が席を立つことなく、すずき監督への熱心な質問や拍手で参加していた。（聞き手：H.I.Voice•Act 成田右子）

また午前中に参加できない人のために夜の部でも１回上映した。

フォーラム終了後も、映画の評価を巡って、月間通信誌「H.I.Voice」の誌上などでも活発な論議があった。

上 映 時 間	鑑賞者数	合 計
8月 8日 10:00～12:00	２６０	
18:00～20:00	１３０	４回上映
8月 9日 10:00～12:00	１５１	
8月10日 10:00～12:00	２３０	７７１名

感想

・いろいろなことを考えさせられた映画でした。多くの人達に観ていただきたいと思います。これからもいい映画を作ってほしいと思います　（５０代　女性　会社員）

・主人公と友人との関係など明るく観ていて良かった。エイズについてよく知ろうと思いました。病気と一生懸命闘っている姿がよく描かれていた。（４０代　男性　会社員）

・病気を題材にするには、その病気について詳しく描かなければならないという意見もあると思いますが、その病気にかかっていない人にとっては想像する事はとても難しく、いくら勉強したとしてもその気持ちやつらさは分からないと思う。だからその人の周囲の人の気持ちを大切に描くことしかできないと思う。この映画はその点とても良かったぜひ、多くの学生さんに観てもらいたい。（２０代　女性）

・すごく感動しました。やっぱり偏見の目で見る人は若い世代に多いと思います。ＡＩＤＳの映画は大人向けで、中高生は関心を持ちません。でも、この映画は主人公も若く、私たちぐらいの年の子にも分かりやすく良かったと思います。テレビや学校などでも見せてほしいと思いました。（１０代　女性　高校生）

・主人公が苦しみに負けず前向きに生きていくそんな姿をみて、自分も勇気が湧いてきました。私も４年前から難病にかかり、一時は暗い日々を過ごしましたが、病気を理解し前向きに生きることで今はとても幸せです。（４０代　女性）

・生きることの意味を改めて考えさせられました。（１０代　女性　中学生）

「秋桜」の上映について

ＡＩＤＳ文化フォーラム実行委員会（だが・きりん）

４２号の「げんき」のＫさんの「秋桜」っていい映画ですか？という投稿と、まめあおさんの編集局からの説明を読みました。ＡＩＤＳ文化フォーラム実行委員の一人としても上映までの経過などについて少し説明させてもらおうと思います。

同じ４２号でも若干書きましたが、ＡＩＤＳ文化フォーラムは崖っぷちの状況の中で、参加団体や参加者アンケートによるニーズ調査をしました。その中で寄せられた意見に基づいて、実行委員会では今回のプログラムに次の２つの特徴を持たせることにしました。

①実行委員会主催のプログラムを持つ

これまでのフォーラムは、実行委員が個別のプログラムを持って参加することはあっても、実行委員会主催のプログラムはなく、場の提供と広報が主な仕事でした。つまりお皿（教室）は用意するけど、料理（プログラム）はそれぞれ複数の料理人（主催者）が得意なものを持ち寄る。お客（参加者）はバイキング形式（自由参加）で好きなものを選ぶというものでした。何よりも自主的な場を大事にしたわけです。その結果、教育、人権、文化、薬害、医療、ボランティア、セクシュアリティー、女性、企業、メディア等、様々な視点でＡＩＤＳへのアプローチが可能となり、市民の手による新しいタイプのフォーラムとして先駆的な役割を果したと自負してきました。しかし、アンケートの中で、何でも受け入れてくれることも大事だけど、実行委員会としての方向性も示して欲しいという意見も多く、今回は、医療、教育、ボランティアをテーマにし連日シンポジウムを用意しました。更にこんな視点のプログラムも欲しいというようなものは、手が上がるのを待つのでなく積極的に呼びかけました。教育に関する幾つかのプログラムやポジティブネットワークやリーバイスなどは、この呼びかけに応えてくれたものでした。

②一般市民も呼び込めるプログラムを持つ

回を重ねる毎に入場者数が減少してきた反省として、このフォーラムが関係者だけの年１回の同窓会になってしまったのではないか？　新しい参加者を開拓できていないのではないか？　という意見もでてきました。この部分は、音楽、映画、演劇、美術などの側面から、ＡＩＤＳに興味を持ってもらうというか、興味のあることからＨＩＶ／ＡＩＤＳのことに何等かの「？」が生まれ、他のプログラムにも参加してもらえればいいな、ということで、一般向けのプログラムを検討しました。映画では、幾つもの候補がでましたが、新しい作品で若い世代に呼びかけられるものということで、「秋桜」に決まりました。

この他、土橋正之さんの写真展、ＡＡＡの参加、町田国際版画美術館の持つＶＩＤＥＯの上映などもこの視点で呼びかけ実現したものです。

こんな前提があって「秋桜」が決まったわけですが、当然、実行委員会の全員がこの映画をみているわけではなく、一部の委員が見ているだけの状態でした。多様性を自負する文化フォーラムとしては、他の映画作品も含め、もっと様々な立場で作られた映画を上映できれば良かったのですが、借りられるフィルムが限定されていることや、予算的な面で断念させるをえませんでした。

文化フォーラムを広報する中で「なぜ「秋桜」を上映するの？」と言う問い合わせや批判もでてきました。「映画は見ていないがある団体の機関誌で批判していたから上映しないでほしい。」とか、「上映を中止しろとは言わないが、広報は控えてほしい。」という様な意見もでてきました。これらの意見について実行委員会でも協議しましたが、まず観てもらった上で批判があれば批判を受けることとしました。つまり、いろんな立場や、嗜好や、世代が、同じテーブルに並ぶことを認め合った上で、意見交換すればいいということ、一つの見方だけで、入口で門前払いだけはしないこと。これを中止にしたら、多様性に価値観を持つ文化フォーラムの存在意義そのものが問われることになると考えたわけです。これは、４２号で、まめあおさんが書いた「Ｈ．Ｉ．Ｖｏｉｃｅに文章を掲載することと、内容を認めることとは分けてとらえてほしい」という部分と同じ考え方です。

ただし、批判があることを一方通行にしないためにも、映画を作った側と観る側との間で、何らかの意見交換の場を持とうということになり、初回の上映後に、この映画を監督した『すずきじゅんいち』さんとのフリートークの場を持ちました。ここでもいろいろな意見がでたようですが、私はその場に立ち会わなかったのでここではその報告を省略しますが、そういう意見交換の場を持てたこと、活発な意見交換があったことだけは知っていてほしいと思います。

いずれにしろ、「秋桜」は３日間で４回上映し、７７１名がこの映画を観たことになります。手元にあるアンケートの多くに「感動した」「同じ世代の主人公に共感を持った」「もっと多くの人に観てほしい」とか、「ＡＩＤＳをもっと知りたい」というような好意的な感想が記されていました。反面「とらえ方が甘い」とか「映画の意図が判らない」というような意見も少数ですがありました。

今回、フォーラムに初めて参加した多く人たちは、この映画を入口に他のプログラムも平均して２つ以上参加してくれたようです。（約８００枚のアンケートの分析結果）

実行委員会としては、北海道や九州から手弁当で駆けつけてくれた主催者の方々、運営を支えた１６０名のボランティア、全国から集まった４６００名の参加者、と同様に考えるきっかけ与えてくれた映画「秋桜」にも感謝しています。そして、批判という形でも意見を寄せてくれた方々にも。

私たちのＡＩＤＳ文化フォーラムは、その時々のニーズに答えながら、新しい試みをする場所であり続けることを願っています。来年も楽しみにしていてください。

実行委員会としての説明は以上です。あとは個人的な感想です。「げんき」のＫさん、自分で感じたことを大事にしてください。ちがうと思うなら、納得できないのなら、上映運動に係わる必要はないよ！　無理すると辛くなるよ！

私自身も、この映画を六本木で観たときに、目からは涙が溢れたのですが、何か整理しきれないものがずっと残っていました。

そんな時、Ａｃｔのメンバーが書いた「鑑賞のおと」という文章を読んで少し楽になりました。転記しますので、紙面の都合がつけば載せてください。この他にも、Ｖｏｉｃｅ紙上の反応でＫさんが楽になることを願っています。

（かながわ県民活動サポートセンター通信、ＪＵＮＣＴＩＯＮ６号より転載）

－　鑑賞のおと　－　H.I.Voice・Act　成田右子

『この映画を観て「ＡＩＤＳ患者の苦しみが描き切れてない」と思う人がいるかもしれない。私が事実そう思った。体に起こる「病い」としての変化をほとんど描いていない。主人公・明子ちゃん役の小田茜は女優として最後まできれいなままだった。でもきっと「苦しさ」を見せようとしているのじゃない。

明子ちゃんには初めから寄り添う人がいた。自らカムアウトする勇気があった。友達もいた。理解力と行動力のある教師もいた。受入れ態勢を病院に相談する学校があった。

多分、日本国内に住むＨＩＶ感染者、ＡＩＤＳ患者の多くは、ここまで来るのに苦労している。　＝事実を受入れ、受け留めて、それでもなお自分の足で立ち、生きようと一歩を踏み出すまでに＝　本人、友人、彼らの家族、恋人、教師、地域住民。ＡＩＤＳという病気を受け入れるスピードは皆違う。でもね、ＡＩＤＳにもスピードがあるんだ。

“一人ひとりが恐れずに目を開かなければならない。ＨＩＶ／ＡＩＤＳを抱いて生きる彼らが「残された人生」ではなく、「生きる歓びにあふれた、誰にも変わらぬ今」を共有し合える日が、一日も早く訪れますように”

明子ちゃんのまぶしい姿に、まるで彼女の命のように咲き、はじける花火を重ね合わせて、この映画にはそんな願いが込められていた気がする。また、一人でも多くの人の「きっかけ」となりますように。

H.I.Voice 43&44合併号より

（月刊通信誌「H.I.Voice 」でも、「秋桜」の上映について様々な論議がありました。実行委員会の考え方も投稿しました。）

8日③－B　　シンポジウム(1)　「ＨＩＶ医療の可能性を探る」

主　　催／ＡＩＤＳ文化フォーラム実行委員会：岩室紳也（司会）
シンポジスト／・相楽裕子（横浜市立市民病院感染症科部長）　・今井光信（神奈川県立衛生研究所ウイルス部長）
・斉藤裕治（ぷれいす東京）　・福田啓子（神奈川県HIV保健センターカウンセラー・保健婦）

ねらい　　参加者数：８９名

・プロテアーゼ阻害剤を含めた治療の進歩でＨＩＶが検出できる限界以下までウイルス量を減らすことが可能となるにともなって、医療面での対応、対処方法だけではなく感染している方のニーズもこの１年で劇的に変化している。ＨＩＶに感染していることが以前のように比較的短期間に死に直結するのではなく、慢性的に経過する病気としてとらえられつつある。ＨＩＶに感染している人、サポートをする人（家族、一般、保健医療サイド、ボランティア）を含め、高度な専門的知識を持たない一般の方をも対象に、このような状況を医療面から正確に理解するとともに実際に感染している人々のニーズを明らかにすることを目的とした。

シンポジスト発言と全体討議内容

・ＨＩＶ自体に対する治療の進歩：「ＡＺＴ」だけしか利用できなかった時代と比べて「３ＴＣ」「ｄ４Ｔ」「プロテアーゼ阻害剤」と３剤併用療法が中心になってきた。ウイルス量が減少することやＣＤ４が１桁の人が３桁になるといった効果が認められている。その一方で１カ月の治療費が１８万円と高額であったり、１日に水分を１．５リットル飲まなければならない、と言った問題点もあり、患者の状況に応じた治療の選択をしなければならない。ガイドラインができているが必ずしもその通りの治療ができない。薬の飲み方が複雑なだけではなく、実際には薬を飲むとかえって副作用が前面に出る人もいる。

・日和見感染症の予防と治療：カリニ肺炎に対するＳＴ合剤による予防、カンジダ性の食道炎に対する予防も可能となっている。サイトメガロウイルスに対する治療は注射薬から内服薬になって患者の利便性が高まった。一方で結核を合併する人も少なくないがプロテアーゼ阻害剤と抗結核薬を併用できないというのがこれからの大きな問題点となる。

・ＨＩＶと検査についての基礎知識：ＨＩＶがＣＤ４＋のヘルパーＴ細胞に感染しその中でウイルスが増えることでＴ細胞が壊されていく。ＨＩＶに感染していることを確認する抗体検査、ＨＩＶ量を測定するＰＣＲ法（遺伝子を試験管の中で１００万～１０００万倍に増やし検査をする）についてスライドで説明。ウイルスの薬剤耐性の獲得はウイルスの学習で起こるが、複数の薬剤を使うことで薬剤の耐性が獲得しにくい。ＡＺＴを使っているとＡＺＴで押さえられているウイルスは増えないがＡＺＴが効かないウイルスが増えて耐性が獲得される。ＣＤ４は病状の進行の度合いを示す指標、ＨＩＶ－ＲＮＡ量は病状が進行するスピードを示す指標で、ＨＩＶ－ＲＮＡ量が減少すれば病状が逆戻り（ＣＤ４が増加）することも確認されている。

・性生活にまつわる問題点：

・３０歳代既婚男性（未告知）：感染していると思ったときから妻との性生活はない。コンドームは１００％安全ではないと考えている。妻は感染の事実を薄々感じていた。

・３０歳代未婚男性（未告知）：数年来交際しているパートナーと結婚予定。コンドームは使用している。こどもはつくるつもりはない。

・２０歳代男性（感染告知：職場にも告知）：交際中の女性と結婚予定。彼女には感染を告白している。本人の母親からの相談。相手の女性の母親から「何を考えているのか」とどなり込まれて困っている。父親は「本人達にまかせておけ」と逃げ腰である。

・１０歳代男性（感染告知）：ガールフレンドはつくるつもりはない。「楽しいはずの大学生活もまじめ一辺倒ですから・・・・・・・・」
思春期の男性の多くは「彼女はつくらない」と思って生活している。セイファーセックスについて誰が教えるのか、性生活は日常生活の一部である。主治医か、保健婦か。セイファーセックス＝セックスレスではないはずである。チーム医療としてサポートする体制が必要であり、誰が適任かを考えてほしい。
・インフォームド・コンセント：「病気と付き合う」ことを知らない患者が多いが、自分は「闘病生活」ではなく「病気と付き合いながらの日常生活」を送りたい。「治したい」という思いは「治ればいい」となり、「治らない」は敗北になってしまう。インフォームド・コンセントを実践するには患者自らが状況を把握することが必要になる。医療の中で最も重要なのは「インフォームド・コンセント」を受け入れる「時間」を確保することである。３剤併用療法を行った結果ウイルス量は減ったがＣＤ４が変わらなかったため、効果がないと思い込んでいる患者もいる。患者は医者とどうコミュニケーションをとったらいいかがわからない。なぜ、１．５リットルの水を飲まなければならないのか、ペットボトルをもって会社に行けない、同じ量の水分を飲んでいても副作用がでる人がいる。医者はいつも「大丈夫、大丈夫」としか言わないので、「大丈夫なら薬をやめたらどうなりますか」と聞いたら薬について詳しい説明を始めた例もあり医者も患者がどの程度話してほしがっているかがわかっていない。カウンセラーは本当に必要だろうか。病院にカウンセラーがいても医者が紹介しないため利用できない患者がいる。告知を受けた時に「話した方がいいパートナーはいますか」と安易に医師は聞くが「２度とセックスはするな」と言われているような気がして「死ぬまでセックスはしない」と思っている人が少なくない。「子供を作りたい」と医者に相談すると「作らない方が良い」と言われてしまう。
◎フロアから
・仕事をしている人はかなり制約がある。食間に薬を飲むときに周囲の人にわかってしまう。薬が増えたと言っても副作用が出たときに次の選択肢がない。ライフスタイルに応じた薬の選択ができるようになって欲しい。患者は土日の診療を希望している場合があるが開業医は営業上の問題あるいは住民のニーズに答えるために土日の開業をしている。（ＨＩＶ診療を行っている開業医）
・どの程度の薬を飲むのか具体的なイメージを。（中学校教諭）（薬をハンドバックではなく、リュックサックに入れて持ち歩くイメージ）
・「指導」という言葉に抵抗感がある。サポートの方がいいのでは。（小学校教諭）（サポートという表現が適切である。保健婦は「指導」に慣れており、カウンセリングで重要な「沈黙」が不得手）
・医者がカウンセラー任せにしないか。（カウンセラー任せにならないように気をつけている。派遣カウンセラーではなく保健婦を病院に常駐させる方向で検討して欲しい。）

感想
・私は患者の家族ですので、医療面・生活支援に関する問題を中心に関心があります。
・医療専門用語の知識がないので、口頭のみによる説明がわかりにくかったが、スライドでの説明は判り易かった。医療状況がシロウトにもわかるようなプログラムが欲しい。
・国立病院の看護婦です。このフォーラムに参加し国立病院は遅れていると感じた。
・医学的な知識がなくても、これから必要な事は十分わかりました。
・患者側の切実な体験談や意見を聞けたことは、ＨＩＶを理解する上で説得力があった。患者本位の治療、カウンセリングがされていない実態も知り、改善が必要と思った。患者の立場に立つことが、偏見や差別の撤廃につながると思う。大変参考になった。

9日③－B　シンポジウム(2)　「ＡＩＤＳ・教育現場からの挑戦」

主　　催／ＡＩＤＳ文化フォーラム実行委員会：岩室紳也（司会）
シンポジスト／捧陽子（中学校）、安藤晴敏、五十嵐多賀子、鐵俊之、近藤章子（高校）

ねらい　　参加者数：７０名

・「教育は最大のワクチン」と言われるようにエイズ教育が重要であることは議論の余地はない。しかし、実際には若者をどのように受け止めればよいのか、「性」をどう表現するか、どこまで教えるか、どう教えるかで様々な工夫がされている。教師が「エイズ教育」を行う上で苦労してきた過程、授業の組み立てでどう工夫しているかを紹介し、教師の熱い思いを知ると共に、問題提起としたい。

シンポジスト発言と全体討議内容

◎若者の性

・子供たちは待ってくれない。確かに性体験経験者や援助交際経験者がいることも事実だがすべての子供たちを同じように見ることはおかしい。マスコミの表現方法は一般に錯覚を与えている。
・中学１年生の生徒が「小学校のときに親の性交渉を見てしまった」との発言に対して「生殖としての性」だけの視点では答えられなかっただろうが「コミュニケーションとしての性」という視点で性教育を行っているので「ご両親のコミュニケーションの一つだったのでは」と答え、質問者本人も納得できた。
・保護者の理解を得てから性教育を行うべきであるという議論がある。
・子供たちと一緒に授業を作って行く姿勢が重要。
・学校の中で養護教諭が生徒の性と生のサポートをしていることをお忘れなく。

◎エイズ教育からの学び

・エイズだけが特別ではないはず。
・「エイズ」が学校教育を知識偏重から「生徒一人ひとりがどう生きるか」までも変えてきた。生徒に考えさせる授業を行うための工夫が必要になってきた。情報を選択する力をつけるためには新聞を読むだけではなく、それを自分なりにまとめさせている。
・知識の切り売りから生徒に考えさせ、選択させる力をつけることに力を使っている。
・自分で考えることができない生徒も少なくない。
・試験問題を作り、生徒を評価することを実際に求められている現状もある。
・エイズ教育を通して多様な生き方、多様なセクシュアリティを知る機会になった。

◎感染している人々

・感染している人と「共に生きる」という視点、感染している人の思いをどのように受け止め、伝えたらよいかを考えるために感染者に会う機会があった。しかし、感染している人と話す場面では実際には緊張してしまう自分に戸惑った。
・感染している人が「私のような思いをさせないように生徒に教育をしてください」という言葉が印象的であった。
・感染している人と知り合うことでその人が亡くなるという悲しい思いを経験できる。
・ＨＩＶをもっている人に会いたいという思いが生徒の中にも生まれる。
・感染している人から「生きる力」を学んだ。

◎授業の工夫

・公開授業はあくまでも授業の一つであり、ディベート方式からビデオ、新聞記事利用等の方法が行われている。

・「教科書を教える」のではなく「教科書で教える」ことが大切である。教科書に縛られるのではなく子供たちの現状にもっと目を向けるべきである。
・血液型を調べる授業を行った。よい授業であったつもりが、感染症の問題、出血傾向がある生徒の問題等で行わなくなった。
・科学は「正しい」と思っていたら、スモン問題等で科学者が言葉を濁す中でむしろ生徒の方が敏感に反応する。
・受験勉強ではない「エイズ」を教えることの難しさがある。高校でどこまで教えるかについては様々な意見が出る。
・ウイルス（ＨＩＶ）の立場から見ると性感染という広がりやすい経路をうまく利用して住み続けている。

◎生徒達の声の受け止め方
・保健室では生徒の何げない行動、何となく表現することをチェックし生徒の相談を受け止める。一人で聞きにくる子供は真剣。一度にすべてが解決する訳ではないのでコミュニケーションづくりに気を配っている。
・生徒の相談は「性の商品化」というより「日常生活の中での性」が圧倒的。
・性行為を行った後に初めて「エイズ」という問題を考えている。
・「妊娠」については情報が多いが、「エイズ」については情報量が圧倒的に少ない。「ねえねえ先生、うつるの」、「コンドームを使えばいいの」、「女の人からうつるの」という質問が出る。
・「妊娠」は１カ月経てば生理の有無で結論は自ずと出る。
・「やりてーよー」、「誰でもいいから」という男子生徒がいる。女子は「やりたい」という人は少ない。「あなたはやりたいの」「やりたいのは相手じゃないの」。
・「３カ月でセックスしないと捨てられる」という会話がある。
・その子が行動に移せるように教えることが難しい。検査の受け方はｺﾝﾊﾟｸﾄ に教える。

◎フロアから
・愛情の行く先にセックスがあった時代と現代の若者とのギャップを埋めつつ２１世紀を担う若者を育てていただきたい。（６０歳代：主婦）
・高校生の３割がセックスをしているという数字に囚われてはいけない。（元高校教師）
・感染者の方を学校に招いて話をきくべきかどうかではなく、本当に必要なら自然と来てもらえるようになるものではないか。（教員）
・「不特定多数」という表現を授業の中で使っていたがそれは「セックスをするな」と言いたいことなのか。（女性）
・予防は精神論、道徳論で若者に教育できない。（医師）
・「不特定多数」という表現はおかしい。人間は一回一回のセックスは非常にまじめにする。「人を見たら泥棒と思え」というのと同じではないか。（男性）

感想
・中高学校から、ＡＩＤＳ講演会の依頼を受けるが、現場の先生方の苦労を見聞します。保健、性教育の問題としてだけ捉えがちだが全教科で扱える教材となりうると思う。
・いろんな立場から、真剣に教育に取り組んでいる姿勢に、本当に勇気づけられました。
・教育が大切であり、先生方が教育の現場でしていることの意味は大変大きいと思う。しかし、その知識を使い、自分で判断し、行動化していくことはとても難しいと思う。生徒が自分に対し信頼感を持ち、他者をも信頼できるような自尊の教育が必要と思う。
・管内が文部省のエイズ教育指定地区になっているので、保健所医師として教育へのアプローチを始めている。本フォーラムの様子は管内の先生方に伝えていきたいと思う。

10日③－B　　シンポジウム(3)　「ボランティアって何だ！」

主　　催／実行委員会：吉永　陽子（司会）：多田由加里（ｲﾝｽﾄﾗｸﾄ&ﾌﾛｱｰ補助）
シンポジスト／池上千寿子（ぷれいす東京）
及川　欧（「ストップ・エイズ」ジャパン実行委員会）
大沢　紅果（防災ギャザリング）
重村　英子（かながわレッドリボンクラブ）

ねらい　　参加者数：７０名

・ＡＩＤＳを考えるとき、ボランティアは欠かせないキーワードのひとつであり、このフォーラムを支えているのもまさしくボランティアである。
・回を重ねる毎に応募団体の数も地域も広がっているが、果してこれらは参加者や実行委員会の自己満足に終わっていないだろうか？
・このシンポジウムでは、プログラムも９７年度の最終時間帯に配置し、原点に立ち返りボランティアについて参加者全体で再考する場とした。

ながれ

1　あいさつ、シンポジウムのねらい（司会）
2　簡単な自己紹介（シンポジスト）
3　テーマ１
「活動のきっかけと現在の活動報告」
⇨シンポジストの発表
⇨インストラクターにあわせて、ストレッチ体操、
BGM:“SPIRIT AM I”, Jay Minoru Inae,（全体）
⇨隣の参加者と交流（全体）
⇨質問意見交換（フロア）
⇨コメント（シンポジスト）～
4　テーマ２
「ＰＷＡ（被災者）とのかかわりの中で考えていること」
⇨シンポジストの発表
⇨インストラクターにあわせて、エクササイズ、BGM:“北酒場”細川たかし（全体）
⇨質問・意見（フロア）
⇨コメント（シンポジスト）

内容

◎テーマ１　「活動のきっかけと現在の活動報告」

・留学生で８２年ＰＷＡと会う。これを機に自身を振り返り、帰国後ＮＧＯを設立
・長期の米国生活後、帰国。当時の同級生が感染したのを知る。８０年代日本人のエイズに対する差別意識が高いことが調査で判明。そこで一般向けの啓発活動を開始する。
・５年前、エイズ報道に疑問を持ち、YMCAで開催された県のエイズボランティア講座に参加。そこから派生したゆるやかな連帯を特徴とするレッドリボンクラブの一員となる。
・新聞広告に掲載された神戸の震災ボランティアに募集し、春休みを利用して被災地へ。帰郷しても学生生活のかたわら後方支援団体での活動を続ける。これを機に自分自身の生活している地域の防災を考えることになる。防災ギャザリングという企画に参加。

◎テーマ２　「ＰＷＡ（被災者）とのかかわりの中で、考えていること」

・予防、啓発、ケアは分かれるものでなく相乗効果をもたらすもの。「ボランティア」という概念は輸入されたと思われているようだが、250 年前上杉鷹山が地域活動の理念として、次のような事を言っている。「忍びざるの心」：苦しみ、悲しみを相手の立場にたって共感すること、「三助」：自助、互助、公助というシステムの確立、「火種運動」：足元の火をかきたてて胸につける。これこそがエンパワーメントである。
・電話相談において最も重要なことは、「あらゆる性の姿を受け入れること」
・教育の基本は、生徒の側からの質問や反応にどう答えていくのかということ。日本におけるエイズ教育は今まで知識のみの風潮があり、心がおきざりにされこれが無関心を招いている。コミュニケーションを通して自分自身の中の差別に気がつくこと。
・何かしたいなと思ってそれをやるというのがボランティア、自然な心。
・いかに個々のニーズに合わせるのか。日本的な関わり、環境の中で、教わり、教え会う信頼関係をモデルがあるわけではない状況でいかに築いていくのかが課題。
・ボランティア仲間だけでなく、実際に仕事している仲間に相手にされることが大事。
・ボランティアは、ＡＩＤＳだけが難病でないことを理解して活動の幅をもってほしい。
・神戸に行かなくても、支援はできる。神戸が発信しているものを受けとめること、神戸の問題はそのまま自分達にあてはめる事ができる。防災を考えると人と人とのつながりの大切さがみえてくる。ボランティアを続けるためには、家族の協力と理解が必要。
・活動をすればするほどまだまだ知らないことがたくさんあるなと気がつかされる。

◎フロアから

・現在活動している地域では、ＰＷＡの直接支援をする機会はない。それで本当にいいのだろうか。いつも疑問を持ちながらの活動をしている状態。
・大学生に英語を教える時に学生とＡＩＤＳを考える機会があるが、それは、「性」について考える機会でもある。日本では「性」を語る土壌がないと感じている。
・エイズ予防について「性」の指導が画一的、一方的、管理的に陥りがち。「性」の多様性が認められるような方向性が必要なのではないかと思う。
・必要なときにどこかに連絡すると何とかつながっていけるようなシステムがほしい。
・行政を含め各地のボランティア団体から多くに情報、活動の提供、紹介あり。

感想

・いろいろな方（立場）の参加がうれしく思った、勉強になった。。
・ボランティアの基本、相手、コミュニケーション、それに続くネットワーク、相手の様々なニーズ。
・おどりを踊ったりしたところが一番印象的でした。

②－C　エイズの模擬授業（小学生対象・中学生以上成人まで対象）

主　催／性を語る会　　講　師／北沢　杏子　　協力／アーニ出版

ねらい　　参加者数：９１名

私は全国の小・中・高校や大学や養護学校・福祉作業所等の要請で年間２００時間以上の性教育・エイズ教育の公開授業やゼミなどを行っており、そのための発達年齢に応じた教材を山ほど制作してきた。それらを使っての模擬授業をフォーラムで実践し、性教育・エイズ教育に役立ててほしいと考え企画した。

ながれ

参加者の座席の向かって左側を小学生群、右側を中学生以上の成人群とし、前半は小学生向きに、白血球のスタッフ（食いしん坊のマクロファージ、司令官のＴ細胞、働き者のＢ細胞、喧嘩に強いＴ細胞、記憶するＢ細胞）の説明。これらのスタッフの活躍ぶりが、「はしか」の場合と「エイズウィルス」の場合とでは、どう違うかを紙芝居で私が演じてみせたあと、参加者が再演した。

小学生の保健の教科書（５、６年生用）には、「エイズ」の単元があるのだが、性感染症として扱っていないので、男女のイラスト掛図とマグネットで貼りつけるコンドームできちんと示し、感染経路について説明した。

中学生以上にはＨＩＶが最も多く含まれている体液「血液」「精液」「膣分泌液」「母乳」の他に、見落としてはならない「クーパー腺液」を加えた。中学生群の参加者にはクーパー腺液が理解できず、男性性器図のパネルで説明したところ、「あっ、がまん汁のことか」（爆笑）でケリ。

小学生群には教えなかったコンドームの具体的なつけ方、特に日本人男性の４０～５０％は仮性包茎と呼ばれる豊かな（？）包皮を持っていることから、仮性包茎の男性のコンドームのつけ方も模型を使って実習してもらった（これは岩室紳也先生発案）。

『楽しく学ぼう！エイズ教育』のキャッチフレーズにたがわず、会場全体が真剣でかつ、楽しい雰囲気に満たされており、教育効果も十分にあがったことが感想文からもうかがえた。なお、このフォーラムに参加した方々からの「模擬授業」の講演依頼が現在、各地からきており、来年のフォーラムに備えて、さらに新しい教材の開発と演技（？）の研さんにつとめているところだ。

感想

紙芝居をみんなで行ったり、講師と参加者全員が再確認しながら、学べて効果的だったと思う。予想以上に参加者が多く、会場が細長くて黒板や紙芝居が見えにくかった。会場の設営に工夫が必要（教員）。基本の基本のところから教えてもらえてよかった。保健の授業を、テストのための用語の暗記と考えて受けていたことを反省。エイズについて、きょう初めて深く勉強できたと実感した。同性愛の大石敏寛さんのビデオ（北沢先生制作）にも感動した（学生）。

連絡先
性を語る会
〒158-0097　東京都世田谷区用賀3-5-6
TEL 03-3708-7326
FAX 03-3708-7324

②－D　　朗読ワークショップ

主　催／H. I. Voice・Act　　協　力／H. I. Voice編集局

ねらい　　参加者数：３２名

1　ＡＩＤＳについて医学的側面（予防の知識、免疫の機能等）からアプローチするのではなくて、朗読という文化的アプローチによってＡＩＤＳにかかわっている様々な人たちの生活問題・人間関係の悩みなどを私たちの日常生活と照らし合わせ、問題を共有する試みをしたい。

2　「私」の考えを語るのではなく、「私とは違う誰か」の考え・思いを声に出して読むという作業を通じて「私」を考え直す機会としたい。

3　「私とは違う誰か」の文章を朗読すれば、その人の気持ちが分かる、というわけではない。やはり「私」には、「私」の考えや思いがある。そうやって自己と他者との違いが実感として得られることで感染者と未感染者の違いが、「あの世とこの世」の違いなのかそれとも「あなたと私」の違いなのか、皆で考えていきたい。

ながれ

1　趣旨説明（１５分）

・・これから何をするのか、どうしてそれをするのか、といったことを参加者が理解し、自らが望むかたちでワークショップに参加できるよう、会の趣旨を説明。

2　リラクゼーション（３０分）

・・知らない人たちの前で朗読をするというのは、思いの外、緊張する。ここではパームプリンティングというゲームを通じて「こころとからだの緊張」をほぐした。

3　朗読（４５分）

・・「H. I. Voice」誌（「朗読劇場」の頁参照）から抜粋した台本を参加者全員（３２名）で輪読した。

4　フィードバック・意見交換（３０分）

・・６～７人のグループを作り、朗読を終えて感じたこと、思ったことを自由に話し合い、最後にグループのなかで話し合った内容を皆の前で発表し、シェアした。

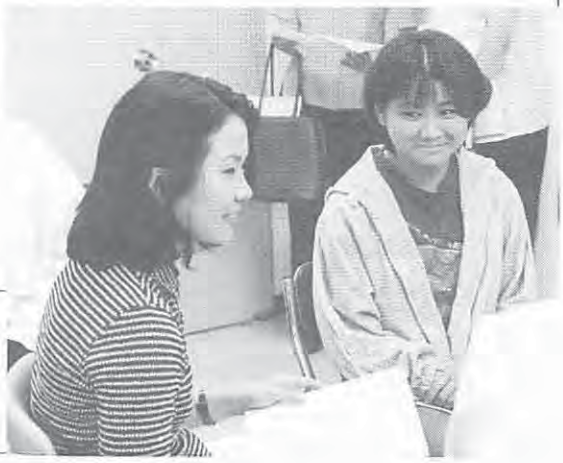
感想（参加者のアンケートから）

・朗読することでその人がどんな気持ちで文章を書いたのかが、少しだけ分かったような気がする。でもまだ他人事としてしか捉えていない。（女性・30代・養護・千葉県）

・私はずっとAIDSの人は子供が産めないと思っていた。それが間違いと知ってすごく嬉しい気持ち。（女性・10代・高校生・厚木市）

・参加してよかった。すごくいい文章で感動したし、雰囲気が和やかで読みやすかった。（女性・10代・高校生・横浜市）

・非感染者には見えなかった大切なものが少しだけでも見えた気がします。（女性・10代・学生・相模原市）



連絡先
〒236-0005　横浜市金沢区並木3-6-8-302
岡島龍彦　TEL&FAX 045-784-9659

②－E　鹿児島大学医学部病院裁判

主　催・講　師／中前　康友

ねらい・ながれ　　参加者数：３６名

（※主催者から報告書の提出がないため会場ボランティアの報告等より概要を掲載）

◎裁判請求の内容

本プログラム主催者である中前康友氏が国立鹿児島大学歯学部在籍中（1987年４月入学1996年６月退学）に、自身のＨＩＶ感染の診断（1994年１月）を同大学医学部附属病院第３内科により受けた。その後も、同内科をＨＩＶ感染症治療のため受診していた。また、感染の事実と学業を継続する意思を歯学部長に伝えた。感染症治療中に、歯学部教授からの症状照会に対し、カルテ記載事項を本人に承諾を得ることをせず説明した。この症状説明を基に歯学部教授会では、学業継続について賛否両論に分かれ、学内では、興味本位の噂が流れ、学生としての地位が微妙なものとなった。

中前康友氏は国を相手取り、上記病院第３内科の守秘義務違反の結果ノイローゼ状態に陥り、やむなく退学するに至り、精神的に損害を被ったとして民法第４１５条に基づく損害賠償として、１０００万円を請求した。　（主催者・原告の主張から抜粋）

感想

◎印象に残ったこと　・原告は金銭的でなく“意地”で裁判をしている…と言っている。
・地方では都会よりも偏見が強く、感染者との接触が少ないため医者も理解に欠ける。
・支援団体も目立つことはするけれど、いざという時は団体の意志が働く。
・裁判費用は父が退職後再就職して送金してくれている、長く地道な裁判になるかも。

◎自分がその立場になってみなければ、又経験してみなければ判らない事、言えないことがありました。同情することは今すぐにでも出来るかもしれませんが、気持ちが重たくなる様な（落ち込む…というのでしょうか？）…。

９月10日に２回目の裁判が東京地裁であるとの事、成り行きを見てみたいと思います。

◎中前さん大変と思いますが、心から応援していますので頑張って下さい。（「頑張って下さい」という言葉はきらいという人もいます。でも私は実際に心で応援しているだけなので「お互い頑張りましょう」なんて、おこがましくて言えません。実際に頑張っているのは、中前さん自身だからです。）今日、中前さんの本音が（がまんしていることも多分あるのでしょうが）聞けて、本当に良かったです。身体だけは大切にしてください。３年位前に長崎で話された時より素敵になっています。（お母さんの、親御さんの支えが今あるから変わられたのですか？）

連絡先

◎この裁判に関する詳細については、下記のホームページに掲載されています。
◎ご支援等のお問い合わせは下記の連絡先にお願いします。

ホームページ　http://www2.marinet.or.jp/~c-net/saiban/
Ｅ－ＭＡＩＬ　c-net@marinet.or.jp
電話番号　０３－３３５５－１８３６

②－F　キルトをぬいながらエイズを語る

主　催／ＡＢＣキルトの会

ねらい　参加者数：５１名

ＡＩＤＳ／ＨＩＶ感染の子供たちやエイズで親を失った孤児たちに贈るベビーキルト作りを通してエイズ問題を考えるきっかけとなるようボランティア参加してもらう。

ながれ

1　２時間の枠ではキルト作りに専念するかＡＢＣキルトのボランティアの詳しい内容の説明のどちらかになるため、会場をキルト作りと説明の２つに分け同時進行で行った。説明部分ではＡＢＣキルトがいくつかの学校で行われ成果が上がっている様子を紹介した。

2　横浜市中保健所から中区内の学校にＡＢＣキルト紹介の申し出があった。（その後フェリス大学からＡＢＣキルトを行いたいとの連絡があり、１１月１日の大学祭で行われた。また保健所内の母親教室でも行う予定）

3　突然死で子供を亡くした母親の会からは癒しのキルト作りをしたいのでＡＢＣキルトのキルト作りを参考にしたい。

4　伊勢原市でＡＢＣキルトの活動を始める人に活動にあたってアドバイスをした。（１１月の発足キャンペーンにベビーキルトを貸した）

5　キルト制作　２枚（途中）

感想

（参加者）

・自分で縫ったものが形となって出来、それがエイズの赤ちゃんに贈られるのでボランティアをしたという実感がある。

（会場ボランティア）

・若い方から年輩の方までほとんどが女性でしたが、マイペースで、しかも楽しみながら参加してました。AIDSというテーマをきっと各々はお持ちなのでしょうが、隣り合った人たちとの気軽なおしゃべりは世間話が主だった様な気がします。だから、もしかして長続きをしているのかもしれませんね。形として残るというのが実感として大きく他のシンポジウムとは違う点ではないかと思います。

（主催者）

・学校で行われているＡＢＣキルトについて参加者全員に話をする時間が取れなかった。ワークショップのやり方を工夫したい。

連絡先
ＡＢＣキルトの会
横浜支部　上村春子
〒233-0015　横浜市港南区日限山3-1-11
TEL 045-844-8124

②－G　　バリアフリー

主　催／ソクラテスプロジェクト
講　師／大本正樹・藤田太郎・藤田寛・長谷川俊雄・庄子忠雄・逢澤詳子

ねらい　　参加者数：５０名

私たちは皆、生まれながらにみずみずしい個性と感性を持つかけがえのない存在である。そんな私たちの「生きづらさ」を生んでいるものは何か。企業、地域、医療、教育の側面から問題提起し、セッションに参加した者たちが、ＡＩＤＳの問題の背景にあるバリアーの課題を自分の問題として捉えなおすきっかけにして欲しいと考えた。

ながれ

各パネラーは自分の実践の中からバリアーに関する意見を自由に述べてもらう。

司会進行：逢澤詳子（横浜第一病院ソーシャルワーカー）

1．企業における人権啓発の取り組み：大本正樹（株イトーヨーカ堂人権啓発室長）
　・企業におけるノーマライゼーションの理念の広がりへの取り組み実践。
　・見えるバリアーと見えないバリアーについて。
2．被災者支援活動の中で－被災地出身ボランティアーとして：藤田太郎（俳優）
　・「情報」のバリアーの問題について。
　・県内在住被災者と県外在住者との間にあるバリアーの問題について。
3．被災者支援活動の中で－ｿｰｼｬﾙﾜｰｶｰとして－：藤田寛　（横浜労災病院ｿｰｼｬﾙﾜｰｶｰ）
　・違いを認めることの必要性、必要なバリアーの存在について。
4．引きこもりの若者達との出会いの中で：長谷川俊雄（関内メンタルｸﾘﾆｯｸｿｰｼｬﾙﾜｰｶｰ）
　・自分自身を大切にする生き方に気づくことの大切さについて。
　・人と人とのコミュニケーションの中で豊かに生きること。
5．わが家で暮らす－地域との連携の中で－：庄子忠雄（横浜船員保険病院ｿｰｼｬﾙﾜｰｶｰ）
　・人がその人らしく暮らすことを支援する職業について。
　・高齢期の介護の課題について。

その後、触発された参加者に自由に意見交換をしてもらった。たとえば、精神障害者の問題に触れた学生は「他人の問題はなく、それは自分の問題である」と語った。

司会者は、日頃出会わない人同士が場を同じくし、異なる視点から意見を交換しあうことの大切さを確認し、そして互いの違いを認め合うことからみんなが豊かになっていくことこそエンパワーメントであろうと結んだ。

感　想

・はっきり言って、エイズとは関係のない演題でした。でも、こういった形で、他のボラグループも巻き込んで、今後もこの文化フォーラムが続いていけばいいと思う。

連絡先／ソクラテスプロジェクト
〒221-0835　横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2
かながわ県民活動サポートセンター
レターケース109 番
事務局　横浜第一病院
ソーシャルワーカー
TEL 045-453-6711

③－C　何ができるかＡＡＡと一緒に考えよう

主　催／ＡＡＡ（Act Against AIDS）運営事務局
協　力／（財）日本ユニセフ協会　大野公賀　　・ＳＨＩＰ　井上洋士

ねらい　　参加者数：２５名

このようなＡＩＤＳ文化フォーラムに参加する人は、かなりＨＩＶ／ＡＩＤＳについて日頃から勉強し、意識の高い人達が多いように思う。しかし、必ずしもＨＩＶ／ＡＩＤＳについて、皆が同じ認識を持っているとは限らない。そこで、私たちのまわりにいる人達が、ＨＩＶ／ＡＩＤＳについてどの様に考えているのかを、来場していただいた皆さんとざっくばらんに話し合い、その中で、お互いに普段何気なく感じていることを知り、各々の今後の活動に役立てて欲しいという目的のもと行った。

ながれ

1　参加者全員による自己紹介
2　ＡＡＡの紹介
　・　ＡＡＡの活動報告
　・　ルーマニアのビデオ映像放映
3　（財）日本ユニセフ協会大野さんによるユニセフの紹介
4　ＮＧＯの一つであるＳＨＩＰの井上さんによるＳＨＩＰの紹介
5　ボランティアとして普段からＡＡＡの活動に参加してくれている大学生のみんなに彼らが普段から思っていること、感じていることを話してもらった。
6　参加者全員による意見交換

感想

（参加者）

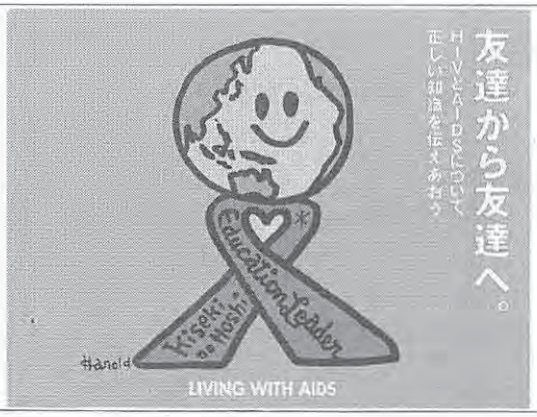
・参加者の意識が高かった。
・自分にできることから、何でもよいからまず始めることが大切だと思った。まだ、差別意識を持っている人の多いなかで、高校生や若い人の参加があり、大変嬉しく思った。

（主催者）

・このような意見交換の場は、とかく主催者側からの一方的な話で終わってしまうことが多い。今回、その点に注意して行ったつもりだが、幾分そのような雰囲気があったように思う。しかし、高校生からご年輩にいたる広い年齢層の参加者を含め、積極的に普段から自分が思っている疑問を投げかけてくださる方もいたため、結果的には、お互いの意見を知ることができたのではないだろうか。

連絡先
ＡＡＡ運営事務局

〒150-0012　東京都渋谷区広尾1-9-20
　　ＴＭ広尾ビル３階
　　TEL 03-3447-0419
　　FAX 03-3447-0358



③－D　Video Against AIDS －アメリカのAIDS市民運動－

主　催／（財）横浜市女性協会

ねらい　　参加者数：９名

アメリカの感染者支援団体や草の根の啓発グループの活動を、横浜市女性協会で日本語字幕を制作したドキュメンタリー映像を通して紹介する。特に、感染者の女性たちの活動の様子を伝えたい。

ながれ

ビデオ３作品を連続上映

1　「ヴォイス・フロム・ザ・フロント～エイズ市民運動最前線」
　監督：ザ・テスティング・ザ・リミッツ・コレクティブ
　アメリカ作品　１９９１年制作　９０分

2　「ダイアナの美容室」
　監督：エレン・スピロ
　アメリカ作品　１９９０年制作　２９分

3　「女たちのカミング・アウト～エイズなんかに負けられない」
　監督：エレン・スピロ
　１９９１年制作　２９分

感想

・アメリカの啓発グループ活動の力強さが印象に残った。政治家や研究者に実際に訴えかけ、またシステムを変えていく姿が頼もしかった。
・ＡＩＤＳ、ＨＩＶと一言で言ってもその中には人種、貧富の差、男女の差など様々な問題があることを知らされた。
・容易ではないけれど、日本もアメリカのように早く感染者や支援する人々が声を大にして問題を訴えられ、それが評価されるようになるとよいと感じた。
・内容は盛りだくさんだが、字幕でのビデオ上映が続き休憩時間もなくつらかった。

連絡先
（財）横浜市女性協会
フォーラムよこはま
〒220-8113
横浜市西区みなとみらい2-2-1-1
ランドマークタワー13階
TEL 045-224-2002
FAX 045-224-2009

③－Ｅ．Ｆ

コンドーム・バージン（女編・男編）

主催／かながわレッドリボンクラブ・横浜エイズ勉強会　進行／鹿股久美子・藤江直樹他

ねらい　　参加者数：４０名

男女間の新しいＳＥＸのルールを作成し、価値観や、モラル、生きる姿勢を問いなおす企画です。国際エイズ会議以降、ユニークで判り易い性教育に取り組む「横浜エイズ勉強会」と、かながわＡＩＤＳボランティア育成講座の卒業生で作る「かながわレッドリボンクラブ」の共同プログラムです。

ながれ

1　出会いの試み
　目を閉じて歩き、触れた人と背中合わせで自己紹介（２０分）

2　シナリオを読んで共感できるかできないか（２０分）

3　男女の最悪で別れるシナリオ作り（３０分）
　４グループに分かれて

4　４グループのシナリオ発表（３０分）
　他のグループの最悪のシナリオを最良のシナリオに書き換えてみる。

◎人と人が出会ってコミュニケーションしていくことを、
　自然に体験できるようにプログラムした。

感想

・男女関係－男性と女性とで、また、年齢によって受けとめ方、視点の違いが判ってためになった。
・コンドームバージンというタイトルと実際の内容の関連づけがわかりづらいと思った。男性・女性それぞれの立場で、率直な意見がでて楽しかった。
・いろいろな年代の人とふれあって話ができて、皆で何か一つの事をやり遂げたという充実感が良かった。逆に一回も発言できない人がいたのでもっと積極的にふってもいい。
・コミュニケーションを取るための動きが良かった。アットホームで発言しやすかった。
・性に関する価値観の討論と思い参加したが、狙い所の議論の深まりがいま一つだった。

連絡先

◎かながわレッドリボンクラブ
◎横浜エイズ勉強会
〒231-0014　横浜市中区常盤町１－７
　　横浜ＹＭＣＡ内ﾚｯﾄﾞﾘﾎﾞﾝﾌﾟﾗｻﾞ
TEL 045-662-3721
FAX 045-651-0169

③－G

ＡＩＤＳ福祉が欲しかった

主催・講師／加藤　孝

ねらい　　参加者数２５名

・1995年度の文化フォーラムで「感染者をどう思いますか？」という話をした、PLHA(Person Living with HIV/AIDS) の新井康和君が、97年４月に34才で息を引き取りました。
・約３年にわたり、彼と生活を共にした者として、特に1996年夏に左半身麻痺の障害を得て以来の介護体験から、①「こんなことがありました」ということを共有して欲しい。②出来れば、それを今後の人々の活動の参考にして欲しい。と思い、企画しました。
・「AIDSは病気なんだから、もちろん《医療》が必要だろうけど、実際暮らしてみると、《福祉》という発想が基本にあるべきなのだな」。ﾀｲﾄﾙにはそんな気持ちを表わした。

ながれ

１．報告　自分たちの体験から、
　・感染告知・セカンドカミングアウト・出会い・周囲の人々との関係作り
　・病気の持たされるイメージと、ケアの思想（酒飲みのＰＬＨＡとしての彼）
　・生活の実態と福祉制度（生活保護、引っ越し）
　・利用者からみたＮＧＯサポート活動（バディ派遣、資金援助）
　・公的な在宅介護サービスの活用（訪問看護、ホームヘルパー、介護用品）
　・障害者申請・交付のタイミングの遅れの実状
　・介護者に対しての支えの必要性－家族との関係
　其々の時点で彼の訴えていたこと、僕が感じていたこと等について話しました。

２．質問　参加者からの質問項目
　・生活上、ＨＩＶ以外の感染症に対して何か対策を取ったか？
　・現在交渉中のＨＩＶ感染者の障害者認定の基準についてどう思うか？
　・薬害エイズの運動に対してどう思うか？　・ボランティアは役にたったか？
　・病状・障害の変化にスピーディに対応していくには、どんなふうにＮＧＯや行政のサービスを組合せ、利用していけばいいと思うか？

感想

・95年のﾌｫｰﾗﾑで新井さんが病気よりもその人個人の生き方を表していてかっこよかった
・ＱＯＬを高めるために募金活動をしたというが、他の方法で色々出来たのではないか
・初めて実際に同性愛者に会い差別という点から自分を見つめ直すことが出来た
・実際の在宅ケアサービスのボランティアが足らないことを痛感した
・専門家でなく、素朴な感じの話がとっつきやすく聞きやすかった
・病気に対するｲﾒｰｼﾞ付けの恐さを再認識した
・自分たちを美化しすぎている・考えが甘い

連絡先
〒166 －0001
東京都杉並区阿佐谷北5-37-2
コーポA103号
「東京ＡＩＤＳ福祉勉強会」加藤　孝
TEL 03－3330－0324

④－C　ますます Positive

主　催／パトリック&紳也

ねらい　　参加者数：９５名

・ＨＩＶもPositive、生き方もPositiveなパトリックと友人兼主治医のドクター紳也が最近感じていることを語りながら、ＰＷＨの日常生活や医療の課題を考えていく。

ながれ　（パトが診療拒否にあい、怒り心頭の真っ只中の大激白）

・それはインジナビルの副作用から始まった。パトの体のなかの HIVは AZT、3TC 、そしてインジナビルを飲むことで検査してもウイルスが検出されない（でもどこかにはひそんでいる）状況にまで抑え込まれている。しかし、このインジナビルにはやっかいな副作用があった。ある日の午後、突然パトは具合が悪くなり、岩室の携帯電話を鳴らした。

パト：調子悪いよ。お腹がはって、しかも、おしっこの色が赤くなった。

岩室：それは尿路結石だと思うよ。痛み止めを使いながら水分をいっぱいとるようにね。あれだけ水分をいっぱいとるように言ったのにさぼったのかな。

パト：さぼったわけではないけど。わかった。そうする。　…（２時間後）…

パト：いま、家にいるんだけど痛くてしょうがない。なんとかしてヨ。

岩室：それじゃ医療機関にかかって注射をしてもらうしかないね。厚木まで来れる？

パト：とても無理。すぐ近所に大学病院があるんだけど。

岩室：わかった。そこに電話して頼むから待ってて。…（岩室は大学病院に電話）…

岩室：神奈川県立厚木病院泌尿器の岩室と申しますが、当直の泌尿器科の先生にうちで診ている患者の診察をお願いしたいのですが。

受付：泌尿器科の先生は学会で全員いません。内科の先生ならいますが。

当直医：結石の患者ですか。いいですよ。

岩室：念のため申し上げますが、患者はＨＩＶ陽性ですがよろしくお願いします。

当直医：（しばらく沈黙の後）少しお待ちいただけますか。（電話はハングアップの音楽が流れ待つこと２分程）うちでは残念ながらＨＩＶは診られません。この近くでしたら都立広尾や国立医療センターで診てくれますが。

岩室：（しつこく）ソセゴンとブスコパンだけを射っていただければいいのですが。

当直医：うちでは診られません。（の一点張り）

（このやりとりの間にパトは七転八倒し、たまらず吐いたその瞬間に石が膀胱のなかに落ちてうそのように楽になっていた。）

結局「医者も無知から診療拒否をする」という結論であった。その後のトークでパトは「ＨＩＶに感染したことは生涯で一番よかったことだ」、「（自分がしたことは）反省はしても後悔はしない」と前向きに生きている姿勢をみんなの前で披露した。

感想

・パトちゃんと岩室氏のトークの中に、医療の PWHに対する対応の実態やパトちゃんのPositiveに生きる姿をこの目で直接見ることができ本当に自分もがんばらなきゃと思った。

連絡先　◎パトリック（ｸﾗﾌﾞDJ、ｻｳﾝﾄﾞﾌﾟﾛﾃﾞｭｰｻｰ ）週間ＳＰＡに「パトが行く」を連載中
TEL&FAX　03-3422-5246
◎岩室紳也　〒248-0014　鎌倉市由比が浜2-16-13 神奈川県鎌倉保健所
TEL 0467-24-3900　FAX 0467-24-4379

④－D

ある日の保健室

主　催／ＡＩＤＳネットワーク横浜　講　師／中野　久恵　柴田日出子
協　力／阿部真理子・榊原　隆子

ねらい　　参加者数：２５名

エイズに関する啓発活動や電話相談活動の中で接する人々が、どのような性知識をどこで得て、どのような性に対する考え方をしているかを知ることの一つとして、小学校・高校の保健室からの、相談や授業についての報告を受け、これからの活動に資するものを得ることが大きなねらいである。

ながれ

① 小学校からの報告／エイズを理解し共生していくためのベースとなる性教育を実施した。「身体」「命」「心」を大切にする姿勢の育成を目標とした。低学年では性器の部位名称の不統一や周囲の賛否両論に悩まされた。高学年では、教科書では血液しか取り上げないがエイズの学習では性交の問題を避けるわけにもいかずに苦慮した。が、他から不正確で興味本位の情報が入る前に正しい知識と社会的に適合した性意識を持たせたいと考えた。

② 高校からの報告／自ら学び考え、よりよい行動の選択ができるようになる手助けをすることに主眼を置いた。保健室の活動として、少人数によるグループディスカッション中心の指導を行った。テーマは「ＨＩＶ感染予防で自分たちに何ができるか」「患者や感染者たちと共に生きていくには」等が選ばれた。よりよい男女関係のためのベース作りが大きな目標である。

③ 質疑応答とフリートーク

参加者感想

・具体的な問題の提起と、内容のある議論で非常によかった　（男性教師）
・保健室内にとどまらない教育活動の実例は、これからに役に立ちそうだ（教育系学生）

発表者感想

・現職教師、保健所勤務者、エイズボランティア、学生等参加者は多岐にわたり、ほぼ全員が発言する活発な会となった
・地味なテーマなので、資料のコピーを控えめにしたため、会場ボランティアの方に忙しい思いをさせてしまい申し訳なかった

連絡先
ＡＩＤＳネットワーク横浜
〒231-0045　横浜市中区伊勢佐木町2-66
満利屋ビル8 階
横浜ＡＩＤＳ市民活動センター内

TEL 045-262-8811
FAX 045-262-8812

④－E　PEER EDUCATION ― 女性から女性へ ―

主　催／高村　文子

ねらい　　参加者数：１６名

ＨＩＶ／ＡＩＤＳ教育の大切さが言われ続けていますが、この問題を自分のこととしてとらえ、自分の行動を変えていこうとすることは容易なことではありません。

知識として上から下へ「こうすべき」と教えるのではなく、エデュケーターと参加者が同じなかまとして、学び合うのがピアエデュケーションという方法です。

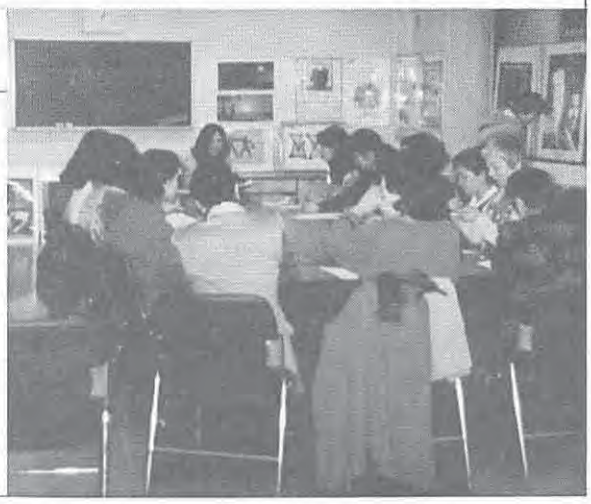
女性であるエデュケーターが、同性の参加者と女性にとってのＨＩＶ／ＡＩＤＳの問題について一緒に考えることで、自分はどうしたいか、どう思うかなど、参加者自身が自分の行動について、自分で判断し自己決定していくことをねらいとしています。

ながれ

1　エデュケーターが公認を受けて活動しているライフ・ファウンデーションのインストラクターとしての役割について
2　アイスブレイク（エイズに関する連想ゲーム）
3　知識の確認
　ＨＩＶについて
　ＡＩＤＳについて
　感染と女性にとっての感染リスクについて
4　コンドーム交渉術
　提示されたシチュエーションにおいて、どうやってパートナーとの関係を崩さないでコンドームをつけてもらうことを承諾させるかのロールプレイ
　パートナーを演じることで、相手の気持ちにも気づく
5　Ｓｅｌｆ－Ｅｓｔｅｅｍ（自己評価を高める）
　自分の欠点を取り上げ、それに対して良い評価をしていくことで自己の評価を高めるアクティビティ

感想

・差別や偏見や、感染者・未感染者の個という面でずっとＡＩＤＳを考えてきた「病気」としてのＡＩＤＳを分かりたいとやっと思えてきた
・集まった人数もフリートーキングには最適でした
・自分がものを考えて参加できる空間でした
・Ｓｅｌｆ－Ｅｓｔｅｅｍが良かった



連絡先
高村　文子
〒228-0802　相模原市上鶴間4008-9, 3F
横浜ＹＭＣＡ相模大野ステーション

TEL 0427-40-5501
FAX 0427-40-5503

④－G

最新のウイルス学

主　催／玉川　重徳

要旨　　参加者数：１５名

エイズの流行で、失われていた感染症に対する関心が戻り、以来、多くの耳新しい感染症の名がメディアを賑わわせているが、そこには感染症に対する感情的な過度の恐怖が見られる。しかし、感染症に対する冷静で科学的な理解と警戒心こそが重要である。

１９４５年の第２次世界大戦終結以後の感染症の歴史をみると、一般に知られるようになった新種の感染症や病原体は５０種類に達し、その８０％はウイルスである。また、文明国では一度は駆逐され、再び流行するようになったものは２０種類あり、その４０％は最近である。それらには、抗生物質に高度耐性のものもあるが、多くは抗生物質の効果が期待出来るものである。

感染症の流行を歴史で見ると、民族の移動は黒海地域の地方病ペストを、コロンブスの新大陸発見は同地の地方病梅毒を旧大陸へ運び世界へ拡散するきっかけとなった。エイズウイルス（学名ＨＩＶ）もアフリカから欧米に渡り世界に拡散した。一方、アマゾンに作られた産業道路は、インフルエンザや麻疹を運び、道路完成後の１年で、原住民の人口を３０％に激減する悲劇をもたらした。エボラ出血熱の罹患者は限られた地域の住民と動物の研究や移入に関わった者たちであり、梅毒やエイズは性行為や輸血で拡散した。これらは、民族の交流は文明の発展に寄与するが、感染症のリスクをともない、交通機関や輸血などの技術の発達や資源の浪費、不用意な性や権利の主張は、物理的、生態的防壁を破壊して感染症の拡散をもたらすことを示している。動物の移入や臓器移植の技術にも、不用意な輸血や血液製剤の輸入と同じ未知のリスクを伴っていることを示している。

新しい感染症の流行に対する理解を見ると、病原体の変異による強毒化と捉えようとする傾向がある。実際に、微生物の変異、薬剤耐性化はしばしば見られる。しかし、一方では、Ｂ型肝炎やヘルペス、サイトメガロの各ウイルスは人体に持続感染しており、エイズでは、十数年も前にヨーロッパで分離されたＨＩＶを材料にして作った抗体検査診断薬で現在のわが国で発生した新たな感染者の抗体検査診断できるという事実があり、ウイルスは変異するとはいえ、変異や免疫能が流行の原因や免疫抗体がありながらウイルスが排除されないこと、あるいは感染が必ず免疫応答を呼ぶとも決まっていないことを示しており病原体の変異や免疫能の強弱では個々の感染者の病態の違いを説明することは出来ないことを示している。すなわち、それらは免疫とは関係ない動的バランス、カオスの中の秩序という複雑系の数理学的関係によって決まるものであるということを示している。

つまり、生命の存在を可能ならしめる原理は、現象と遺伝子とを１対１に対応させる、あるいは他の存在を厳格に否定することによってのみ己の存在が可能であるという構造ではなく、生物種の間の、そして種の中では個体間のバランスのあり方が、存在の可否を決めており、それが生物社会の意義であり、その中で、リスクを持った者を切り捨てない精神の存在が、人間社会と動物社会の違いであるということを示しているといえる。

感　想　・感染症を防ぐのは、人間一人ひとりの心の持ち方であるということ、ウイルスも子孫を残すために、資源を大事にしウイルスが絶滅するような感染のあり方はない、免疫の意義も、病気の全てに抗体ができるのではなく、子孫を残すために妊娠中の子に大きなダメージを与えるような病気に免疫ができることなどが良く判った。

連絡先　玉川重徳（玉川医院）　TEL/0471-63-4321　　FAX/0471-60-2301

①－D　Ｖｉｄｅｏ　Ａｇａｉｎｓｔ　ＡＩＤＳ　－教育とＡＩＤＳ－

主　催／1997　ＡＩＤＳ文化フォーラム　in　横浜実行委員会　　講　師／高村文子
協　力／町田市立国際版画美術館・神奈川県衛生部保健予防課

ねらい　　参加者数：１６名

海外におけるエイズを主題として制作されたビデオの上映。エイズはある限定された地域の問題ではなく地球規模の問題です。このセッションでは、町田市立国際版画美術館収蔵の海外のビデオから、教育、啓発、ボランティアの視点で４作品を選び上映した。

ながれ

1　主催者による説明
　Ｖｉｄｅｏ上映の目的の説明
　字幕がないことのお断り（参加者には対訳本を配付し参照していただいた）
　各作品の内容説明

2　Ｖｉｄｅｏ上映（１時間３１分）

①　ダイアナの「髪のわがまま」美容室：ありのままのエイズ情報（1989年）28分
アメリカで黒人社会のためのＨＩＶ感染予防に従事するボランティアのダイアナが主人公。彼女が経営する美容院での感染予防教育をドキュメンタリーに描いている

②　セ・メット・コ（1988年）30分
ハイチを舞台に、人々のエイズに対する意識に焦点を当てたドラマ

③　面倒だけど・・・・・・（1988年）　6分
ナレーターによって強調される安全なセックスの方法。あっけらかんとしていてしかも効果的な解説

④　コンドームなしは、お断り！（1993年）27分
ブラジルリオデジャネイロの路上で暮らす子供たちを取材した映像

感想

・Ｖｉｄｅｏの内容は、身近に感じられるもの、分かりやすいものでよかった
・字幕があればもっと楽に観ることができ、細かいニュアンスも伝わったと思う
・日本においても４本のビデオのように、知識をしっかりと持った人によって、様々なところで教育を受ける場、情報が与えられる場を提供されなければ、自分たちを守ることができないと強く感じました
・エイズの基礎知識についてビデオを通して再認識しました
・今までに私が受けたＡＩＤＳ教育は講義形式の概要でしかなかったので知識だけ。ビデオで観たような方法なら、もっと入りやすく、分かりやすくなると思います

連絡先
ＡＩＤＳ文化フォーラム実行委員会
高村　文子
〒228-0802　相模原市上鶴間4008-9, 3F
横浜YMCA相模大野ステーション
TEL 0427-40-5501
FAX 0427-40-5503

Ｖｉｄｅｏ　Ａｇａｉｎｓｔ　ＡＩＤＳ
ＦＩＬＭ問い合わせ
町田市立国際版画美術館
学芸員　箕輪　裕
〒194-0013　町田市原町田4-28-1
TEL 0427-26-2771/0860
FAX 0427-26-2840

①－E　はじめての性教育 ―― 乳幼児をもつママへ

主 催／ＣＳＲ（Child Sexuality Research）　講 師／岡村聡子

ねらい　参加者数：１７名

エイズの最大の予防は教育であるといわれている。子どもに初めて出会う母親が子どもからの性に関する素朴な問いに明るく素直に答えること、子どもの性を抑圧せずに見守る姿勢が、ひいてはエイズの話題を共有できる親子関係につながるのではないか。そのためには母親自身が自らのセクシュアリティの抑圧に気づき、そこからの解放を目指す必要がある。そうは言っても簡単なことではないので、このプログラムではゲームで心ほぐしをし、少人数のグループディスカッションで子どもの性器についての話題から導入して、母親に女性としての自らのセクシュアリティについて考えられるようなテーマへ移行するよう構成した。そして最後にエイズを身近に感ずるテーマを用意して、他人事ではないエイズ問題を参加者に心理的な負担にならないかたちで実感されることをねらいとした。

ながれ

参加者にあらかじめファーストネームを書いた名ふだを胸につけておいてもらう。

1. 心ほぐしのゲーム
   ①じゃんけんゲーム　②名前呼びゲーム
2. グループディスカッション（１グループ６～７名）
   ①お子さんのおちんちんの皮をむいてペニスを洗っていますか？
   お宅の”おちんちん事情”について話し合って下さい。
   ②お宅では女の子（あるいはママ）の性器を何と呼んでいますか？
   ③子どもから「ママ、ぼく（わたし）どこから生まれてきたの？」「赤ちゃんはどうやってできるの？」と問われたらどう答えますか？
   ④ロールプレイ　20歳になったあなたの子どもがあなたにHIV+の検査結果が出たことを告白しました。あなたは子どもにどう対応しますか？
3. フォローアップ
   ①各グループごとに意見発表してもらう。
   ②講師から補足説明
   ペニスの大型模型（ぬいぐるみ）を使ったり参考文献の絵本を紹介しながら、率直に明快に子どもに対応すること、親が自分自身にウソをつかない姿勢が家庭での性教育の基本ではないか。それにはまず母親自身が性を暗い閉ざされたものと考えず、生命の源でありダイナミックなものととらえる必要があるのではないか。

感想

・グループにわかれてのゲームにより参加者がうちとけてスムーズに話をしていた。
　この種の講座は、講師が一方的に話をするだけと思っていたので、強い印象を受けた。
・無理なく話ができる雰囲気でよかった。女性器の呼び名でもりあがった。
・会場の人との交流ができてよかった。
・午前中のプログラムということもあったが参加者が少ないことが残念だった。
・このプログラムには保育が必要。今後、参加者向きの保育について検討して欲しい。

連絡先　ＣＳＲ
代表　岡村聡子　〒232-0042　横浜市南区堀ノ内町1-72　TEL & FAX 045-711-2545

①－F

タイ女性支援から学んだこと

主　催／かながわ・女のスペース“みずら”　かながわレッドリボンクラブ

ねらい　　参加者数：２７名

エイズ末期患者のタイ女性の帰国に際して“みずら”が中心になり支援活動がなされたが、レッドリボンクラブも初めて具体的支援として募金を行った。患者が微妙な状況のため、募金も二転三転して、結果として釈然としない気持ちが残った。このことが事例研究するきっかけとなった。この支援活動の事例報告と、これを通して問題点を探る。

ながれ

1　レッドリボンクラブの自己紹介
2　“みずら”による事例の経過説明（資料に添って）
3　三つのグループに分かれて、話し合い
4　各々のグループの発表
5　“アジア友好の家”木村ご夫妻の話とそれについての質問
6　“みずら”による締めくくり
7　主催者挨拶

感想

（参加者）

・行旅法のことが何回かでてきたが、怖いのはこれが簡単に使えると思われることです。病院のＳＷが、これを使うには「嘘」「作話」「ｼﾅﾘｵ」を作らなくてはならない程、厳しいものだということを、これからのボランティアの方たちには知っておいて欲しい。
・一番印象的だったのは全体像を学ばなければいけないということ。学ぶことは数多い。
・日本の中のアジア人が抱えた問題、現状を知っている人から生に聞けた。ものすごくショックな現状があった。アジア友好の家の木村夫妻に出会えたのは一生の宝です。
・「AIDS」「HIV 」は切り口の一つにすぎないことを改めて感じた。

（主催者）

・スムーズな解決法の方向を皆で探りたいという狙いは、途中までしか果たせなかった。
・予定外で当事例をよく知っている“アジア友好の家”の木村ご夫妻の話を伺えた。
・当事例のみならず、外国人支援の現場の話を伺えたのは、貴重な経験であった。
・今後、同様なケースが起きた時に、募金活動以外にどのような支援が私たちのようなボランティアグループにできるのかという問題はこれからも考えていきたいと思う。

連絡先

◎かながわ・女のスペース“みずら”
〒221-0057
横浜市神奈川区青木町2-1-613
TEL 045-451-3776　FAX 045-451-6967

◎かながわレッドリボンクラブ
〒231-0014
横浜市中区常盤町１－７　横浜YMCA内
TEL 045-662-3721　FAX 045-651-0169

①－G　　ＡＩＤＳ教育公開授業 ― 小・中学校編 ―

主　催／Bee hive Ichikawa
講　師／捧　陽子　　協　力／小野かつき・大村　敦子

ねらい　　参加者数：８０名

教育が最大のワクチンといわれ、ＡＩＤＳ教育が様々な形で模索されている。その中のいくつかを紹介して、さらに充実したものにしていきたいと考えた。

ながれ

1　ＡＩＤＳと共生
　ビデオ教材、キルトの紹介などを中心にした授業の紹介

2　感染シミュレーション（行動シミュレーション）
　自分も知らないうちに感染したり、人にも感染させているということと、自分の行動によって、感染予防につながることに気づいてもらう。

感想

・ビデオのなかに出てきた自転車店の男の人の話が印象に残った。身近に出来事が起こらないと全て、他人事になってしまう。自分のこととして見ることが出来ず、差別やスポイルすることをしてしまうのだなと思った。これらはとても考えさせられた。
・ＨＩＶ感染シミュレーションが、実際に動けるという点で、小中学生にとっては面白いだろうと思った。代表でシミュレーションを行った人に子供たちの興味のある芸能人の役を与えたのはとても面白く、子供たちも楽しく勉強できるのではと、思った。
・感染シミュレーションに芸能人の実名を出すことは、人権的に問題がある。
・今回の授業は、ビデオ、シミュレーションなど、視覚に訴えるものが多く、とても判りやすいものだった。来場された方も多く、シミュレーションを行うには会場が、もう少し広い方が良かったと思う。
・ＨＩＶ感染シミュレーションに加わってとても大事な体験ができたと思う。相手の意志ももちろん大事だが、自分の立場をはっきりさせ、確固たるものにし、相手に意志表示できるかが、ＨＩＶ感染するかしないかに大きく係わってくるのだなと、あらためて感じた。
・小学校６年の担任をしています。いろいろとヒントになるものもあり、これから学校で同学年の先生方と十分話し合って授業をつくっていきたいと思います。
・「エイズの問題は終わり」という周りの反応に「それではいけない」との意見に同感

連絡先

Bee hive Ichikawa
PWH/A とAIDSに影響を受けた人の集まり
〒272-0022
千葉県市川市鬼越2-6-16
TEL 047-334-8881

毎月第４土1:30～定例会
市川教育会館

②－B　“みずら”から見た外国人女性への人権侵害

主催／かながわ・女のスペース“みずら”　講師／福原啓子

ねらい　　参加者数：５５名

年間１４００万人の日本人が外国に出かけ、４００万人の外国人が観光や仕事や定住のために来日していると言われている。その中には違法な形で女性たちを日本で働かせるために組織的に連れてくるようなケースや日本人との国際結婚のためにやってくる女性たちなどがある。まさに地球規模で人々が動いていると言える。

そうした動きは急速に外国人の定住化をすすめているが、同時に外国人を取り巻く状況は必ずしも良いとは言えない。外国人女性の人権状況はどうなっているのか、「みずら相談室」から見てみよう。

ながれ

①“みずら”が最初に出会った外国籍女性から教えられたこと

１９９１年、初めて人身売買で日本に連れて来られ売春を強要されたタイ女性の緊急保護をおこなったことから、日本社会の外国人女性の人権状況に驚かされると同時に、私という日本人の女としての立場を問われるものであった。

②国際結婚・離婚のケースから考えられること

少子化と日本人女性の非婚化の傾向の中で、国際結婚（夫日本人、妻外国人の組み合わせ）が増加している。その中でもアジアの女性（韓国、中国、フィリピン、タイなど）との国際結婚が多い。しかし、男性の結婚観は、女性に一方的にサービスを求めるものであり、気に入らなければ暴力をふるい、離婚にいたるケースもまた増加している。

③病気にみる外国人女性の問題

医療制度の枠の外にある、特にオーバースティの女性たちは死に瀕する状況にたたされるまで医療を受けることができないという現実がある。精神的に病んでしまった女性、病気で役にたたなくて路上に置き去りにされた女性、ＡＩＤＳの発病により、帰国を希望する女性の帰国支援のケースなどから生命をかけた非人間的状況を窺うことができる。

④子供の問題

見えない存在として、出生届が出されていないオーバースティの親の間に出生した子供たちの問題がある。子供の成長にともなって顕在化するであろう子供達の問題は血統主義の日本社会の問題として考える必要があろう。

感想

上記四点の問題提起に基づいて、グループに別れて身の回りに起こっている外国籍女性の状況を知ることと、援助のあり方について話し合った。オーバースティという法的には問題があっても、人権は守られなければならないというところから出発したい。

連絡先
かながわ・女のスペース“みずら”
〒221-0057横浜市神奈川区青木町2-1-613
TEL 045-451-3776　FAX 045-451-6967
郵便振替 00230-7-64695 かながわ・女のスペース“みずら”
「みずら相談室」TEL 045(451)0740
月～土／14時～17時　月～金／19時～21時

②－C　ONE WORLD AIDS POSTER

主　催／ＨＩＶと人権・情報センター東京　　講　師／五島　真理為

ねらい　　参加人数：２７名

ポスターは視覚を通じて、見るものの意識を変える力をもっています。とくにHIV/AIDSに関するポスターは言葉にのりにくい情報を的確につたえるすばらしいものが多く見受けられます。ＪＨＣ所蔵の世界各国のＨＩＶポスターの中から優れた作品を選び出し、展示するだけではなく、ボランティアのかたがたにその意味を理解していただき、来場された方々に説明をしていただきます。ポスターは国別、テーマ別に分けられています。

ながれ

◎会場の中央には製作途中のメモリアルキルト、フレンドシップキルトが置かれてあり、数人の人がしゃがんで針と糸をもって縫い付けている。

◎香が焚かれ、ディスプレイされたポスターがある。

◎１３：００の開始時間とともにポスターツアーが開始され、その日ボランティアとして参加した人達にそのポスターの意味、製作意図が説明されて行く。

◎ポスターの意味を理解したボランティアさんが、ポスターを観に会場を訪れたひとたちに一人ずつついて、ポスターの説明をしていく。

感想

・ポスター、キルトにいろんな意味があることを知り、すごく勉強になりました。
・今、世界でこの問題に取り組んでいるんだなと言うことがよく分かりました。とても和気あいあいとしていて、たくさんの人が参加していて驚きました。
・会場そのものはわりと静かな方だったと思います。説明される方、聞き質問するかたたちの声でざわめく程度だったと思います。ＨＩＶ／ＡＩＤＳについて今までまったく知りませんでした。関心はありましたが今回ボランティアとして参加できてよかった。
・高校生からいろんな年齢のボランティアさんがいて、いろんなひとがＡＩＤＳについて関心をもっていることが分かりました。

連絡先

ＨＩＶと人権・情報センター
〒101-0048　東京都千代田区神田司町
2-17-4　風間ビル2F
TEL/FAX　03-5259-0622
E-MAIL　KYG00425@niftyserve.or.jp

②－D　「いのちの輝き」石田吉明フォトエッセイより

主　催／滋賀エイズを考える会　講　師／岡崎基子　協　力／石田吉明氏御家族

ねらい　　参加者数：２１名

エイズに苦しみながら、生きる喜びを綴った故石田吉明氏のフォトエッセイをスライド上映により紹介しながらＨＩＶ感染者・患者の想いを伝えることにより、感性を通してエイズを理解し、関心を拡めていくことを目的にしています。

ながれ

1　滋賀エイズを考える会の紹介（１０分）
エイズを生きる人々の想いを感性（映画、歌、Ｈ．Ｉ．Ｖｏｉｃｅ朗読）を通して紹介することによりエイズを身近なものとして拡めていゆきたい。

2　故石田　吉明氏のフォトエッセイのスライド上映とエッセイの朗読（２０分）
・自然の風物に託して、生命の輝きと、はかなさと、人為的に感染させられた憤りを静かに語りかけるエッセイは迫力がある
・“今、ここに居る理由”参加していることを発表することにより参加していることの意識づけをする

3　ワークショップ（２０分）
・突然朗読者として指名され、石田吉明氏自身になったつもりで読ませていただいた
（宮崎県都城市　男性　４０才）

感　想

・すごくきれいなスライドをみた。いつか自分がいったことのある風景もあり、私の記念写真とはぜんぜんちがうと思った。ＡＩＤＳにかかって世界をみる人と、いつも健康が当然と考える私とのちがいからだろう。その後のディスカッションで、いろいろな人が関心をもっているので驚いた。
・「医療が進んでいる日本でありながら、なぜＡＩＤＳに対する認識が低いのか？」と考えた助産婦さんがＡＩＤＳの勉強を始め、こんなふうに協力してくれる人たちと一緒に活動を継続している姿に、日本のＡＩＤＳ対策の可能性を感じた。

連絡先
滋賀エイズを考える会
〒520-0500　滋賀県滋賀郡志賀町
478-1 プレマジュール503 号
代表　岡崎　基子
TEL/FAX077-594-4436

②－E　マザーテレサとその活動

主　催／グループＰＡＺ　　講　師／石川裕之神父　相沢雅子氏
協　力／カトリック横浜教区福祉委員会

ねらい　　参加者数：８０名

もっとも貧しい人や、社会から見捨てられた老人、身障者などに仕えるマザーテレサの愛の実践活動を通して現代社会が直面している生と死の問題を考える。

ながれ

・石川裕之神父（カトリック小田原教会）の話　３０分

インドでの３年間の生活及び最近の渡航からインドの気候、食生活、カースト制、幼児の売買、売買春、下層階級民や山岳少数民族の生活など現在のインドの人々の状況を説明

・ビデオ「マザーテレサの遺言」の上映（制作：プロボービス）４５分

今世紀最大の平和の使者と云われている８６才の彼女自身が死を目前にして、この世の人々に贈るメッセージを、迫力ある声と人間味あふれる笑顔で語りかけるドキュメント

・相沢雅子さんの話　３０分

現在障害児施設で幼児教育に携わることになった原点－インドへ行きマザーテレサの施設で共に奉仕活動に励んだ体験を話す

＜質疑応答＞
＜アンケート記入＞

感想

・場所柄、若い人の参加が多かった。（参加者数８０人）
・部屋に入れない人も出たが静かに真剣に聞いてもらえた。
・マザーテレサへの関心の深さが感じられた。
・参加者の一人一人が何かを模索している様子が伺えた。

連絡先①

㊦231-0023　横浜市中区山下町225 横浜YWCA内　グループＰＡＺ TEL　045-681-2903
㊦236-0005　横浜市金沢区並木2-6-11-302　大高　ゆみ子　TEL/FAX 045-786-8586

②－F　キルトディスプレイとテディベアワークショップ

主　催／メモリアル・キルト・ジャパン　講　師／橋田・福井・岡部

ねらい　参加者数：３２名

・ＡＩＤＳメモリアルキルトの紹介を通し、なぜこれらがＡＩＤＳで亡くなられた人の記録として生まれ、それに布が選ばれてきたのかを理解してもらう。
・テディベアを作りながら、ＭＱＪの活動の一つである「テディベア基金」を紹介し、無理せず身近にできるボランティアの一つとして、テディベア作りを提案する。
・布に触れ縫う作業を通して、ＨＩＶ感染症／ＡＩＤＳについて身近に話せる雰囲気が生まれることを体験してもらう。

ながれ

1　メモリアルキルトのディスプレイ
2　ＭＱＪの活動紹介
3　テディベア基金についての説明
4　テディベア作り
　・スタッフが二手に分かれ作り方を説明し、一斉に作り始める
　・スタッフは巡回しながら、途中作り方の説明、その補足やＨＩＶ／ＡＩＤＳについての話題提供をして、話し合う
5　並行してメモリアルキルトのディスプレイ
　・テディベア作りには参加できないがキルトを見たいという人も多くあった
6　感想を話し合う
　・尚、作成途中で時間の許す方には、ブースで作り上げていただく

感想

・キルトの実物を見たのは初めてでした。確かに一人の人が亡くなったということをひしひしと感じました。時間がなく一心不乱にテディベアを作ったので、雑談しながら作れたら楽しかっただろうなと思います。参加者は全員女性でした。
・パッチワークキルトという媒体が女性によって作られた女性による抗議だったということを初めて知りました。すごく温かい空間で縫うことによって少しずつＡＩＤＳへの偏見が薄れていく感じがしました。
・今日は完成しませんでしたが、周りの人達と話をしながら楽しかったです。
・痛みをやわらげてくれるもの（欧米では痛いところにテディベアを押しつけるとその痛みをとってくれるという習慣がある）としてのテディベアを作った。

連絡先
メモリアル・キルト・ジャパン
〒532-0004
大阪市淀川区西宮原1-6-60
プラザ新大阪216
TEL06-350-9286
FAX06-350-9287

②－G　エイズ教育公開授業　－　高等学校　編　－

主　催　　高等学校教員有志　　講　師　　五十嵐多賀子・鐵　俊之・安藤晴敏

ねらい　　参加者数：１２０名

２０歳代の感染者が増加している現在、１０歳代の若者を抱える高校の責任は大きく、ＨＩＶを始めとする性感染症等、性に係わる問題と日々格闘している昨今である。

日頃、教室で実際に行っている授業を一歩外に飛び出して高校における授業を多くの方々に見ていただき、高等学校での現状や問題点等を掘り出すことをねらいとした。

しかし、この公開授業の大きなねらいは、現職の高校教師が教室を出て、一般の方々を前に公開授業を行い、この文化フォーラムに参加し啓発活動のお手伝いができるとこに意義がある。

ながれ

■　健康教育のとらえ方

健康教育は知識偏重ではなく、正しい知識が、生徒一人ひとりの適切で正しい行動に結びつけられなくてはならない。健康教育の最終目標はその「行動変容」にある。

■　高等学校における教科内連携

エイズ教育は一つの教科内の学習内容に止まらず、関連教科の各教科特性を生かした取り組みによってより以上の効果を上げることができる。

■　「科目・保健」におけるチームティーチングを導入した授業展開の実践

「科目・保健」において、ＡＩＤＳに関して生徒の興味や関心事項を事前に調査し、授業に取り入れた。その際、保健だけでは止まらず、各項目については多教科の先生に参加していただき授業を展開する。それにより生徒のニーズに応えられるとともに、より専門的な知識が身につけられる。

このことにより、チームティーチングの導入によりその効果は上がる。

■　「科目・保健」におけるエイズ教育の実践授業

「科目・保健」においては、単元「エイズの予防」において、基礎知識を学習し、ＡＩＤＳを身近に感じることにより、予防法等についても各自が適切な判断ができる知識や態度を身につけさせる。

■　「理科」生物におけるエイズ教育の実践

生物Ⅱ単元「生体の防御」において、ＡＩＤＳにふれ生徒の興味や関心を高めたり、ＡＩＤＳを通した「生体の防御」にふれるとともに、生物の授業を通して社会に目を向け、人権や差別についても考える。

感　想

★大変人数が多く公開授業は廊下で聞きました。教材が工夫されており、生物は高度の内容で驚きました。

★教育の現場でがんばっている先生方を知ってとても心強く思いました。

★様々な講義の仕方があることを知り参考になりました。
先生と保健婦とのチームティーチングができたらいいなと強く感じました。

★３人の発表各々が、自分が指導したり、資料作りする上でヒントになった。

★質問の時間が欲しかった。

★一般の人が参加できるこのようなフォーラムは、とても少ないので良いと思います。
また開催予定がありましたら是非参加したいと思います。

③－C

ＡＩＤＳを生きる人々の気持ち

主　催／ＨＩＶと人権・情報センター東京　　講　師／五島　真理為

ねらい　　参加人数：３５人

ＡＩＤＳを発病して視力障害になったり、歩行困難になったりする感染者の痛みをすこしでも疑似体験してみる。参加者は介助者と患者役に分かれて、両方の体験をすることでケア・サポート（感染者の日常的な介助や精神面でのサポートをすること）の練習をすることにもなる。

ながれ

◎はじめにイメージワークをした後、目隠しをした人のガイドヘルプと車椅子の２グループに分かれて会場内を回る。エレベーター、階段、飲食、日常に体験するすべてのことを目隠しと、車椅子でやってみる。

◎組みを交換する。

◎全員で体験の分かち合いをする。

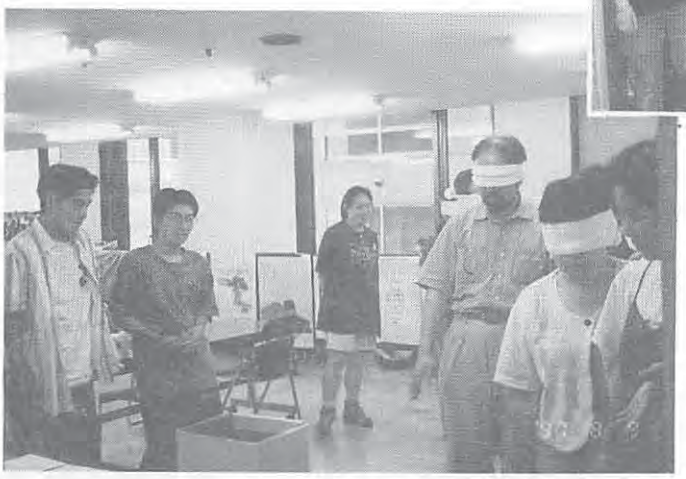
感想

・介助経験はとてもよい勉強になりました。ささいなことだけど知っているのと知らないのとでは全然違うということが分かりました。

・今後に活かせていける実践的なワークショップだったと思う。ワークの後に体験をわかちあうディスカッションが小グループで行われたのがとても有効だったと思う。

連絡先

ＨＩＶと人権・情報センター
〒101-0048
東京都千代田区神田司町2-17-4
風間ビル２Ｆ
TEL/FAX 03-5259-0622
E-MAIL KYG00425@niftyserve.or.jp



③－D　PWH／Aとのかかわりから人権と共生を考える

主　催／鹿児島エイズを正しく知る会　　ゲスト／中前　康友

ねらい　　参加者数：9名

私達の会の今までの活動を報告し、関わったＰＷＡ（Ｈ）から何を学んだか、今後のボランティア活動をどう進めていくかを参加者と共に考えていった。

ながれ

1　鹿児島エイズを正しく知る会の活動紹介

2　私達が出会ったＰＷＡ（Ｈ）から学んだこと

吉松　満秀さん

「エイズで死ぬより差別される方がこわい」という病床からのメッセージ（亡くなってから本の出版）

興味本位で来る人に会いたくない（ボランティアも続けなければ意味がない）

→授業に取り組みメモリアルキルトを作る等、吉松さんの思いを伝えていっている。

中前　康友さん（ゲスト）

感染者あってのボランティアである（はきちがえないように）

自分が感染したらという視点にたっていないのではないか

正しく知る会という名称は変えたほうがいい

→率直で鋭い指摘に対して学習を進めながら答えを模索している。

3　ワークショップ

あなたはＨＩＶ感染者です。この鹿児島のボランティア団体に相談しますか。

ＹＥＳ／ＮＯに分かれて討論

信頼関係を作ることが大事

スタッフの育成（自分ができることは何かを考える）

感染者から学べ

あせらず（感染者が現れるのを力量をつけてじっと待てばいい）

感想

エイズと真剣に向き合いこれからの会の持っていき方を真剣に考えていく様子が伺えた

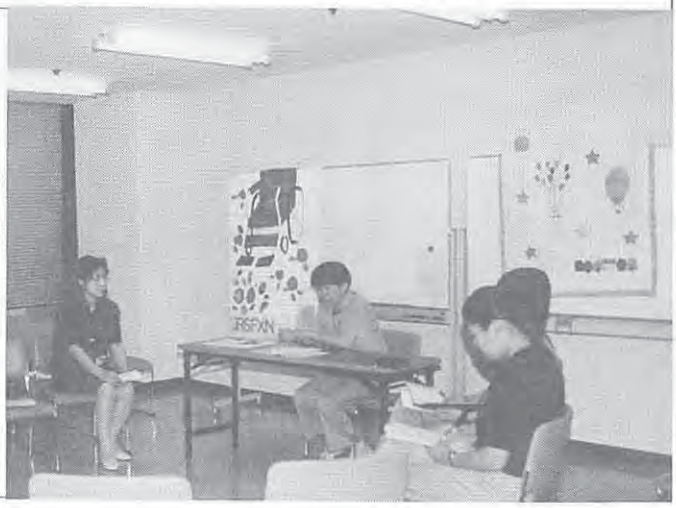
連絡先

鹿児島エイズを正しく知る会

〒892

鹿児島東郵便局私書箱24号

TEL/FAX 099-285-1292



③－E　企業とＡＩＤＳ　（ｺﾐｭﾆﾃｨ･ﾊﾟｰﾄﾅｰｼｯﾌﾟ･ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ ）

主催／リーバイ・ストラウスジャパン（株）　講師／広報室　吉田智之

ねらい　　参加者数：３３名

小社は米サンフランシスコに本社を持つジーンズメーカー，リーバイ・ストラウスアンドカンパニーの日本法人であるが，米国本社は創業以来，社会貢献活動に対して一貫して積極的な姿勢を有しており，ＡＩＤＳ問題にもいち早い取組みを見せ，“ＡＩＤＳ先進国”である米国でも高い評価を得てきている。その影響力は日本も含めた世界中のグループ内の子会社に及び，各国の状況に合わせて，この問題に対して企業としての立場でできることは何かを常に模索し続けている。その事例の一端を紹介し，また違った視点からの活動に対する理解を得られればと思っている。

ながれ

Ⅰ　プレゼンテーション
　会社の紹介／企業市民としての考え方／従業員奉仕委員会の活動／エイズ問題に取組んだきっかけ

Ⅱ　ＶＴＲ上映
　米国本社で作成したＶＴＲ「ＡＩＤＳについて語ろう」（１５分）を上映。ＡＩＤＳについて正しい知識を身につけ，１）予防を呼びかける２）ＨＩＶ保持者やＡＩＤＳ患者に対する偏見を無くすことのふたつを社員に教育することを目的として作られたものである。

Ⅲ　まとめ
　ＡＩＤＳ患者に対する差別／エイズを理解するまでのステップ／日本における活動

Ⅳ　来場者との質疑応答

来場者感想

・ビデオの内容がわかりやすかった。
・ビジネスと助成をうまく融合させている。
・企業がボランティア参加することは，一般への広がりの助けになる。
・ＨＩＶの方が好きな仕事をやってゆくために企業の理解が必要。
・日本でのより積極的な取組み，他の企業への影響付けも必要。
・企業からの助成金などによる経済的援助は不可欠である。

連絡先

リーバイ・ストラウスジャパン（株）
〒150-6022
東京都渋谷区恵比寿4-20-3
恵比寿ガーデンプレイスタワー22F
TEL 03-5421-9253
人事統括部　室橋

③－F　　ＡＩＤＳ電話相談員パネルディスカッション

主　催／社会福祉法人横浜いのちの電話

ねらい　　参加者：約６０名

横浜いのちの電話でエイズ悩み相談を受けるようになって、３年半が経った。エイズについて勉強し、研修を重ね、相談を受けてきた活動を振り返り、あわせて、電話相談にかかわる問題を考察し、今後の課題などを参加者の方々と一緒に考えていく。

ながれ

１．パネラーが次の４項目について発表
①横浜いのちの電話におけるエイズ悩み相談の概要
②電話相談の有効性と限界
③エイズ悩み電話相談のネットワークづくり
④電話相談員に求められる資質と研修

２．質疑応答と意見交換
①２４時間、いつでも、どこからでもコールできる「いのちの電話」と、継続的にコールしやすい「エイズ専用回線」とについて
②リピーターへの対応について
③いわゆるエイズ・ノイローゼのかけ手について
④かけ手に不快を与えるような表現は使わない心遣いが必要
（例えば‘危険な行為’は‘感染の可能性のある行為’と言った方がよい）
⑤相談員の疲労、メンタル・ケア、スーパーバイズ制度について
⑥未成年の患者、感染者に対する取り組みについて　　など

感　想

参加者：①誠実に取り組んでいる様子がわかった
②スタッフ間の情報共有などつながりがしっかりしている
③相談活動の大変な部分を少し聞けて、同じ人間だとおもった
④言葉に敏感であれという意見が印象に残った
⑤電話相談の限界という点で、ネットワーク、社会資源の活用面の強化が求められるということに共感した
⑥いのちの電話の活動内容がわかって、参考になった　　など

主催者：①日頃の活動を振り返るよい機会となった
②同じような活動をしている方々と情報交換ができてよかった

連絡先
社会福祉法人　横浜いのちの電話
〒240
横浜市保土ヶ谷郵便局私書箱32号
045-333-6163（事務局）
045-335-4343（２４時間）
AIDS専用
045-335-7830（金曜：18～22時）

③－G　病気・ケガの種類によってどうしてこんなに差がある？日本の福祉

主　催／ＨＩＶ不当解雇訴訟支援団　ゲスト／磐井　静江・坂本　大介
進　行／大島　恭子　　協　力／角田　英久・増井　英昭・大熊　恵子

ねらい　　参加者数：３８名

ＨＩＶ感染者の身体障害者認定を求める署名活動を進めるうち、私たちの突き当たったのが「日本の福祉制度」が持つ矛盾だった。福祉を受ける人の必要性に応じてではなく、病気が障害の種類別で与える側が勝手に決めるため、本当に困っている人が、経済的・人的サポートを受けられない。ところが、既に認定された疾病では、必要ないと言う人が無理矢理申請させられた、というような笑えない話も聞こえてくる。どうしてこんなばかばかしいことが起きるのか？できるだけ多くの人に考えて欲しいと思った。さらに欲を言えば、一緒に考えることで、私たち自身が病気になったとき、そうあって欲しい福祉の姿を少しでも具体的にイメージできたら．．．。

1　坂本　大介「ＨＩＶ感染者・患者が感じる日本の福祉の矛盾点」
現実の暮らしの中で、どんなことに困りどんなことを改善して欲しいかを、元ＨＩＶ不当解雇訴訟原告が語ります。

2　磐井　静江「日本の福祉・医療がこうなったわけ」
難病指定、障害者認定、医療費補助、費用の給付．．．ｅｔｃ．、様々な方法が考えられる中で、ＨＩＶの場合、なぜ障害者認定を選んだか。また、他の病気では、どうなっているのかなど、現状の制度を解説。

3　坂本・磐井他「こんな場合はどうすればいいの？」
医療費が高い、生活が苦しい、など具体的な問題に直面した時、どう有利に制度を利用すればいいのかのノウハウ。

4　ディスカッション「必要な人が必要な福祉を受けるにはどうすればいいか」
ボランティア論を含め、さまざまな問題提起。
　会場からの意見「私はこう考える」
どう有利な行動につなげていくか、参加者から意見を聞く。

5　Ｑ＆Ａ

感想

・国に対してどのようにコミュニケーションを求めていったらいいのか
・自分自身感染症を持っていて、同じ悩みを持っています。一番理解してもらいたい家族にも偏見や誤解がありまいってました。今日はパワーをたくさんもらいました。
・自治体の施策にまで言及されて理解が難しかった。
・障害はみんないっしょなのに．．．。

連絡先
ＨＩＶ不当解雇訴訟支援団
〒231-0045
横浜市中区伊勢佐木町2-66満利屋ビル8 階
横浜ＡＩＤＳ市民活動センター内
e-mail:aids@t3.rim.or.jp
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ:http://www.rim.or.jp./~aids
郵便振替口座：00250-8-59898

④－B　H. I. Voice 劇場

主 催／H. I. Voice Act　協 力／H. I. Voice編集局

ねらい　参加者数：３０名

ＡＩＤＳ患者やＨＩＶ感染者とその家族や友人のメッセージが寄せられている月刊通信誌「H. I. Voice」より、朗読台本として編集したものを発表しました。

親子、兄弟、夫婦など様々な関係を浮き彫りにして、彼らがどのようにＡＩＤＳ／ＨＩＶと関わっているのかに焦点をあてました。

初めてＡＩＤＳに触れる人にとっては、少し深い内容になっていますが、メッセージを肉声を通して耳から身体に取り入れることでＰＷＡの思いを少しでも共感してもらいたいと願っています。

ながれ

1　始めのあいさつ（１０分）
　我々が日頃、泣いたり笑ったりするのと同様にＰＷＡやその家族にもそれぞれの「日常」があります。様々な人々との関係の中で生きていくのは同じです。
　今回の劇場では、そういった人間関係の中でＡＩＤＳを見つめている人たちに焦点をあてて、心を寄せていきたいと思っています。

2　劇場（４０分）
　しんとした空間の中で、聞き手は読み手を通してＰＷＡや家族・友人の思いに触れます。

感想

・想像力をかき立てられる演出で非常に良かった。これからもがんばってください
（男性・２０代・学生）
・静かな声が心にひびく。ひとりじゃないんだ、人間っていいな。まだがんばるぞ！
（女性・４０代）
・本当の人の声がきけてよかった。（女性・１０代・高校生）
・読んだのとは違う感慨がありました。この気持ちを口にするともっと広がるのでしょうね。あと、ＢＧＭが所々大きいのが気になりました。（女性・３０代・公務員）

連絡先

■H. I. Voice Act
〒221-0835
横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2
かながわ県民活動サポートセンター
レターケース１５番　FAX 045-312-4810
TEL/FAX 045-784-9659　岡島　龍彦
■H. I. Voice 編集局
〒198-0032　青梅市野上町2-7-4-106
定期講読希望者は住所・氏名を明記し、通信欄に「△号からの送付希望」と書いて郵便振込口座「00190-2-612876」に申込み
講読料:1800 円(12 号分・送料込)

④－C　「共生」を「強制」でなくどうツクル？

主　催／ＨＩＶと人権・情報センター東京　　講　師／五島　真理為

ねらい　　参加者数：１２名

・ＨＩＶ／ＡＩＤＳとともに生きる社会を目指して「わたし」に何ができるかということを考えてみたい。
・ＰＷＨ／Ａの方々にとって、隣人という人はどんな人のことでしょうか。
・一緒に笑う人、一緒に時を過ごす人。あなたなんです。街をいきかう人々の中にこの感覚を作っていきたいと思います。

ながれ

◎　ＡＩＤＳのことについて、いろいろな知識をもったとして、考えて何もしない。それで気持ちは伝わるかな。気持ちを表現すること。共生。ともに生きること。何か作ってみましょう。
◎　メモリアルキルト・メッセージキルト・ステンシル・ポスター・レッドリボン・いろいろ表現するためのものがそろえられています。参加者で小さなグループを作って自分たちがどの表現手段を使って参加するか決める。
◎　各コーナーにはそれぞれの方法を教えてくれる人がいて、縫い方とその背景、作り方とその意味を話してくれます。
◎　制作
◎　作品をみんなに見せて、どのように使いたいか話し合う。
◎　話し合いの結果を発表する。
◎　ハートのコンタクト。メモリアルキルトを囲んでの追悼。

感想

・作業はたのしくだれもが参加できる雰囲気でよかった。
・時間帯の関係で参加者が少なかったのが残念。
・楽しくできてよかったです。
・メモリアルキルトの説明をきいてとてもよかった。

連絡先
ＨＩＶと人権・情報センター
〒101-0048
東京都千代田区神田司町2-17-4
風間ビル2F
TEL/FAX03-5259-0622
E-mail KYG00425@niftyserve.or.jp

④－D　**みずか嬢が考えるＨＩＶ／ＡＩＤＳのコト**

主　催／ＣＡＩ（Ｃａｍｐｕｓ　ＡＩＤＳ　Ｉｎｔｅｒｆａｃｅ），性風俗研究会
講　師／山口みずか（コマーシャルセックスワーカー、フリーライター）
協　力／岩室　伸也（鎌倉保健福祉事務所　医師）

ねらい　　参加者数：５０名

性風俗とは？ＨＩＶ／ＡＩＤＳを含めたＳＴＤの関係性を楽しく講義することを目的とした。昨年同様保健関係者、医療関係者が多く見られた。

ＨＩＶ／ＡＩＤＳ相談を現場で行っている方への性風俗の具体的情報提供と現役性風俗嬢山口さんのプロとしての意見や考え方、医学方面から岩室医師の知恵を伝え、この講義を受けたあと性風俗のＨＩＶ／ＡＩＤＳ相談を受けたら的確に答えられるようになることを期待した。

ながれ

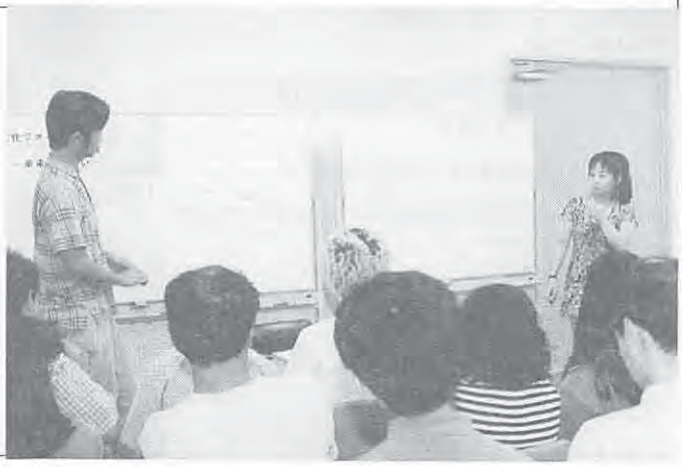
1　（趣旨説明、お断り）性風俗を奨励するものではありません。また、女性の性を商品化することの是非を議論する場ではありません。（５分）
2　講師の自己紹介とＣａｍｐｕｓ　ＡＩＤＳ　Ｉｎｔｅｒｆａｃｅの団体説明（１０分）
3　具体的性風俗サービス区分を人形を使い説明（３０分）
4　性風俗とＨＩＶ／ＡＩＤＳを含むＳＴＤ（性感染症）講義（４０分）

感想

・風俗へ行った方から相談を受けたとき「ところでどのような行為をしたのか」と反対に返して電話を切られてしまった経験があり、興味は持っていたが教えてもらうことが出来なかったため非常に参考になった。職場のスタッフにも聞かせてあげたかった。（保健関係）
・性風俗とテーマパークが同じ？ギャンブルやお酒と並列に性風俗があるなんて色々違いが分かって勉強になりました。
コマーシャルセックスワーカーのみずか嬢にはさわやかさがあって、非常に好感が持てました。別に特別な女性ではないんだなと思いました。
保健所の女性の方々が何も知らない反応に不思議な気分を感じてしまいました。性風俗が自然に自分の中にある男として・・・。

連絡先

ＣＡＩ渡部享宏
〒170-0011
東京都豊島区池袋本町
4-49-6-105
TEL/FAX 03-5958-0530
携帯　　030-962-0221
E-Mail:bym02334@niftyserve.or.jp



④－E　　対話が拓（ひら）く医療　～薬害エイズから学ぶ～

主　催／薬害エイズを追求する市民ネットワーク　司　会／草田　央
ゲスト／花房　秀次（医師）　大西　赤人（血友病患者）
協　力／勝島　信夫（東京法規出版編集部）　　後　援／ＨＩＶ訴訟を支える会横浜

ねらい　　参加者数：１７名

血友病患者のうち約２０００人がＨＩＶ感染した薬害エイズ事件をふまえ、患者と医師との対話はいかにあるべきか、インフォームドコンセントとは何かについて考える。

ながれ

《花房》８４年～８５年当時、マスコミ等を通じて知ってはいたが、本も出ていず、上司からも詳しい経過等も聞けなかった。

・花房医師が患者を担当するようになって驚いたのは、感染告知を殆どの人が当時受けていなかった。患者不在で告知か非告知かが論議されていた。
・お医者中心主義ではエイズ診療はできず、診療に於ける現状をすべて話し合い、患者と同じ立場でエイズ診療をどの様に発展させていくかを話し合った。
・例として尾瀬哲也氏をあげ、彼は精神的にとても強く、前向きで、エネルギッシュで患者との対話が成功した事例である。

《大西》当時、血友病患者は医者に頼りきっていた。

・花房医師と尾瀬さんとの対話では、インフォームドコンセントを物凄く意識している。
・インフォームドコンセントのポイント
　1　治療の前に十分情報を伝える。
　2　患者が分かりやすく、理解できるように説明する。
　3　患者は自分で決め、自分の意志で治療に同意又は拒否する。
　4　患者に理解力・判断力・決定能力があることが前提である。

＊ＮＨＫスペシャル『薬害エイズ患者　最後の証言』の中の尾瀬哲也氏の部分をビデオ上映。

《参考資料》木馬書館「対話が拓く医療」　尾瀬　哲也・今中　真共著

感想

・当時の医者の立場や患者から見た薬害エイズについての生の声が聞けて良かった。
・当時のマスコミや製薬会社側の話も聞きたかった。

連絡先
薬害エイズを追求する市民ネットワーク

FAX 03-3395-8347
E-mail aids@t3.rim.or.jp
URL http://www.t3.rim.or.jp./ ～aids

④－F

子ども買春防止に向けて・現状報告

主催・協力／ストップ子ども買春の会、日本ＹＭＣＡ同盟　　講師／中原眞澄

ねらい　　参加者数：１４名

国際的なネットワークにより、タイ等のアジア諸国、最近は南米や東ヨーロッパから少女たちが日本に売られてきている。毎年多数の日本人男性たちが海外で子どもたちを買っている。子どもの心身の傷は回復に長い時間がかかり、多くは苦しみながら短い生涯を終える。また日本でつくられる子どもポルノは世界的に販売され、国内ではほとんど野放しである。こうした国際的人身売買や海外での買春行為、子どもポルノに対する有効な法的措置は、日本の現行の法律では困難である。私たち日本人の非常識な「常識」を変え、必要な法改正を推進する世論の喚起が早急に求められている。

ながれ

1.　日本での少女たちの人身売買の実態を、女性のシェルター施設での統計や新聞記事をもとに紹介。その国際的広がりを知ってもらう。

2.　エイズが広がるにつれて、海外旅行先で買春する男性たちが、より低年齢の少女たちを買うようになっている実態を報告。

3.　1991年から始まったＥＣＰＡＴ（子どもの買春とポルノ・人身売買を根絶するための国際キャンペーン活動）は、アジアやヨーロッパで法律改正など多くの成果を挙げている。昨年ストックホルムで開催された「子どもの商業的性搾取を根絶するための世界会議」で日本が子どもポルノの世界的な発信基地になっている実状が非難されたことも報告。

4.　「子どもの権利条約」３４条に規定されている「性的虐待を受けない権利」は、日本では適切な法的保護を受けていない。子どもポルノが野放しであったり、海外で買春した者を刑法の強姦罪で訴えることがなかなか難しい実態を説明。

5.　「援助交際」も売る少女たちの側ばかりが面白おかしく報道され、買う大人たちの側の問題は取り上げない。売買春行為を男も女も問題にしない、そしてアジア蔑視も根強く残る、戦後日本の身勝手な自己中心的価値観が問われている。

6.　しかし児童福祉法改正や特別法制定の動きもあり、日本も徐々に変化している。2001年までのＥＣＰＡＴの運動期間内に、人身売買、買春や子どもポルノを禁ずる立法措置とともに、それを実効力あるものにする世論の力を形成していきたい。先ず家族の中で話し合うことから始め、一人ひとりが自覚し、声をあげていくことが大事。

感　想

以前から聞いていたが、状況や数字を具体的に聞いて言葉にならない痛みを覚えた。自分のまわりに少しずつ広めていくことから始めたい／現状を知らされて大人の責任のあり方に暗澹たる気分にされた。日本人のなかにも価値観の違いが大きくなり過ぎたようだ／人間とは何とおぞましいのか。次の世代をになう子ども達を商品化している。人を大切にすること、自分を大切にすること、勇気を持つこと。混乱していますが、何かをしなければならないと感じています／子どもの写真を見て性的快感を得ること自体は悪いことではないと思う。買う小児性愛者と買わない人とは分けて考える必要があると思う／おどろきましたが、現実をしっかりと受け止めて、厳しく社会を見ていきたいと思います。

連絡先　ストップ子ども買春の会
㊦169-0051　新宿区西早稲田2-3-18　日本YMCA同盟内 TEL03-3203-0292 FAX03-3207-0226

④－G

医者が語るＡＩＤＳ教育

主催／「ストップ・エイズ」ジャパン実行委員会　　講師／及川欧

ねらい　　参加者数：２４名

医師として、北海道各地でのＨＩＶ／ＡＩＤＳの講演活動に係わる中で、「単に知識を伝えるだけでなく、聞く人の感性に訴えることができて初めて行動変容を促すことができる」ことを痛感。自分の経験した事例を交えて教育することで、興味を持ってもらう。一番大切なのは、心に届く言葉を用いること。

ながれ

★AIDSに関わるきっかけ⇨幼少時にＮＹで奇病が流行り始めるのを目の当たりにした。
★ボランティア＝格式ばってはダメ。日本は形式先行⇨もっと日常的なものにするべき。

１．教育の対象は

①医療関係者 —— ﾘｰﾀﾞｰｼｯﾌﾟ をとるべき専門家。⇨認識が歪めば社会への影響大。
⇨現在の認識は低い⇨社会活動に医師が参加することで「資質」を高めて垣根とれる。
②感染者 —— サポートがあること。　問題解決のテクニック＝体と心の維持
③感染者の家族 —— 理解がない時の孤独感　⇨　精神的なサポート
④一般の人たち

この４つのグループにどのようにアプローチしたか具体的に説明

（おじいちゃん先生が出てきて、難しい話を偉そうにする。スライドもカポジ肉腫の写真を見せて脅す。これでは届かないし差別を生むだけ。もう二度と聞く気にならなくなる。）

◎頭に対するアプローチ　⇨　心に対するアプローチに切りかえることが大切

２．具体的な手法

①写真やマンガなど頭で考える必要がない手法⇨目で感じ取って心で吸収できる。⇨ＡＩＤＳ教育の基本（スライドを使い、芸術からアプローチする様々な具体例を紹介）

★AIDSを支える７本柱（ｲﾒｰｼﾞ色とﾏｰｸ ）医学／白♡ﾊｰﾄ 、政治／緑⇨方向、経済／黄○丸　教育／赤　情熱、哲学／青Ⅲ本、宗教／茶Ｌ足、芸術／ｵﾚﾝｼﾞ ﾊﾟﾚｯﾄ
★「草（自然界）」＋「人間の知恵（７本の柱）」＝合わさって初めて「薬」となる

感想

・心のよりどころを探している病気の人に、何を支援することが必要なのかを考えさせられました。ＡＩＤＳの治療について、芸術が入るとは考えていなかったので驚きましたでも、とても楽しく学びました。（兵庫県・40代・女性・保健婦）
・心に訴える教育が必要という話に共感を覚えました。（横浜・40代・男性・教師）

連絡先
及川　欧
〒060-8604
札幌市中央区北11条西13丁目
１－１
札幌市立札幌病院
TEL/011-726-2211
FAX/011-726-9541

①－C　　女性とエイズ　　＊ 女性に限定

主 催／吉永 陽子

ねらい　　参加者数：３６人（主催者の意図により参加は女性のみ）

エイズの基本的知識を獲得し、女性が感染効率が高い（感染を受けやすい）理由を理解したうえで、女性とエイズについて医学的な視点のみならず、社会的な状況も含め参加者自身が考える機会を得ること。そのためには「性」について話し合う場が必要であり、主催者側からの講義のみならず、グループワーク，メディテーション（瞑想）等を採り入れた、ワークショップ形式で第１回文化フォーラムから毎年実施している。

ながれ

①オリエンテーションと短い講義：ワークショップ形式で実施する意義，参加者を女性に限定した理由について，ＨＩＶ医療の新局面について，

②リラクゼーションとグループ分け：ゲームを行いながら参加者の緊張をほぐし、姓ではなく名前を使用することでより参加者自身の個人としての意識を高めた。

③グランドルール：秘密を守る，無理をしない（パスＯＫ），批判的にならない等

④グループワーク：エイズについての知識の確認，「わからないこと」「疑問に思っていること」等を話し合い、これについて全体でのフィードバックと主催者からのコメント

⑤短い講義：女性が感染効率が高い点について（膣側は、時間，面積，ウィルス量の点で不利である，粘膜の状態によって左右されること）を説明した。

⑥グループワーク：性行動のスタイルの具体例を列挙し、「性」の多様性を認識する。感染成立の条件（ＨＩＶを含む血液，精液，膣液が直接血管の中に入り込む）によって感染効率の高いものから低いものへのならびかえを行う。危険を下げるための手段と方法について（性交を伴わないｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ について，どのようにコンドームをつけてと頼むか）を話し合う。予防のスタンス（感染しているとしていないに関わらず、すべての人に予防は必要である。）を再認識し、リスクリダクションという見地でとらえなおす。

⑦メディテーション（瞑想）：ＢＧＭを用いて、女性感染者の手記の朗読。主催者のファシリテートによって瞑想した。女性とエイズをキーワードに集った参加者が、女性自身の「性的存在」としての自己を認識し、自己を開示し，傷みをわかちあうことで癒されていく過程（ｈｅａｌｉｎｇ＆ｅｍｐｏｗｅｒｍｅｎｔ）を同一の空間で体験した。

感想　・女性限定のため・・・，リラックスできた。いろいろな話ができた。こんな風に話し合う機会はめったにないので、もっとこういう機会があればいいと思う。性について話したことは今までなかった。・みんなで話し合っているうちにＡＩＤＳがどんどん身近に感じた。・瞑想で涙がでた。自分を大切にしたい。・初めて知ることが多かった。等

連絡先　吉永 陽子：医師，医学博士，
ＨＩＶと人権・情報センター会員
長谷川病院
〒181-0015 東京都三鷹市大沢 2-20-36
TEL0422-31-8600 FAX 0422-31-8878
斉藤学診療所（家族機能研究所）
〒106-0045 東京都港区麻布十番 2-14-5
TEL03-5476-6550 FAX 03-5476-6557

注）参加者を女性のみに限定した理由

エイズの背景には男性優位社会の問題が存在している。それ故に「刷り込まれた」女性像から脱却し本来のアイデンティティを確立したうえで性を語る「安全な場」を確保する必要がある。これによってよりピアな立場でのワークショップの実現が可能であり、男性非難に終始することを回避できるため。

①－D

克服！感染経路差別

主　催／加藤　孝

ねらい・ながれ

HIV の感染経路による病気へのイメージ付け。薬害はひどい事件でかわいそうだけど、性行為は気持ちいいことをして病気になったんだし、同性間性行為は気持ち悪い。ましてや買春や薬物注射の回し打ちなどは自業自得の極み。そんな言葉たちを未だに耳にします。しかしこうした誤解や独断をも含んだAIDS/HIVへのイメージ付けこそが、この病気を悪い意味で特別な存在にしてしまっているのでは？AIDS差別をなくしていくために、病気の受け入れやすいイメージからではなく、それに対する差別視の本質を見据えることから考えようと企画しました。薬害AIDSの支援活動経験者、PLH(Person Living with HIV)、保健婦、学校教師その他の人々が参加していました。ブーススペース等で求めたアンケートを材料に、参加者全員が発言する進行としました。議論はタイトルを越え、AIDS一般、それ以外の感染症差別の問題にも広がりました。以下に一部の発言要旨を紹介します。なおこのセッション全体の記録を作成中ですので、興味のある方は右下欄連絡先までお問い合わせください。

発言紹介・PLHAであった彼との生活体験で、「何の落ち度もない」といった薬害被害者の主張が、暗黙に性行為感染者との比較のもとに市民の理解を得ようとしているように見え傷ついた。一方このようなテーマに関しての議論が欠けており、その場を持つことが今は大切。（加藤）・いいAIDS悪いAIDSのイメージ作りには薬害被害者の意識以外に行政の方針があったのでは。（AIDS活動家）・一般に被差別者はそれ自体「～よりはまし」と考える差別者でもある。薬害被害者は当事者であり、差別されていることで頭がいっぱいで、自らが差別する側になるなどとは考えられない。周囲にいるボランティア等が批判されるべきで、当事者は攻められない。（薬害支援活動経験者）・どのような運動でも表に出ていけば肯定的な意見も批判的な意見もでてくるもの。お互いに誠実に論争することが大切。ところがそれが非常に出来にくくなっていてこわい。どんな運動にもあやまりは起きる。それに対しての公の場での批判があって然るべき。ところがAIDSに関してはこのフォーラムを含め、グループなりセッションなりが極めて閉鎖的。（学校教師）・閉鎖化の原因は、周囲にいるボランティアなりが、当事者の原告や同性愛者の団体の言っていることを、客観的な立場を捨てて全部正しいと真に受けてしまっている為では。テレビもそれを繰り返す。（薬害支援活動経験者）・そういった運動の進み方、報道のされ方、思い込みが何故起きるのか？そこに病気のイメージ、感染経路差別の起きる訳があるのでは？そしてそのイメージ付けにぴったり乗り薬害の運動は広がった。（学校教師）・ゲイで差別されていない人もいれば薬害で差別されている人もいる。感染経路だけでは語りきれない。皆が持っているHIV のイメージを変えるのが大切。（PLH）・感染症差別がある。C肝ウイルスに感染しているが、夫がそれを理由に離婚後の養育権を認めようとしない。（女性）・根底には性自体に対しての「悪い」というイメージがある。（養護教諭）・12才女性を買春して感染した人を差別しない自信はない。（保健婦）

連絡先
〒166-0097
東京都杉並区阿佐谷北5-37-2コーポA103号
加藤　孝
TEL03-3330-0324

①－E

異文化の中でＡＩＤＳと共に生きる

主　催／ＣＲＩラテンプロジェクト・ＣＲＩ－Ａｔｉｖｏｓ　講　師／岩木エリーザ
協　力／板橋　幸子

ねらい　　参加者数：１６名

「言葉のハンディ、生活習慣の違い、厳しい労働、差別、偏見、孤独．．．国際化が叫ばれている日本で、このような条件の下で生活している外国籍の人々がいます。この人達の身に更にＡＩＤＳの問題が起こったら．．．」というテーマを皆さんと一緒に考えること、そしてＣＲＩ－Ａｔｉｖｏｓの活動紹介をかねて、少しでも日本の社会で闘っている一つのマイノリティ・グループの実態を知ってもらうことであった。

ながれ

まず、緊張を解くためグループ・ダイナミック（ｇｒｏｕｐ　ｄｉｎａｍｉｃ）というゲームを使ったアクティヴィティを行った。「人間関係のもつれを解きほどく・私達の手で作り上げたもつれを解きほどくことができるでしょうか」というテーマのゲームで、皆で手をつないで作る一つの輪を人間の団子にもつれさせ、それを一人で元の輪に戻す作業を行う。そしてＣＲＩ－Ａｔｉｖｏｓの活動紹介を通して在日ラテン系外国人の生活における病気とＨＩＶ／ＡＩＤＳというテーマを取り上げた。

・“出稼ぎ”ブームの背景、日本政府側の対策、母国の経済状況と若者の夢と希望
・日本での日常生活、夢の実現と共に孤独感、１日１５～６時、週６日間労働の厳しさ、それから生じるストレス、体・精神の不調の訴え
・日本に働きに来るブームの始めの頃とは違って年々長く滞在する傾向の中で、５～６年重労働を続けることで、当然のことに様々な病気が生まれてくる。そこでＨＩＶ／ＡＩＤＳの問題も大きく表れてくる
・ＨＩＶに感染している人達のジレンマ、日本に残る／自分の国へ帰る、その決断にからむ様々な問題

最後にラテン系外国人を対象に行われたＨＩＶ／ＡＩＤＳの知識調査の結果とその解釈を発表した。そして、閉めにもう一つのゲームを行った。「ポジティブ・メッセージ：たった一言が大きな慰めや励ましになったことがありませんか。私達の想像力を超えるような困難の中にいる人にどんな言葉が使えるでしょうか。一緒に考えてみましょう」というテーマでお互いに紙に一言書き、感謝の気持ちをラテン式の挨拶「キス」で表した。

感　想（主催者側）

・グループ・ダイナミックはとても受け入れがよく、ねらい以上に参加者の反応が良かった。しかし、スピーチに時間を取りすぎてしまったので、間にもう一つゲームを入れるとよかったように思う。
・一人でも多くの方々に知って欲しいテーマを取り上げたワークショップで、ＣＲＩ－Ａｔｉｖｏｓの活動紹介とラテン系外国人とその問題に少しでも目を引くことが出来ていれば幸いです。参加してくださった皆様に心から感謝すると共に、少しでも有意義であったことを願っています。どうぞ、今後とも宜しくお願いいたします。

連絡先　　ＣＲＩ－Ａｔｉｖｏｓ
〒225-0024　座間市入谷2-135-76レオパレス11-202　岩木エリーザ
TEL/FAX0462-51-4993

①－F

オーストラリアのエイズ医療体制

主　催・講　師／国立呉病院　井原　章裕　協　力／アルビオン・ストリート・センター
プリンス・オブ・ウェイルズ病院、プリンス・ヘンリー病院

ねらい　　参加者数：２８名

わが国では、ＨＩＶの問題は汚染血液製剤による血友病のＨＩＶ感染から始まり、ヘテロセクシャルを中心とした新しい感染者が平成８年に６１０人報告され前年の４４６人に比べ大幅に増加し、平成９年も確実に９００人を超えそうな勢いである。私は、ＨＩＶ感染者の減少に成功した世界でも数少ない国であるオーストラリア（豪州）に平成８年４月から半年間、厚生省国立病院課から派遣され、わが国に適応できる予防を中心とした医療体制構築についてヒントをつかんだので報告したい。

ながれ

豪州は、１９９４年までに１６０００例を超えるＨＩＶ感染者（８割以上はホモセクシャル）を報告。多くの患者数にも関わらず、感染の進展を阻止することに成功し、新しい感染者数は減少してきた。この理由は、１　すばやい対応２　連邦政府、州およびテリトリー政府そしてコミュニティネットワークの莫大な協力体制３　ＨＩＶ／ＡＩＤＳ患者に必要なヘルスケアーサービスが提供できた。詳しく述べると、感染者やセックスワーカー、薬物乱用者が利用しやすい半官半民の相談施設、あるいはキリスト教系病院の無償医療提供、ホモセクシャルの感染者同士の助け合い、行政が援助する充実したボランティア組織（専門分化している）そして訪問看護の充実と圧倒的多数のエイズ専門医療従事者の存在により患者が安心して医療や相談が受けられる。医療従事者の安全と保障：一般的に医療事故でエイズに感染した場合は、その後本人が働いて得られたであろう収入を保障される（看護婦が針刺し事故で感染し三年後に死亡したが生前に３４万豪ドルもらった）

日本への重要な対策を提案したい。１　ＨＩＶ／ＡＩＤＳの教育を社会的経済的地位に関係なくすべての人達に対し、マスメディア、パンフレット、ポスター等を利用し浸透させる。２　健康福祉分野のマンパワーの供給、特にコミュニティでの介護活動そしてボランティアサービスを奨励する３　差別に対して法律を制定４　将来へ向け薬物乱用者への針と注射器交換の準備（麻薬代用品を与えやめさせるよう導きながら）

感想

・講師による貴重な体験を聞き、豪州の全体的な取り組みが理解できた。ぜひ様々なメディアに出て国内の世論を喚起して貰いたい。
・薬物乱用を認めているわけではないが、逮捕する前にエイズを防ぐために医師自ら新しい注射器を渡すという事実には驚かされました。

連絡先
〒737-0023　広島県呉市青山3-1 国立呉病院
TEL 0823-22-3111　FAX 0823-21-0478

①－G　ＡＩＤＳ患者・ＨＩＶ感染者の社会的役割

主　催／せかんどかみんぐあうと　講　師／大石　敏寛・嶋田　憲司

ねらい　　参加者数：２２名

現在、エイズ患者・ＨＩＶ感染者（以下ＰＨＡ）の役割は、行政やＮＧＯなど他の立場と同様にエイズ対策において必要不可欠だとされながら、その方法や効果など具体的なものは何も提示されていない傾向にあります。今回の企画は、ＰＨＡの当事者としての立場や果たしうる役割はどのようなものがあるのかということにスポットをあて、エイズ対策におけるＰＨＡという立場をどのように生かしていくべきなのかを考えるきっかけにするためのものでした。

ながれ

今回の企画では、ＰＨＡの活動の一つとして、せかんどかみんぐあうと代表、大石敏寛の行っている学校などを対象にした講演活動をとりあげ、そこで行われたアンケート結果の報告を中心に展開しました。

1　「せかんどかみんぐあうと」とは？

★せかんどかみんぐあうととはＰＨＡ中心の団体で、ＰＨＡの当事者としての視点をいかして活動している。その活動の内のひとつに講演活動があり、全国各地に講師としてＰＨＡを派遣することなども行い、直接的にＰＨＡの視点を生かした啓発活動なども行っている。

2　ＶＴＲ上映

★実際に大阪の高校で行った講演活動の様子を上映

3　感染者の声はどう受けとめられたか？

★講演の前後に行ったアンケートの比較により、講演の効果を計った分析結果を発表

・講演前・・・知識はあると答えている人が多いが、実際には感染者には近づきたくないとするひとがいるなど偏見の存在が明らかになった。また、行動の面においても知識にくらべ行動が伴わないことがわかった。

・講演後・・・知識の増加も見られるが、著しく上昇したのが行動における面で、ＨＩＶ感染を自分の問題として考える一つの手段である話し合いをしている／してみる可能性がこの講演をきっかけに増加している。また、ＰＨＡに話を聞く必要性も多くあることわかった。

4　ディスカッション

感想

・セーファーセックスにコミュニケーションが大切なことがわかった

・カミングアウトすることの意義を改めて知った

連絡先

〒164-0012　東京都中野区本町6-12-11
石川ビル2 階
せかんどかみんぐあうと
TEL03-5385-0542
FAX03-3229-7880

☆スピーカーズビューロー

せかんどかみんぐあうとではＰＨＡのスピーカーを派遣しています。お問い合わせなど詳しくは事務所までお気軽にご連絡ください。

②－B　PWAのネットワークを考える

主催／ポジティブ・ネットワーク　講師／ＰＷＡ　協力／ポジティブ・ネットワーク

ねらい　　参加者数：６０名

ＰＷＡの身辺に起こる様々な問題に関するニーズを訴えていく、要求団体としての性格と、ＰＷＡ同士の交流を深め、助け合っていくためのセルフケア・グループとしての性格を合わせ持つ組織のコンセプトを理解してもらい、共感、協力を呼び掛ける。

ながれ

同組織のＰＷＡの中から代表者数名をパネラーとして招き、それぞれの考えを発表しあった。その中で、なぜ自助組織を結成したのか、その必要性などをテーマとして扱い、解説していった。ボランティア論や体験談など、実際の現場にいるＰＷＡにしか理解しにくい講話もあり、充実した内容となった。また、数少ないＰＷＡ本人の発表という企画であるため、ＰＷＡの側に立った意見も飛び出し、独自性のあるものとなった。

感想

・一番心に残ったのは「ネットワーク」とか「ボランティア」というのは、ＰＷＡの人々だけのことでなく、私たち一人一人の問題であること。「ネットワーク」とは「つながること」つながることがとても難しい、今の世。あまりにも点に個々人がなりすぎている。その点たちが自ら立ち、つながっていくことを目と耳と皮ふで感じることができました。

・パネラーの五人はそれぞれ個性が強くて組織として一つの方向でまとまれるのか少々不安ですが、皆さん前向きでヤル気満々のようなので今までにないＰＷＡによるＰＷＡのためのピアネットワークが発展することを期待しています。

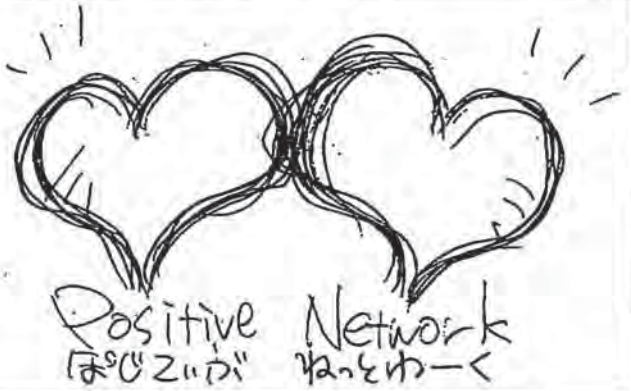
・ボランティアグループに依頼しても、断られることが多く、仕方なくSELF HELP グループを作ることにした、ということはショックだった。サポートするのもボランティアだし、自分の限界もあるため、むずかしいと感じる。

・今までに思っていたボランティア活動はまちがっていたと思いました。私は人の役に立つためにボランティアに参加して、障害者の気持ちを考えていなかったと思います。でも今日ボランティアの本当の意味がわかったような気がします。

・ＡＩＤＳ国際会議前は、顔を出せない状況だった。お互いとく名で名のっているというのは、状況がよい方に変わっているのだと思う。

・個性の強い協力なメンバー揃いでたのもしい印象を受けました。やっぱり、違う人が違うまま集まっている仲間って何やるにもＰｏｗｅｒがあるし、偏ることがないと思う。

連絡先
ポジティブ・ネットワーク
〒170-0013
東京都豊島区東池袋1-15-13
東洋ビル５Ｆ私書箱８８号
TEL010-696-7546



②－C

同性間性行為とＡＩＤＳ

主　催／エイズアクション　講　師／南　定四郎
協　力／レズビアン・ゲイ・ネットワーク

ねらい　　参加者数：３２名

エイズの感染ルートは性行為感染、血液感染、麻薬の回し打ち感染、母子感染の４ルートです。その性行為感染のうち、同性愛者の生活背景と感染の危険性との関係を考えながら、ＨＩＶ感染の予防に対する視点を提出すること。

ながれ

① 性的指向（Sexual orientation）と性的嗜好（Sexual preference ）の意味について説明する。
② ショウジョウバエの研究に関する知見から性的指向は生まれながらにして備わったものであり、その生物学的存在を基盤とした上で文化的・社会的存在としての同性愛者が生きていることを説明する。
③ ライフ・ステージの様々なパターンを複数の同性愛者の実例から抽象化して６パターンに分類し、図表化して説明する。
④ 以上のパターンから人のライフ・ステージにおける「個人的努力」と「社会化への努力」の傾向がみられることについて説明する。
⑤ 同性愛者の文化的・社会的存在を背景として同性愛者に対する偏見・差別があり、その苦しみから逃れようともがく現実について説明をする。
⑥ 性行為感染にいたる人間関係の要因には現実から逃れたいための行為として、少なからず上記の「個人的努力」があることを説明する。
⑦ 同性愛者のライフ・ステージにおいて「個人的努力」と大局にある「社会化への努力」がＨＩＶ感染の予防にとって重要な意味が生じてくることを結論づける。

来場者感想

① 本当にいろいろな考え方の人がいるんだなと思った。どんな考え方や、好みの人も同じように（平等に）仕事や生活が送れるべきだと思った。
② 当たり前のことと思っていた人権保護でもこの言葉には但し書きがあり、同性愛者は含まれていないことに驚かされた。
③ 学術的な内容でした。社会的な問題も（差別とは）きちんと論理の中で整理されて話をされたので深くうなづけることが多かったです。
④ 同性愛者について、またはそれとＡＩＤＳに関連したことに関心があったわけだが今までのマスメディアから、ＡＩＤＳ関係の本からの情報からとは違った面から（自らが本当に知ったり考えたりしなければならないことなど）考えることができたような気がする。

連絡先　　エイズアクション
〒162-0063
東京都新宿区市ヶ谷薬王寺70
ブラザー若林301
TEL/FAX 03-3235-5071
E-mail:minami23@ro.bekkoame.or.jp

エイズアクションの街頭行動

②－D

米国のエイズ医療・ボランティアの現状

主　催／フレンズ　フォー　ライフ　講　師／矢野　邦夫・築地　治久

ねらい　　参加者数：４６名

アメリカでエイズ研修を修められた二人の医師から最新の医療情報とボランティアの現状を報告していただき、日本でのボランティアの取り組みに大いに参考にしていただこうと期待して企画しました。

ながれ

築地医師からのニューヨークエイズ事情の報告、矢野医師からはワシントン州キングス地区の報告がありました。

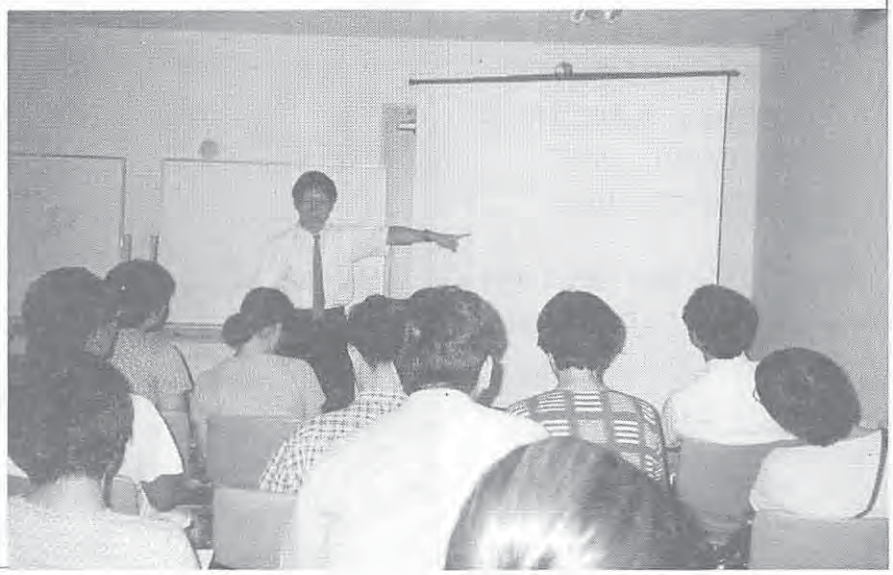
どちらの報告からも、アメリカでは病院内感染対策が徹底されていること、プライバシーの保護や患者を差別しないことが説明されました。また、薬の服用についてやＨＩＶ検査前検査後のカウンセリングは、日本と違って大変に重要視されているとのことでした。

質疑応答の予定時間を延長するほど質問が出されるなど、大変好評だったと思います。

感想

・具体的な講演内容は非常に充実していてとても良かった。日本での医療の問題点、改善点、そしてボランティアの状況が浮かび上がるようによく分かった。
・ボランティアのあり方について、米国と日本の違いを強く感じました。エイズ患者に対するボランティアとはどんなものか想像できなかったのですが、看護の面だけでなく、患者の飼っているペットの世話までがボランティアの対象になっているなんて本当に驚きました。
・海外の情報を聞くことは刺激的であり、意欲を高めてくれます。

連絡先
フレンズ　フォー　ライフ
〒430-0841　静岡県浜松市寺脇町444-2　代表　吉田　なつ恵



②－E

性教育グッズで伝える「いのちの大切さ」

主　催／横浜エイズ勉強会

ねらい　　参加者数：２５名

人形の形をした布の絵本、性教育カルタ等を囲んで、親子が、先生と生徒が、友達・恋人同士が、性を語るための方法を提案する。性教育とは一人一人がみんなかけがえのない存在であることを伝え、互いを思いやる心を養う場であることに気づいてもらい、それぞれの場で実践していく一助としたい。

ながれ

1　ワークショップ趣旨説明
2　性教育グッズ紹介
　　布の絵本
　　性教育カルタ
　　紙人形他
3　前出の三つのグッズ作り体験（グループに分かれて）
4　グループ代表者による発表
5　まとめ、感想

感想

・布の絵本について
　触れて話し合えるのは暖かみを感じあえると思う
　小、中学校の現場で実際に使えそうである
・エイズへの偏見は性への偏見、そのために性教育をひろげる意義を再認識した
・命の大切さと共に自然に生と性を受け入れられる性教育ができれば・・・今日の実践はすばらしい
・実際的で分かりやすく暖かみのあるグッズ紹介だった
・グループディスカッションで和やかな雰囲気で色々な話ができてよかった

連絡先
横浜エイズ勉強会
〒231-0014
横浜市中区常磐町1-7
横浜YMCA　ﾚｯﾄﾞﾘﾎﾞﾝﾌﾟﾗｻﾞ 内
TEL 020-918-3970
FAX 045-651-0169

ミーティング　横浜YMCA（関内）
第１・３土曜日18:00 ～20:00

②－F

同性愛者のための電話相談・統計報告

主　催／動くゲイとレズビアンの会（アカー）

ねらい　　参加者数：４０名

エイズ相談やＨＩＶ診療の現場で、同性愛者への対応に戸惑いや知識の限界による問題に突き当たっている方のために、同性愛者がおかれている社会背景、環境を踏まえるためのデータ分析を報告し、理解を深めてもらう機会とすること。医療、看護婦、カウンセラー、ソーシャルワーカー、保健婦、各相談機関の方々の積極的な参加を呼びかけていきたい。

ながれ

（１）アカーのヘルプライン（電話相談）サービスの位置づけ（活動紹介）

（２）エイズを中心とした相談内容分析／統計報告

参加者には電話相談統計報告集を配付し、ピアについての概念、同性愛者が置かれている状況を知識、空間、コミュニケーションという観点から解説。

（３）相談員による相談のロールプレイ実演&解説

「大学生の恋愛」についての事例をスタッフが実演し、その相談と対応の背景を解説

（４）参加者が４つのグループに分かれてセッション

来場者の感想

・心に触れるいい企画だった。
・人間的に豊かになれる場を与えてもらったと感謝の気持ちがある。
・資料が充実していてよかった。
・ロールプレイを見ていてとてもよかった。
・ロールプレイが理解を深める役割をしてくれました。
・同性愛者の悩みを聞くための機関がもっと必要であると感じました。
・他の相談機関の情報交流となり良かったと思われる。
・ｐｅｅｒ（ピア）という言葉に感動しました。

連絡先
動くゲイとレズビアンの会
（アカー）

〒164-0012
東京都中野区本町6-12-11
石川ビル2 階OCCUR 内
TEL 03-3383-5556
FAX 03-3229-7880
E-mail=occur@kt.rim.or.jp

②－G　　ＰＨＡのための法的サポートと環境の改良

主　催／ＡＩＤＳ予防法を考える会　　講　師／大石　敏寛　　中川　重徳（弁護士）

ねらい　　参加者数：１２名

ＰＨＡへの法的サポートの提供の経験から、彼／彼女らのための法的サポートや社会保障の必要性、日本政府のＡＩＤＳ政策の変更の必要性を説く。

ながれ

※主催者からの報告がないため会場ボランティアの報告によりまとめました。

（会場ボランティアＡ）

①大石敏寛さんから／福祉、医療をどのように利用するか？

・高価な薬剤、多剤併用及び入院・検査費など、患者の重い負担
カウンセラー、ｿｰｼｬﾙﾜｰｶｰが問題を明らかにし、どういう風に解決していくかアドバイス
（実際にキャリアの立場におられての説明は非常に心を打つものでした。大石さんの活動は使命感のような尊いものからではと思いました。私もポジティブであったら、このように強くメッセージをうつことができるだろうかと思いました）

②弁護士の中川さんから

・自分の受けられる法的サポートを“知らない”ことによる不当な扱いについてと、現在の多くの人がおかれている責務問題について、ＡＩＤＳと関連した興味深い話がいただけた。エイズを担当される弁護士さんは、ボランティア精神と行動力が問われると思います。中川さんの良心的なお話を伺って、本当に改善すべきことは、自分自身の力で行動していかなくてはいけないと思った。

（会場ボランティアＢ）

・いままでメンタル面の話はたくさん聞いてきたが、薬代が高価すぎるなど、精神面以外でも負担がかなりかかることを初めて知った。
・ソーシャルワーカー、カウンセラー志望者は大変多いと聞く、病院はもっと人員を増やすべきだ。
・生活保護はバイトをすると、収入と見なされ金額を減らされてしまう。ということがズシンと感じた。きまりを改善すべきだと思った。
・借金、貸出制度、生活保護、初めて知った事ばかりだが、みんなが知っておくべきだ。

連絡先
ＡＩＤＳ予防法を考える会
〒180-0013
武蔵野市西久保1-1-9
T's Loft　ビル４Ｆ
中川　重徳
TEL 0422-55-2211
FAX 0422-55-7750

③－D　Video Against AIDS －PWA－

主　催／1997　ＡＩＤＳ文化フォーラム in 横浜実行委員会　　講師：高村　文子
協　力／町田市立国際版画美術館

ねらい　　参加者数：２７名

海外におけるエイズを主題として制作されたビデオの上映。エイズはある限定された地域の問題ではなく地球規模の問題です。このセッションでは、町田市立国際版画美術館収蔵の海外のビデオから、ＰＷＡ（ＡＩＤＳと共に生きる人）の視点で６作品を選び上映した。

1　主催者による説明
　Ｖｉｄｅｏ上映の目的の説明
　字幕がないことのお断り（参加者には対訳本を配付し参照していただいた）
　各作品の内容説明

2　Ｖｉｄｅｏ上映（１時間２６分）

①　コリー：生きる闘い（1989年）18分
出生直後にＨＩＶに感染したコリーが４歳でこの世を去るまでの母と子の記録

②　情け容赦なく雨が降る（1990年）　7分10秒
ボブ・ディランの曲にのせて、紙芝居のような構成で、エイズの時代を生きる大都市の人々の姿を映した作品

③　もう一つの疫病（字幕付き）（1988年）27分
「エイズと女性」ニューヨークでホームレス生活を送っていた女性が直面した困難
「エイズと学校教育」スカンシアという町の学校で、ＨＩＶに感染した少年を取り巻く周囲の混乱とそれに立ち向かった人々の行動の軌跡

④　エイズに立ち向かうバンコック（1992年）　6分
タイ古典舞踊とモダンダンスを組み合わせた予防啓発のためのパフォーマンス

⑤　（ｉｎ）　Ｖｉｓｉｂｌｅ　Ｗｏｍｅｎ（1991年）26分
様々な地域活動を通して社会に訴えていく感染者たち。隠れていた女性（Ｉｎｖｉｓｉｂｌｅ　Ｗｏｍｅｎ）の中から、表に現れてきた女性たち（Ｖｉｓｉｂｌｅ　Ｗｏｍｅｎ）が登場する

⑥　キスじゃ死なない（1990年）　1分30秒
３０秒のスポット映像３点

感想
非常におもしろかったが、切実な現状に胸が詰まる思いだった
１つ１つのビデオが短くしかも表現方法が変化に富んでいてよかった
実際に患者・感染者やその家族の話が聞け、観ることができたことがよかった

連絡先
ＡＩＤＳ文化フォーラム実行委員会
高村　文子
〒228-0802　相模原市上鶴間4008-9, 3F
横浜ＹＭＣＡ相模大野ステーション
TEL0427-40-5501 FAX0427-40-5503

Ｖｉｄｅｏ　Ａｇａｉｎｓｔ　ＡＩＤＳ
ＦＩＬＭ問い合わせ
町田市立国際版画美術館
学芸員　箕輪　裕
〒194-0013　町田市原町田4-28-1
TEL0427-26-2771/0860　FAX0427-26-2840

③－E　Safer Sex Workshop for Gay Men

主　催／ぷれいす東京・Gay Friends for AIDS
講　師・ファシリテーター／砂川　秀樹

ねらい　　参加者数：１８名

一般に流通しているＨＩＶ感染予防の情報やメッセージの大部分は具体性に乏しく、それらの情報やメッセージの送信対象も限定されていないため、その効果に疑いをもたざるを得ない。そこで、「ぷれいす東京」のゲイ・グループである。Ｇａｙ　Ｆｒｉｅｎｄｓ　ｆｏｒ　ＡＩＤＳでは、「ゲイ向け」と対象をしぼり、「セイファーセックスをしたい」と思いつつも実際にはなかなか実行できない、「セイファーセックスについてちゃんと考えて直してみたい」という人を対象に、日頃の具体的な行為の中でセイファーセックスについて参加者とスタッフが一緒に考える場として、今回のワークショップを設定した。セイファーセックスへの行動変容へのきっかけを自ら発見してもらうことをその目的としている。

ながれ

ワークショップは、まず二人づつ組んでお互いを紹介しあい、なごんだ雰囲気をつくるところから始まる。その後、思いつく限り、セイファーセックスを実行しにくい状況や条件を各参加者に出してもらい、各グループに分かれて、その状況や条件を参考にセイファーセックスが「できない」パターンの物語を作ってもらう。そして、その物語をグループで交換して、セイファーセックスを実行するためには、どの段階で何をする（あるいは「言う」ことが効果的なのかということを考えて、物語を書きかえてもらう。最後に、皆で感想を言い、お互いをエンパワーできる雰囲気を作ってワークショップを終える。

今回のワークショップでは、「不特定の相手」という関係よりも、「特定の相手」との間でセイファーセックスができない状況について多くのコメントが出されたのが印象的であった。様々なパンフレットなどで、「特定の相手」とセックスを行うことがセイファーセックスの一つであるかのように言われているが、そのメッセージに疑問を投げかける結果となった。

感想

・一方的に話を聞くのではなく、参加する形だったのでおもしろかった。
・こうやってみんなでセックスの話をする機会があるのはいいですね。

連絡先

ぷれいす東京
〒161-0033
東京都新宿区下落合1-3-6
ハイシティ高田馬場201
TEL 03-3361-8964
FAX 03-3361-8835
e-mail:ptokyo@wax.or.jp

③－F　　愛と思いやり　―私たちがエイズから学べること―

講　師／土橋　正之

ねらい　　参加者数：３６名

私はエイズ教育は「いのちの尊さ」を知る為の手段であり、目的ではないというスタンスでエイズ啓発活動に取り組んでいます。今回のワークショップでは、私がアメリカで出会ったＨＩＶに感染した人、またＡＩＤＳを発症された皆さんの生き方から私が学んで事柄を分かち合いながら、参加者の皆さんが自分にとってエイズとは何であるかを再考する場を提供することを目的といたしました。

ながれ

1．エイズに興味を持ち、取材を始めるまでの過程を説明する。（１０分）
2．ＰＷＡ／Ｈとの出会いの中で私が感じたことを、本人のポートレートをスライドで映写しながら参加者に分かち合った。（６０分）
3．講演終了後、質疑応答を通じさらに深く、エイズが社会に提議している問題について個々が置かれた状況を踏まえ討論した。（３０分）

感想

土橋さんの写真を見てお話を聞いて自分の命の大切さというのを改めて考えてみようと思いました。私も自分の命のことなんて深く考えたことはなかった。というのは、以前このAIDS文化フォーラムに参加していてもエイズの事を知識があっても結局他人事。自分はきれい事でエイズの事を学んでいます、という顔をしていて、本当はエイズというのは身近に感じなかったからだと思います。教育こそが唯一のワクチンと呼ばれているのにやっぱり自分の命を軽くみている＝他人事と思っている。そうすれば教育はムダという事になる。私は今日のこの話を聞きAIDS文化フォーラムに参加し、自分がAIDSを他人事と思いながら生きてきた事を知る事ができたし、命の大切さを考えようと思うようになった自分を発見する事が出来た。もっとエイズを知りたいと思ったし、社会の教育を変える一員になりたいと心から思えた。

その他の感想についてはインターネットのホームページをご覧ください。

連絡先
土橋正之
〒154-0024
東京都世田谷区三軒茶屋1-10-5
TEL/FAX 03-3418-1131
ｲﾝﾀｰﾈｯﾄﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ
www.costarica.co.jp/selfesteem
e-mailｱﾄﾞﾚｽ
dobashi@tkb.att.ne.jp

A会場の平面図

かながわ県民センター　1階平面図（展示場）

15.7m

天井高　2.55m

(19)土橋正之写真展

倉庫

10分間コーナー (17)

写真展

写真展

(12) (11) (8) (7)

(10) (9) (6) (5)

展示場倉庫

14m

(14) (13) (4) (3)

(15) (16) (2) (1)

102会議室 定員30名

2.8m

柱

(18) 資料展

32型ワイドテレビ＋ビデオ　資料展VTR

受付

ボランティア本部

☎2120

1.6m

2.4m

階段

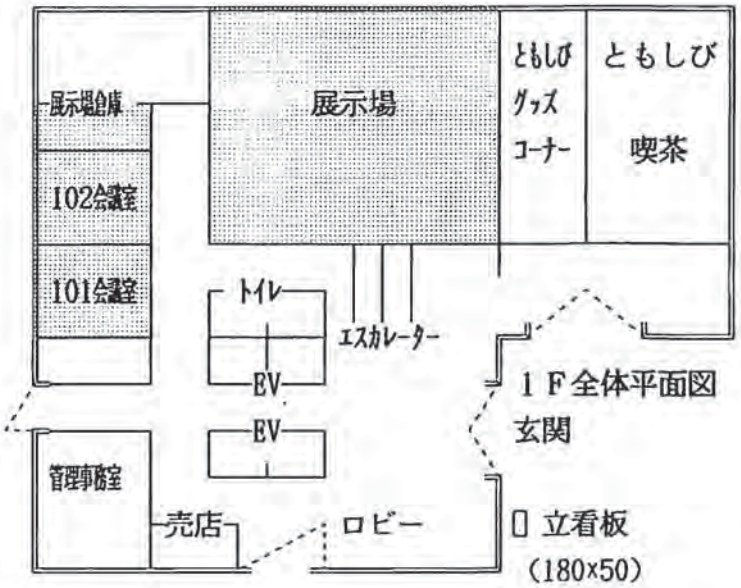
エスカレーター

スロープ

吊看板 (50×180)

101会議室 定員24名

トイレ♂　トイレ♀



☆主な展示場備品

パネル（組立式）２５枚

展示台（折りたたみ式）２０台

椅　子（折りたたみ式）３０脚

パネル組み立て例（連結可）

横タイプ (120×180)　190cm　縦タイプ

A－(1)　ＡＩＤＳの教材 —— 学校で保健所で

内　容

「性を語る会」のメインの活動として、アーニホールには、エイズ学習や性教育に役立つ教材（アーニ出版制作）が多数展示してあり、自由に手にとって試せるようになっている。

今回は、それらの教材を紹介する場としてパネル教材・絵本・ビデオ等を、かいつまんで展示。「性を語る会」の機関紙『あなたとわたしと性』のエイズ特集誌やレッドリボンの分売も行った。

教材についての質問も多く、またエイズの絵本や書籍への関心もさすがに高く、展示に参加してよかったという感想を持ちました。

主　催　性を語る会
連絡先　〒158-0097　東京都世田谷区用賀3-5-6
TEL 03-3708-7326　FAX 03-3708-7324

A－(2)　リボンプロジェクトジャパン活動紹介

内　容

レッドリボンを通して、ＡＩＤＳ予防・抗体検査の啓発を訴えました。『リボンプロジェクトって何？』リーフレット、『考える前にまず検査』小冊子の配付の他、世界のレッドリボンを展示、中国での啓発活動の記録写真等を展示しました。

また、今年から平行して活動を開始した、子ども買春・子どもポルノ撲滅を訴える啓発活動も実施し、ユニセフの制作したポスターの展示の他、この活動を世界的活動に広めたＮＧＯ－エクパット、その活動を日本で協力しているＳＴＯＰ子ども買春の会に関する情報の提供も行いました。

関心が薄れてきたと言われるＡＩＤＳ問題ですが、医療関係以外の様々な問題はまだまだ広がる一方です。啓発活動の必要を再認識しました。

主　催　リボンプロジェクトジャパン
連絡先　〒141-0021　東京都品川区上大崎2-6-28-304
TEL03-3448-8954　Fax03-3444-3691
E-mail:NIFTY/ID No.QZY07362

A－(3)

電話相談とＡＩＤＳ

内　容

限りあるいのちの「有終」を支援するために、がん・エイズ・難病などで、ターミナルの段階にある患者さん、ご家族、その他の関係の方々の「こころ」を、電話を通して少しでも支えることができれば、というのが趣旨のボランティア活動です。

山彦電話を多くの方々に知っていただき、悩みを持っている方に届くことを願って、文化フォーラムのパネル展示に参加しました。

十分な展示とは言えなったかも知れませんが、対外的な活動が少ない我が会としては貴重な経験でした。微力ながら今後もエイズを取り巻く人々のお力になれればと願っています。

山彦電話は、毎週月・水・金の午前１０時から午後４時に、一定の研修を受けた約３０名のボランティアが交替で電話を受けさせていただいています。全くの匿名で、会費等は一切なく、一期一会としての出会いを大切にしています。医療的な相談や専門的な解決方法をお答えする訳ではありませんが、特定の宗教や政治・価値観や先入観にとらわれず、悩みの傾聴と共感的理解そして電話をかけていただいている方を受容するよう心がけています。あなたのお電話お待ちしています。

主　催　　有終支援いのちの山彦電話東京支部
連絡先　　〒113-0022　東京都文京区千駄木3-36-10　千駄木センチュリー 21　603号
　　相談電話　　03-3827-5310

A－(4)

ＡＩＤＳ教育を考える＝メッセージキルト

展　示

キルト展示

内　容

山間部における池田保健所管内で学校保健と連携して、文化祭などを利用して、高校生とメッセージキルトを手作りした。

エイズを身近に考え、偏見なく行動できることを目指した取り組みを紹介する。

主　催　　徳島県池田保健所
連絡先　　〒778-0002　　徳島県三好郡池田町字マチ2542-4
　　TEL 0883-72-1121　FAX 0883-72-6884

A－(5)　H. I. Voice Digest展

はじめに

H.I.Voice は感染者と未感染者が考えや思いを分かち合い、互いに理解を深めるための声のフォーラムとして、1993年8月に創刊された月刊通信誌です。私たちは H.I.Voiceをもっとたくさんの人に読んでもらいたいと思い、これまでに発行した H.I.Voiceのダイジェスト版であるこの紹介小冊子を作りました。一人でも多くの方々に、私たちの声が届きますように、とりわけ、もしまだ誰にも相談できないで悩んでいるＰＷＡの仲間がいたら、同じようにＨＩＶを持って生きている私たちの声を読んで元気をだしてもらいたい。また、ＨＩＶを持っていても持っていなくても、同じ時代に生きる者として、できるだけたくさんの人たちに H.I.Voiceに参加してもらいたいと思います。（杏ジャム）＝Digest版より＝

主　催　H. I. Voice編集局
連絡先　〒198-0032
東京都青梅市野上町2-7-4-106
電子メール KHB00661 @niftyserve.or.jp

A－(6)　English Education & AIDS

我々は英語など外国語教育の一環としてエイズ／ＨＩＶ教育を行っている教員で構成されているグループであり、フォーラム２日目と３日目に参加した。パネルには英語その他の言語でのエイズ教育用ポスターを張り出し、我々が作成した英語の授業で使用できるエイズ／ＨＩＶ教育用教材及び我々のニュースレターのコピーを希望者に無料で配布した。ブースには我々のメンバーは１名しか待機することができず、またそのメンバーも他の団体の活動を掛け持ちしていたためブースには常駐できなかったが、コピーのハケ具合から２日間で少なくとも１００名程度の人々は我々の活動に何らかの興味を示してくれたものと思われる。フォーラム２日目には教育関係の発表が多かったせいか、我々の予想を上回る反応があり、この日用意したコピーは全てなくなってしまった。パネルには英語その他外国語で書かれたポスターを張り出したが、日本のポスターには見られない発想で作成されたものがあったせいか、カメラを取り出して写真を取って行くマスコミや一般参観者も多かった。また２０程の個人／団体が私たちのニュースレターを無料定期購読するために連絡先を教えてくれた。来年はできれば展示だけでなく発表も行えればと考えている。来年への要望事項だが、事務局には日本人のみならず横浜市内の中国人等外国人のコミュニティにも積極的に広報していただきたい。

主　催　ＪＡＰＡＮｅｔｗｏｒｋ　（Japan AIDS Prevention Awareness Network ）
連絡先　〒251-0028　藤沢市本鵠沼1-2-14ジョリメゾン鵠沼201 神田　政典
TEL/FAX 0466-22-1223

A－(7)　ＣＲＩ（ﾁﾙﾄﾞﾚﾝｽﾞ ﾘｿｰｽ ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙ）活動紹介展

内　容

ＣＲＩのブラジルでの活動を紹介

・ＨＩＶ感染児ケアホーム

1995年11月、HIV 感染児のデイケアセンター兼家族がいないHIV 感染児のケアホームを開設しました。

・貧困地域の診療所

サンパウロの貧困地域に診療所を建設し、現在、現地の住民団体と協力して運営しています。

・エイズセミナー

主に貧困地域のｺﾐｭﾆﾃｨワーカーや十代の若者を対象にAIDSに関するセミナーをおこなっています。

・エイズ劇の制作とエイズキャンペーン

・識字教育プロジェクト等

主　催　　ＣＲＩ

連絡先　　〒113-0031　東京都文京区根津1-23-12-503
TEL 03-3822-6452

A－(8)　同性間性行為とＡＩＤＳ

内　容

同性愛者にとって「自分は何者か？」という疑問は何物にもかえがたい重大な問いであります。この現象は社会が期待している自分と自分が望もうとしていることが一致しないということを通じて発生してきます。これを「アイデンティティ・クライシス」といいます。同性間性行為を見るときに「アイデンティティ・クライシス」はキーポイントです。そこで、本報告では「アイデンティティ・クライシス」を分岐点として同性愛者はどのようなライフ・ステージを築いたかを図解し、いくつかのケースで検証しました。

（１）　上記の図解は次のパターンに分類しました。

①　大学卒業まで
②　性的お友達づくりの場合
③　知的生活者の場合
④　業界人の場合
⑤　一般的サラリーマンの場合
⑥　２つのタイプのゲイの場合

（２）　上記のいずれのパターンにも訪れる
「アイデンティティ・クライシス」に注目できるようにマーキングしました。

主　催　エイズアクション

連絡先　〒162-0063　東京都新宿区市ヶ谷薬王寺70　ブラザー若林301

A－(9)

紹介！　性教育グッズ

内　容
性教育グッズで伝える
いのちの大切さ

1　性教育カルタ
96年エイズ文化フォーラム、97年春のレッドリボンウィークなどのワークショップ「つ・く・る性教育」で参加者が作成した性教育カルタの作品を展示

2　布の絵本（写真・解説）
95年エイズ文化フォーラムで生まれた布の絵本の性教育版を写真と解説文で紹介

主　催　横浜エイズ勉強会
連絡先　〒231-0014　横浜市中区常盤町1-7　横浜YMCA内
TEL 020-918-3970　FAX 045-651-0169

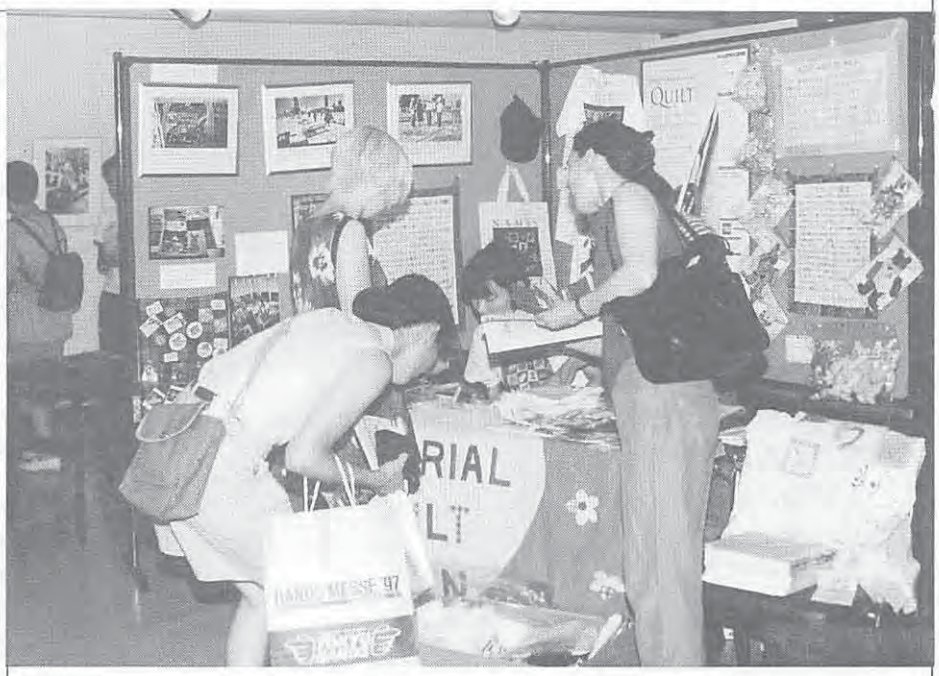
A－(10)

キルトとテディベア

内　容
・１９９４年の国際ＡＩＤＳ会議の際に行ったインターナショナル・ディスプレイや国内ディスプレイの様子をパネル展示、アルバム閲覧

・各種グッズ・書籍の販売・ポストカード・Ｔシャツ・バッヂ・テディベア・テディベアキット等

・活動紹介の資料



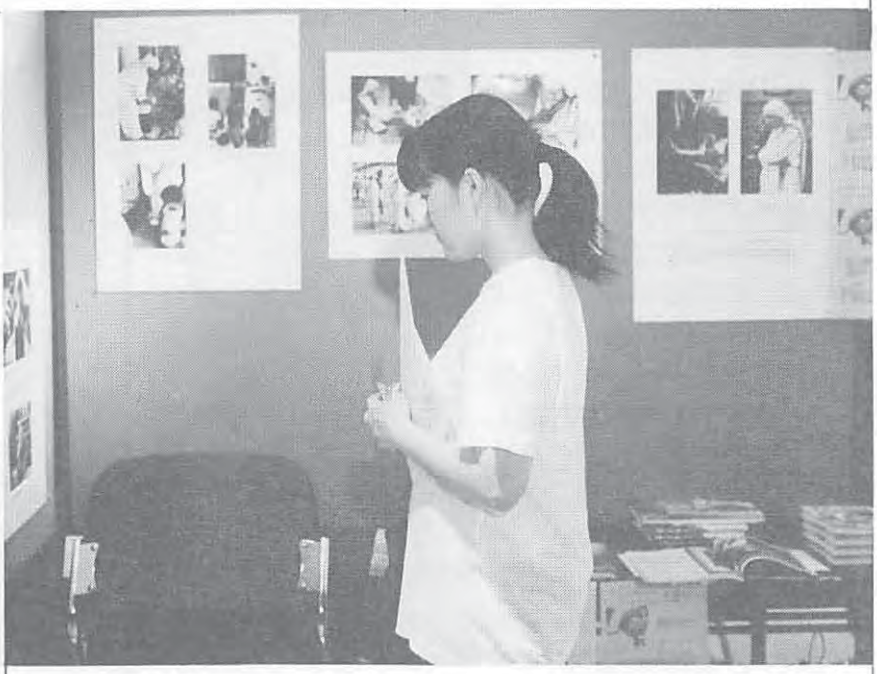
主　催　メモリアル・キルト・ジャパン
連絡先　〒532-0003　大阪市淀川区西宮原1-6-60　プラザ新大阪2160
TEL 06-350-9286　FAX 06-350-9287

A－(11)

マザーテレサの活動

内　容

・マザーテレサ写真展
・写真集の販売



主　催　グループＰＡＺ
連絡先　〒236-0005　横浜市金沢区並木2-6-11-302　大高ゆみ子
TEL/FAX 045-786-8586

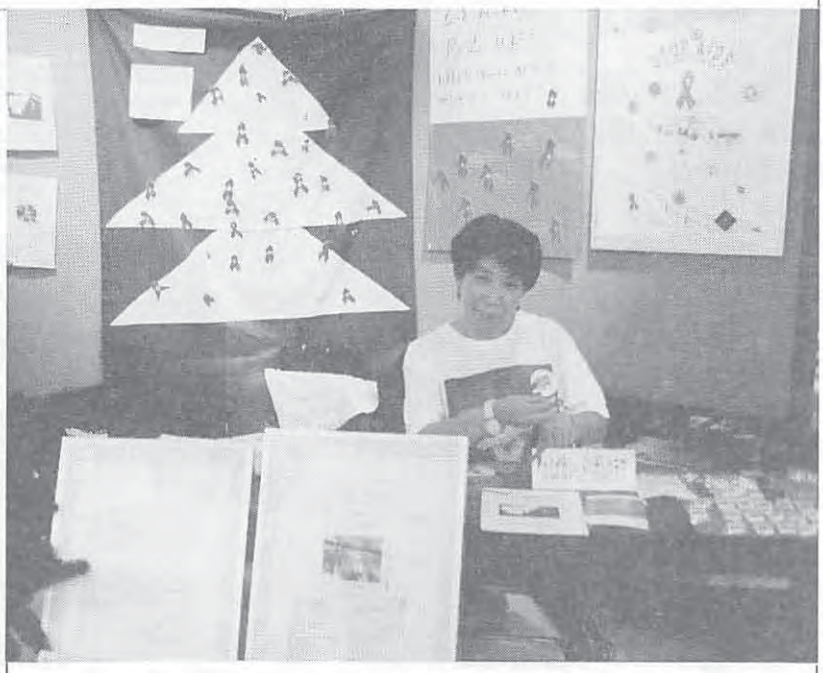
A－(12)

クリスマスツリーにレッドリボンを

内　容

レッドリボンは、AIDSやPWA/H への理解と支援をあらわす、世界共通のシンボルです。

誰もが心おどらせるクリスマスシーズンに病気や偏見と戦っているPWA/Hの方に思いをはせるとともに、多くの人にAIDSやPWA/H への理解や支援を呼び掛けることを目的に、多くの人の目にふれやすいクリスマスツリーにリボンを飾ってもらうキャンペーンを行っています。今回は、自分の手でリボンを作ってもらい胸につけたり、ツリーに飾ったりしました。



主　催　かながわレッドリボンクラブ
連絡先　〒231-0014　横浜市中区常盤町1-7 横浜ＹＭＣＡ内
TEL 045-662-3721　FAX 045-651-0169

A－(13)　ルーマニアの子ども達とＡＩＤＳ

内　容

ルーマニアの子ども達のＡＩＤＳ感染状況の写真展示

・チャウシェスク政権下における子ども達へのＡＩＤＳ感染被害状況

・資本主義へ移行後の現在の状況など

主　催　　Ａ・Ａ・Ａ（Act Against AIDS）
連絡先　　〒150-0012　東京都渋谷区広尾1-9-20　ＴＭ広尾ビル３階　ＡＡＡ運営事務局
TEL03-3447-0419 FAX03-3447-0358

A－(14)　Yokohama AIDS Week '97　スタンプラリー

内　容

・「まっすぐみつめる。愛と、エイズと、人生と。」をテーマに開催した、Yokohama AIDS Week '97のスタンプラリーのゴールです。

一般の方々を文化フォーラム会場へ誘導する試みとして、相鉄ジョイナス・岡田屋モアーズ・横浜三越の協力により、各店舗でエイズに関するパネルクイズに答え、県民センター展示場を最終ゴールにしたスタンプラリーを実施しました。

主　催　横浜ＡＩＤＳ市民活動センター（Yokohama A.A.I.C）
連絡先　〒231-0045　横浜市中区伊勢佐木町2-66' 満利屋ビル8 階
TEL 045-262-8881　FAX 045-262-8882

A－(15)

レッドリボンTシャツ販売

内　容

主　催　　奈良ＨＩＶ訴訟を支援する会東京支部（奈良ＨＩＶネットワーク東京支部）
連絡先　　ＴＥＬ　０３－３５０８－７５１４

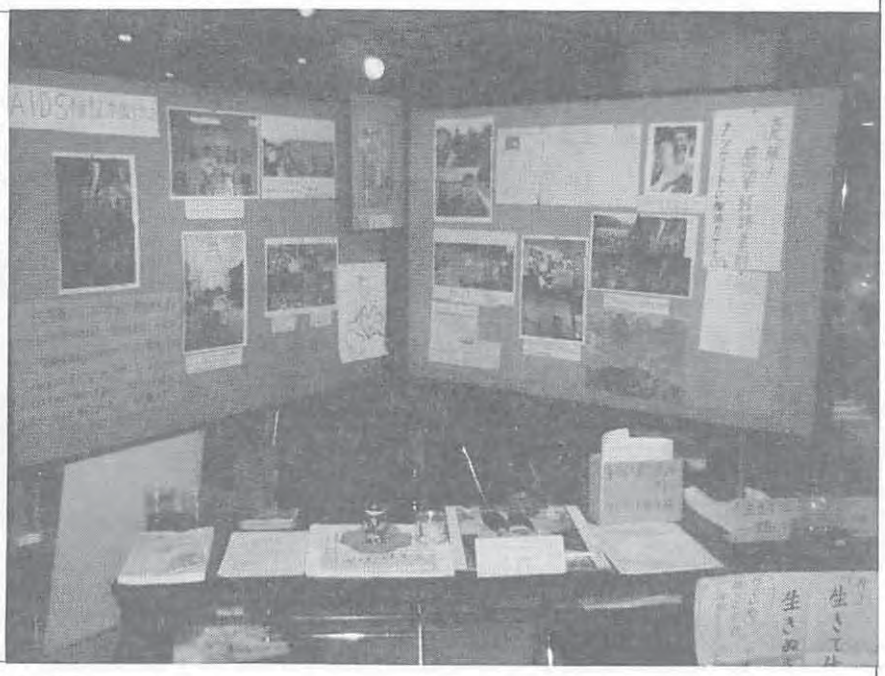
A－(16)

ＡＩＤＳ福祉が欲しかった

内　容

１９９５年度の文化フォーラムに「感染者をどう思いますか？感染者とのトーク＆トーク」で参加した新井康和君が、１９９７年４月に３４才で息を引き取りました。

セッションでは私たちの体験を語り、ブースには彼の描いた絵や一緒に撮った写真を飾りました。



主　催　　東京ＡＩＤＳ福祉勉強会
連絡先　　〒166-0001　東京都杉並区阿佐谷北5-37-2コーポA103号　加藤　孝
TEL 03-3330-0324

A－(17)　１０分でわかるＡＩＤＳコーナー

内　容

誰にでもわかりやすくＡＩＤＳのことを伝えたい、と考えて、“セイファーＳＥＸ編”と“ＨＩＶ感染者へのマナー編”という人形劇を上演しました。

人形劇の形をとることで、人前で話すことに照れてしまうような言葉も自由に表現できました。

さらに、聴覚障害者の方にも情報を提供できるように、現在、人形劇に字幕と手話をつけたビデオを作成しています。

主　催　　かながわレッドリボンクラブ
連絡先　　〒231-0014　横浜市中区常盤町1-7　横浜YMCA内
TEL 045-662-3721　FAX 045-651-0169

A－(18)　ＡＩＤＳ資料展（夏のかながわレッドリボン月間）

内　容

(1)かながわレッドリボン運動

赤いリボンは、ＨＩＶ感染者やＡＩＤＳ患者の皆さんへの理解と支援の世界共通のシンボルです。

1994年の国際エイズ会議への取り組みとともに始まった『かながわレッドリボン運動』は、各種キャンペーンや、レッドリボンバッチの有償配布を通して、運動の輪を広げています。

(2)かながわレッドリボン月間

レッドリボン運動を充実させるために、県と関係団体がタイアップしたエイズ対策強調月間として、春・夏・秋、年３回の『かながわレッドリボン月間』を設定しました。

(3)夏のかながわレッドリボン月間

夏休みの期間をとらえるとともに、国際エイズ会議の成果を記念して、７月１６日から８月１５日の１か月間で設定してあります。主なイベントは次のとおりです。

①1997 AIDS 文化フォーラム in 横浜
・映画秋桜・土橋正之写真展・AIDS資料展
②かながわエイズボランティア育成講座
③第６回かながわAIDSポスターコンテスト
④全県各戸配布新聞折り込み広告　など

(4)ＡＩＤＳ資料展

神奈川県の収集したエイズ関連の書籍、ビデオ、パンフレット、キルトや世界のエイズポスター等を展示しました。

主　催　神奈川県　衛生部　保健予防課
連絡先　〒231-0021　横浜市中区日本大通り１
TEL 045-201-1111　FAX 045-212-8324

A－(19)　エイズを生きる－LOVE of LIFE with AIDS－(土橋正之写真展)

主　催／神奈川県衛生部保健予防課

挨　拶（写真展より）

エイズという病気が１９８１年にアメリカで発見されてから、僅か１０数年の間に全世界のＨＩＶ（エイズを引き起こすウイルス）感染者は、推定で1,950 万人をかぞえ、３～５００万人の尊い命がこの病気で失われました。(WHO, 1994年末)

私は平成４年度文化庁芸術家在外研修員としてアメリカに１年滞在した折りに、日本では数字や統計が先走りする観があるHIV/AIDSの実績を写真を使って捕らえられないかと思い立ちHIV感染者、AIDS患者をたずね歩き、写真とインダビューでまとめ上げました。

その過程で私が見たのは病気だけではなく偏見や差別とも闘う感染者と、この状況を克服しようと努力するアメリカ社会の姿でした。

９４年に横浜で開催された国際エイズ会議で出会った感染者が、こんな話しを私にしてくれました。「エイズという病気は人種や年齢、宗教といった一切の関係の区別なく人種のすべてに襲い掛かる病気だ。いまこそ私たちは、互いの違いを乗り越え、一つの目標『エイズ克服』にむかって人類の英知を結集させる時がきた。もしかすると『エイズ』はそれを教えるためにこの地球上に表れた病気ではないか。」

いま、一人ひとりが、身近な問題として「エイズ」をとらえ、正しい知識を身につけることが、自らをＨＩＶ感染の危険から守るとともに、すでにＨＩＶに感染した友人を受け入れる社会作りを可能にします。

全世界の人口を５７億人とすると、人類の約３００人に一人がＨＩＶに感染している計算になります。いまやエイズは決して他人事ではありません。

今回、ここに展示した写真をご覧いただいた皆さんが「エイズ」という病気に関心をもって、さらに知識を、そして理解を深めるという機会となることを心から願って止みません。

感　想

・淡々と語られるアメリカの感染者の方々の語りは説得力がありました。暗さがみじんもない写真に見る側の心が問われているように感じました。
・エイズは他人事でなく、普通の人が、自分の事として体験することを痛感しました。
・メッセージ性が高いと感じた。一つ一つの写真から伝わる暖かさ、明るさは何処から？
・日本の感染者にも、こんなふうに堂々と笑って暮らせる環境を一日も早く提供したい。
・我々は一体何のために生きてるのかを、写真の人達が問いかけているようだ。
・「行為やモラルに対する神の審判ではない」との一言の当たり前に気づかされます。

連絡先：写真貸出情報等
土橋正之
〒154-0024
東京都世田谷区三軒茶屋1-10-5
TEL 03-3418-1131
ｲﾝﾀｰﾈｯﾄﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ
WWW.costarica.co.jp/selfesteem
e-mailアドレス
dobashi@tkb.att.ne.jp

"4 EVER"
you like
Dis! o.k.

関連プログラム

○ かながわエイズボランティア育成講座（１９９７年度夏コース）

1．プログラム

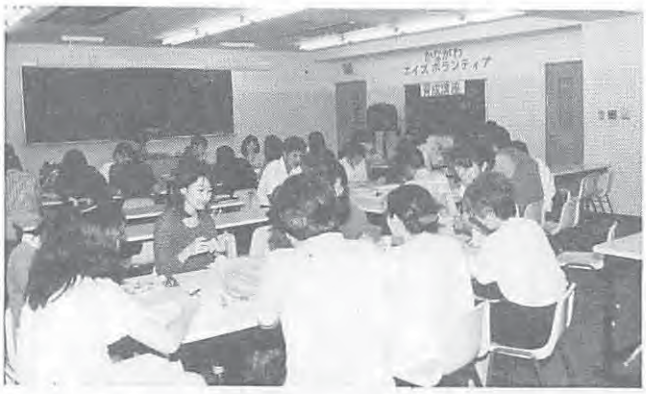
	日　程	会　場	内　容　・　講　師
第1回	7月12日（土） 14:00～ 17:00	横浜ＹＭＣＡ	ボランティアを始めるにあたって ・昭和音楽大学短期大学助教授　西村美東士
第2回	7月19日（土） 14:00～ 17:00	横浜ＹＭＣＡ	エイズ・いま・何を、どう伝えるか ・鎌倉保健所医師　岩室紳也
第3回	7月27日（日） 13:00～ 16:00	横浜ＹＭＣＡ	AIDSの基礎知識　患者・感染者としての生活 ・長谷川病院／家族機能研所医師　吉永陽子
第4回	8月　2日（土） 14:00～ 17:00	横浜ＹＭＣＡ	啓発活動と仲間同士のカウンセリング ・せかんどかみんぐあうと代表　大石敏寛
第5回 ～ 第6回	8月　8日（金） ～ 8月10日（日）	かながわ 県民センター	フィールドワーク ・「1997 AIDS 文化フォーラム in 横浜」 でのボランティア体験
第7回	8月10日（日）	かながわ 県民センター	今後の活動を目指して ・かながわレッドリボンクラブ

2．受 講 料　：無　料

3．参加者数　：43名（募集人員：50名）

4．主　　催　：神奈川県・横浜ＹＭＣＡ

5．事 務 局　：横浜ＹＭＣＡ
ﾜｰﾙﾄﾞ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ･ｾﾝﾀｰ



6．参加者の文化フォーラムへの感想（主に反省点）
・初めての活動で全体の雰囲気をのみこみ自分の居場所を考えるだけで精一杯（30代・女性）
・脱皮していく自分が感じられる有意義なワークだった。次回は友人を誘う　（20代・女性）
・各講の内容に浸ってしまいたいほど興味を持ったが役割がありできなかった（30代・男性）
・ボランティアの運営が、ただ人がいるというような感じで効率的でなかった（50代・女性）
・マザーテレサでは、３０名の会場に８０名も集まり椅子の準備で大変だった（20代・女性）
・ボランティア同士、知り合いか慣れているのか内輪のお茶会になっていた　（50代・女性）
・各主催者と会場ボランティアのコミュニケーションが不十分だった。　（20代・女性）
・フィールドワークのミーティング時間をもっと取って万全の体制を望む　（40代・男性）

関連プログラム

○ かわさきエイズボランティア講座　（３０名受講）　　主催：川崎市衛生局疾病対策課

	日　程	会　場	内　容　・　講　師
第１回	7月１９日（土） 13:00～ 17:00	川崎市 健康・検診 センター	ボランティアとしての基礎知識 ・横浜ＹＭＣＡ　長沢勲 ＡＩＤＳの基礎知識 ・川崎市疾病対策課主幹　浜村嘉允
第２回	8月　２日（土） 13:00～ 17:00	川崎市 健康・検診 センター	朗読ワークショップ「思いを知る」 ・Ⅱ.Ⅰ.Voice•Act 岡島龍彦　他 カウンセリングマインドの実際 ・神奈川県臨床心理士会
第３回	8月　８日（金） ～ 8月１０日（日）	かながわ 県民センター	フィールドワーク（３日から１日を選択） ・「1997 AIDS 文化フォーラム in 横浜」 でのボランティア体験
第４回	8月１６日（土） 13:00～ 17:00	川崎市 健康・検診 センター	在宅ケアについて ・多摩保健所保健婦　堀田彰恵 エイズボランティアの実際 ・ぷれいす東京　池上千寿子
第５回	8月３０日（土）	川崎市 健康・検診 センター	今後の活動を目指して ・横浜ＹＭＣＡ　長沢勲 閉講式

（参加者の文化フォーラムへの感想）

①色々な世代、色々な人たちによる色々な関わり方があることを改めて知った。実に色々なことができるんだなー。若者の多いのに驚き、年輩の男性の少ないのにやっぱりと思う。

②大勢の人がボランティアとして活動していてびっくりした。参加者も多く、特に若い人の参加が多いように思った。朗読ワークショップには中学生も参加していた。頼もしい。

③秋桜の映画を見て本当にエイズにより一人ひとりの人生が苦しみを味わうというとを知り、生命をもっと大切にするよう若者に呼びかけたい。関係ないとする人がまだまだ多い。

④これほど多くの民間ボランティア団体が、エイズに関して活動しているということを初めて知るとともに、部屋に入りきれない程の参加者で市民の関心の大きさも知りました。

⑤この種の催しの参加者は大半が女性であり、男性の参加者がとても少ない。男性の知識や意識が低いということなんでしょうか？　男性や将来ある青少年への啓発を期待します。

⑥ボランティアにたずさわっている方がこんなにも多いのかと驚いた。それと共に自分にも何かできる事があるかも知れないという自信がもててよかった。

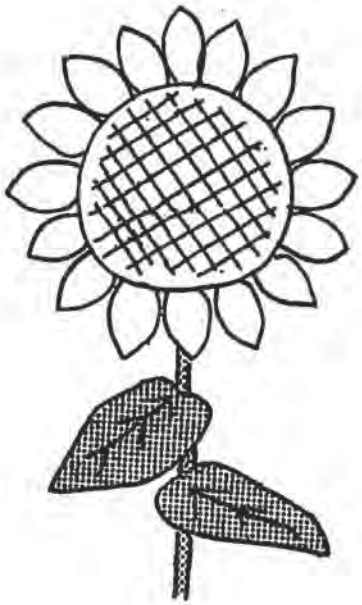
⑦意外に沢山の方がＡＩＤＳに関心を持っているのだなと思う反面、社会の中にこんな少数の人たちしか関心がないのか、と相反する気持ちになった。ＡＩＤＳは今でもとても大変な病気なのに、一時マスコミで騒がれた時よりもトーンダウンしていることが気になる。

関連プログラム

○ Yokohama AIDS Week'97 in JOINUS

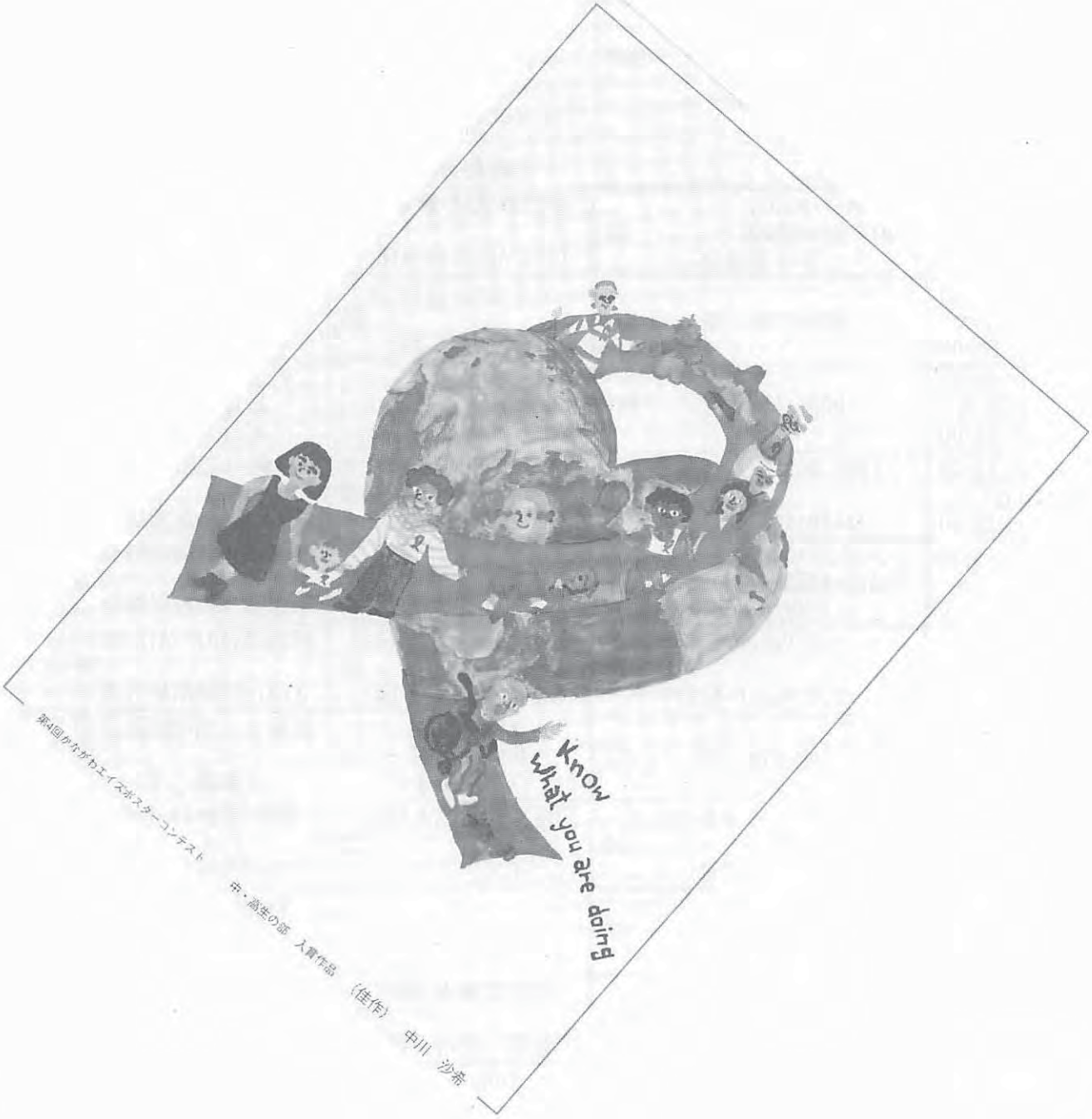
テーマ：まっすぐみつめる。愛と、エイズと、人生と。
日　程：１９９７年8月9日（土）～１０日（日）
会　場：横浜駅西口　相鉄ジョイナス４階　自然の広場
内　容：①パネルクイズラリー　（参加者1,130 名）
自然の広場に設置したパネルのクイズをラリーする
②クイズスタンプラリー（参加者　140 名）
ジョイナス⇨岡田屋モアーズ⇨横浜三越⇨かながわ県民センター
の各ポイントでクイズに答えながらラリーをする。
③ＡＡＡ（Act Against AIDS）コーナー
フィルムコンサート（サザンオールスターズ他）
フォトメッセージ　（ルーマニアの子どもたち）
④土橋正之写真展「エイズを生きる」
⑤弦楽四重奏とフルートによるミニコンサート（Katzen Musik Quartett ）
⑥トークショー＆フォトメッセージ
１７歳でＨＩＶに感染した少女、バルバラ・サムソンさんの物語
「不真面目な１７歳」の翻訳者、鳥取絹子さんのトークショーと
バルバラさんの写真によるメッセージ（撮影：百瀬恒彦）
⑦ひまわり運動もちよりコーナー

主　催：横浜ＡＩＤＳ市民活動センター



集計・評価・記録

第　3　章



第4回かながわエイズポスターコンテスト
中・高生の部　入賞作品　（佳作）　中川　沙希

入場者の内訳と集計

「1997 AIDS文化フォーラム in 横浜」 ～未来への集い～

	一般参加のプログラム	実行委員会シンポジウム	映画「コスモス」	写真展・パネル展	開会式・閉会式	合計
プログラム数	(42団体)50回	3回	4回	(16団体)3日	2回	(58団体)62回
参加者の合計	1777人	229人	771人	1530人	300人	4607人
平均参加者数	36人	76人	193人	510人	150人	74人

日	時間	B会場（2Fホール）	C会場（301室）	D会場（302室）
8日（金）	10:00 ①～12:00	映画「秋 桜」(コスモス) 監督／すずきじゅんいち 260 出演／小田島・松下恵地	★開会式 12:45~13:00 1階展示場	
	13:00 ②～15:00		エイズの模擬授業 91 (性を語る会：北沢杏子)	朗読ワークショップ 32 (H.I.Voice・Act)
	15:30 ③～17:30	シンポジウム① 「HIV 医療の可能性を探る」 39 (実行委員会)	何ができるかAAAと一緒に考えよう 25 (Act Against AIDS)	Video Against AIDS アメリカのAIDS市民運動 9 (財)横浜市女性協会)
	18:00 ④～20:00	映画「秋 桜」 130	ますますPositive 95 (バトリック & 神地)	ある日の保健室 23 (AIDSネットワーク横浜)
9日（土）	10:00 ①～12:00	映画「秋 桜」 151		Video Against AIDS 教育とAIDS 13 (実行委員会)
	13:00 ②～15:00	「みずら」から見た外国人女性への人権侵害 55 (かながわ・女のスペース"みずら")	ONE WORLD AIDS POSTER 27 (HIVと人権・情報センター東京)	いのちの輝き 石田吉明フォトエッセイより 21 (滋賀エイズ を考える会)
	15:30 ③～17:30	シンポジウム② 「AIDS・教育現場からの提言」 70 (実行委員会)	AIDSを生きる 人々の気持ち 35 (HIVと人権・情報センター東京)	PWAとの関わりから人権と共生を考える 9 (鹿児島/エイズを正しく知る会)
	18:00 ④～20:00	H.I.Voice 劇場 20 (H.I.Voice・Act)	「共生」を「強制」でなくどうツクル? 12 (HIVと人権・情報センター東京)	みずか様が考えるHIV/AIDSのコト 50 (CAI・性風俗研究会)
10日（日）	10:00 ①～12:00	映画「秋 桜」 230	女性とAIDS －女性に限定－ 36 (吉永陽子)	克服！ 感染経路差別 15 (加藤 孝)
	13:00 ②～15:00	PWAのネットワークを考える 60 (ポジティブネットワーク)	同性間性行為とAIDS 32 (エイズアクション)	米国のエイズ医療・ボランティアの現状 46 (フレンズフォーライフ／浜松)
	15:30 ③～17:30	シンポジウム③ 「ボランティアって何だ!」 70 (実行委員会)		Video Against AIDS PWA 27 (実行委員会)
	18:00 ④～20:00		閉会式★★交流会 150 組織・実行委員会	
3日間合計	プログラム合計	(10回) 3日	(9回) 3日	(10回)
	参加者合計	1135人	503人	245人
	平均参加数	(114人) 378人	(56人) 168人	(25人) 82人

1F展示場／A会場	(19)（写真展）　土橋正之写真展「ＡＩＤＳを生きる」 (18)（資料展）　図書・ビデオ・新聞切り抜き・パンフ				
1F展示場 A会場（パネル展）発表団体一覧	(1)性を語る会 (2)リボンプロジェクト ジャパン (3)有縁支援いのちの山彦電話 (4)徳島県池田保健所	(5)H. I. Voice 編集局 (6)JAPANetwork (7)ＣＲＩ (8)エイズアクション	(9)横浜エイズ勉強会 (10) メモリアル・キルト・ジャパン (11)グループ　ＰＡＺ (12)かながわレッドリボンクラブ	(13)Act Against AIDS (14)横浜AIDS市民活動センター (15)奈良HIV訴訟を支える会東京支部 (16)AIDS福祉を考える会・加藤孝	

日	時間	E会場（３０３室）	F会場（３０４室）	G会場（３０５室）	A会場	合計
8日（金）	10:00 ① 12:00				開会式 150	410/ ＊410
	13:00 ② 15:00	鹿児島大学 医学部病院裁判 36 （中前康友）	キルトをぬいながら エイズを語る 51 （ＡＢＣキルト）	バリアフリー 企業・地域・医療 50 （ソクラテス プロジェクト）	写真展 パネル展	260/ ＊670
	15:30 ③ 17:30	コンドーム・バージン☆女編 ⇨ （かながわレッドリボンクラブ）	コンドーム・バージン☆男編 ⇦ 女男編 40 （横浜エイズ勉強会）	AIDS福祉が欲しかった 25 （加藤　孝）		188/ ＊858
	18:00 ④ 20:00	PEER EDUCATION 女性から女性へ 16 （高村文子）	インターネットとパソコンによるPWA/H 支援活動 [illegible] （ライフ・エイズ・プロジェクト・LAP）	最新のウイルス学 15 （玉川重徳）	550	279/ ＊1687 ◇1687
9日（土）	10:00 ① 12:00	はじめての性教育 乳幼児をもつママへ 17 （ＣＳＲ／岡村聡子）	タイ女性支援から学んだこと 27 （"みずら"/レッドリボンクラブ）	AIDS教育公開授業 小・中学校編 80 （千葉／ぴーはいぶ・いちかわ）		288/ ＊288 ◇1975
	13:00 ② 15:00	マザーテレサと その活動 30 （グループＰＡＺ）	キルトディスプレイと ディベアワークショップ 32 （メモリアル・キルト・ジャパン）	AIDS教育公開授業 高校編 120 （神奈川／高校教師）		335/ ＊623 ◇2310
	15:30 ③ 17:30	コミュニティ・パートナシップ・プログラム 企業とAIDS 33 （リーバイ・ストラウス ジャパン）	AIDS電話相談員パネルディスカッション 50 （横浜いのちの電話）	病気・ケガの種類によってどうして こんなに差がある？ 日本の福祉 38 （HIV不当解雇訴訟支援団）		235/ ＊858 ◇2545
	18:00 ④ 20:00	対話が拓く医療 －薬害エイズ から学ぶ－ 17 （薬害エイズを追求する市民ネットワーク）	こども買春防止に向けて・現状報告 14 （STOP子ども買春の会/YMCA同盟）	医者が語るAIDS教育 （北海道/「ストップ・エイズ」ジャパン実行委員会・及川敏） 24	480	137/ ＊1475 ◇3162
10日（日）	10:00 ① 12:00	異文化の中でAIDS と共に生きる 16 （ＣＲＩ－ラテンプロジェクト）	オーストラリアの エイズ医療体制 28 （国立感染病院/井原章裕）	AIDS患者・HIV 感染者 の社会的役割 22 （せかんど かるんぐあうと）		347/ ＊347 ◇3509
	13:00 ② 15:00	性教育グッズで伝える いのちの大切さ 25 （横浜エイズ勉強会）	同性愛者のための電話 相談・統計報告 40 （動くゲイとレスビアンの会/アカー）	PHAのための法的サポートと環境の改良 12 （AIDS予防法を考える会）		215/ ＊562 ◇3724
	15:30 ③ 17:30	Safer Sex Workshop for Gay Men 18 （ぷれいす東京）	－私たちがAIDSから学べること－ 愛と思いやり 36 （土橋正之）	10分でわかるAIDSコーナー A－(17) 32 （かながわレッドリボンクラブ） 8/8-10　A会場	500	233/ ＊1295 ◇4457
	18:00 ④ 20:00					150/ ＊1445 ◇4607
3日間合計	プログラム 合計	（１０回）　３日	（　９回）　３日	（　９回）　３日	３日	３日
	参加者合計	２７８人	２９８人	３８６人	1,762人	4,607人
	平均参加数	（２８人）　９３人	（３３人）　９９人	（４３人）　１２９人	587人	1,536人

アンケート

１９９７ＡＩＤＳ文化フォーラムｉｎ横浜　入場者アンケート

このアンケートは、ＡＩＤＳ文化フォーラム及び横浜ＹＭＣＡが実施するＡＩＤＳ関連の事業の参考資料として活用するためのものです。誠にお手数ですが、プログラム終了後にご記入いただき、会場内にあるアンケートＢＯＸに入れていただくようお願いいたします。

■該当する項目の記号を○で囲んでください。（　　）内につきましては、可能な限りご記入下さい。

１．ＡＩＤＳ文化フォーラムへの入場年度についてお聞かせ下さい。（複数回答可）
　ａ．９７年度　　ｂ．９６年度　　ｃ．９５年度　　ｄ．９４年度

２．ＡＩＤＳ文化フォーラムのことを何でお知りになりましたか。
　a.新聞記事（　　新聞）　b.情報誌（　　）　c.折り込み広告（　　新聞）
　d.テレビ（　　）　e.ラジオ（　　）　f.パソコン情報（　　）
　g.ﾀﾞｲﾚｸﾄﾒｰﾙ（どこから　　）　h.チラシを手にした（どこで　　）
　i.クチコミ（だれから　　）　j.その他（　　）

３．１９９７ＡＩＤＳ文化フォーラムではいくつのプログラムに入場されましたか。
　　または、期間中いくつのプログラムに参加する予定ですか。
　a.1　b.2　c.3　d.4　e.5　f.6以上（　　プログラム）

■統計資料として活用させていただきますので、可能なかぎりご記入下さい。
居住地（　　都道府県）　性別　（男性）・（女性）・（　）
年　代　10代・20代・30代・40代・50代・60代以上
職　業（具体的にご記入下さい：

■ＡＩＤＳ文化フォーラムの感想、今後実施してほしいプログラム、その他の意見等がございましたら、ご記入下さい。（裏面も記入可）

■今後もＡＩＤＳ文化フォーラム及び関連イベントの案内を希望される方はご記入下さい。

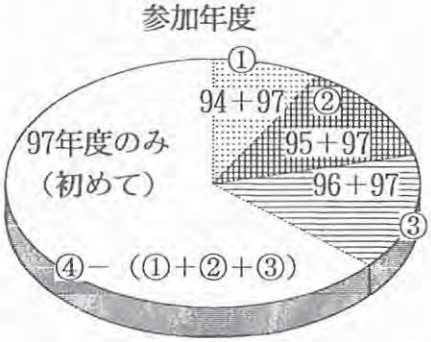
氏名		電話番号	
住所	〒		

ご協力ありがとうございました。　ＡＩＤＳ文化フォーラム実行委員会

１９９７　ＡＩＤＳ文化フォーラム　ｉｎ　横浜
入場者アンケート・集計表

１　ＡＩＤＳ文化フォーラムへの参加年度についてお聞かせ下さい。（複数回答可）
①９４年度（65）　②９５年度（ 100）　③９６年度（ 117）　④９７年度（ 777）

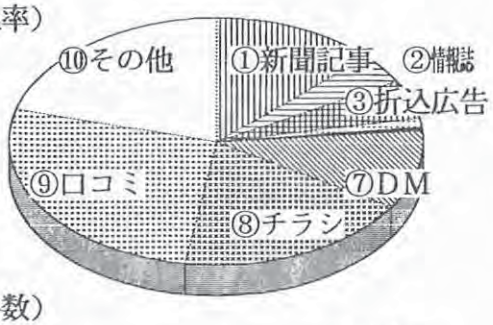
	参加年度	人数	比率
①	94＋97年度	６５人	８％
②	95＋97年度	１００	１３
③	96＋97年度	１１７	１５
	97年度のみ	４９５	６４
④	９７年度計	７７７人	100 ％



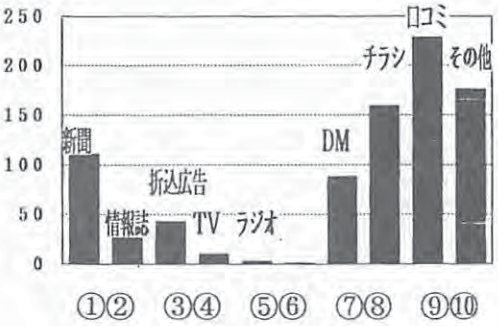
２　ＡＩＤＳ文化フォーラムを何で知りましたか。
①新聞記事（ 111）②情報誌（33）③折込広告（43）④テレビ（ 9）⑤ラジオ（ 3）
⑥ﾊﾟｿｺﾝ情報（ 1）⑦ＤＭ（88）⑧チラシ（ 159）⑨口コミ（ 229）⑩その他（ 176）

	何で知ったか	人数	比率
①	新聞記事	１１１人	１３％
②	情報誌	３３	４
③	折込広告	４３	５
④	テレビ	１０	１
⑤	ラジオ	３	０
⑥	ﾊﾟｿｺﾝ情報	１	０
⑦	ＤＭ	８８	１０
⑧	チラシ	１５９	１９
⑨	口コミ	２２９	２７
⑩	その他	１７６	２１
	全体件数	８５３	100

（比率）



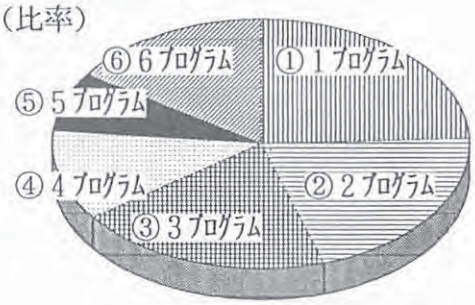
（件数）



3　１９９７ＡＩＤＳ文化フォーラムではいくつのプログラムに入場されましたか。
または、期間中いくつのプログラムに参加する予定ですか。

	参加プログラム 数	人数	比率
①	1プログラム	１７３人	２４％
②	2プログラム	１４８	２１
③	3プログラム	１４１	２０
④	4プログラム	８２	１１
⑤	5プログラム	５６	８
⑥	6プログラム以上	１１１	１６
	合　計	７１１	100

（比率）

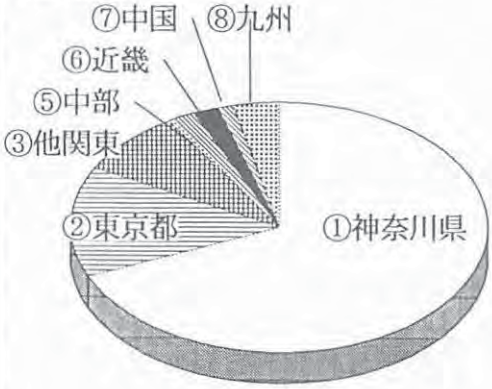


平均参加プログラム 数　3.04／１人

4　あなたの居住地域は？

	居住地域	人数	比率
①	神奈川県	５１８人	６８％
②	東京都	１０９	１４
③	その他関東	６３	９
④	北陸	２	０
⑤	中部	１４	２
⑥	近畿	１５	２
⑦	中国	９	１
⑧	九州	２７	４
	合　計	７５７	100

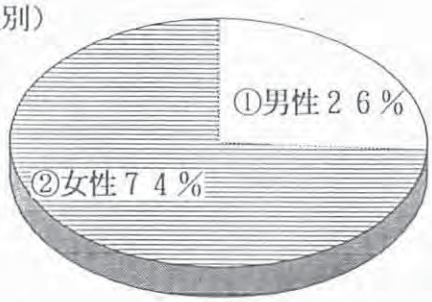
（居住地域）



5　あなたの性別は？

	性　別	人数	比率
①	男性	１７３人	２６％
②	女性	４９５	７４
	合　計	６６８	100

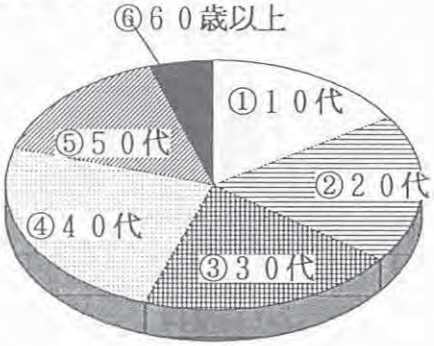
（性別）



6　あなたの年代は？

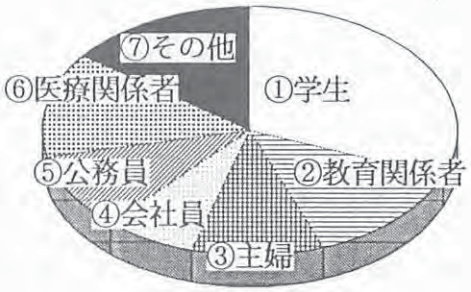
	年　代	人数	比率
①	１０代	１２３人	１６％
②	２０代	１５０	１９
③	３０代	１５６	２０
④	４０代	１８９	２５
⑤	５０代	１１８	１５
⑥	６０歳以上	３９	５
	合　計	７７５	100

（年代比率）



7　あなたの職業は？

	職　業	人数	比率
①	学生	１８１人	３１％
②	教育関係者	７８	１３
③	主婦	６０	１０
④	会社員	４２	７
⑤	公務員	５８	１０
⑥	医療関係者	７９	１４
⑦	その他	８７	１５
	合　計	５８５	100



②の教育関係者の内訳（教師５９、養護教諭１７、看護学校教諭２）
⑥の医療関係者の内訳（医師６、歯科医師１、保健婦３５、看護婦１２、助産婦４、薬剤師６、臨床検査技師５、ﾒﾃﾞｨｶﾙ･ｿｰｼｬﾙﾜｰｶｰ　１、獣医１、その他の医療関係者８）
⑦のその他の内訳（マスコミ関係８、フリーター５、無職５、理容師１、自営業１、図書館員１、舞台制作１、オペレーター２、通訳１、ﾊﾞﾀﾝﾅｰ　１、その他６１）

1．ボランティア募集チラシ

1997AIDS文化フォーラムin横浜～8/9-8/10～ボランティア募集中

市民のためのフォーラム
会場ボランティア募集

1997AIDS文化フォーラムin横浜

AIDS文化フォーラムは1994年より継続して行っている市民のための市民の手によるAIDSのフォーラムです。過去3年間に150名以上の方がボランティアとしてこのフォーラムをサポートしてくれました。第4回目の今回のフォーラムは、過去最大の規模で実施されますので、会場運営ボランティアを募集しています。

日　時：1997年8月8日（金）～10日（日）午前10時～午後8時（日時はシフト制）
　　時間帯：a.9:45～12:15　b.12:45～15:15　c.15:15～17:45　d.17:45～20:15(8/8･9のみ)

場　所：1997AIDS文化フォーラム会場
　　（かながわ県民活動サポートセンター：横浜駅西口）

内　容：1997AIDS文化フォーラムの会場ボランティアとして
　　会場準備・会場案内・講座運営補助等をしていただきます。

条　件：1．期間中2時間帯以上参加できる方
　　2．オリエンテーションに参加できる方
　　3．会場までの交通費等を負担できる方
　　4．会場準備・会場案内・講座運営補助等のできる方

ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ：1997年8月2日 10:00～12:00　かながわ県民センター 1階展示場
　　ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝに出席できない方は、当日会場にて役割等の説明（約30分）を行いますので、必ずどちらかにご出席下さい。　役割説明：8/8・8/9・8/10　9:00-・12:15-

お申込み：申込書に御記入の上、郵送又はFAXで事務局までお申込み下さい。期間中のシフトにつきましては、ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝの際にお渡しいたします。ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝに参加できない方につきましては、シフト表を8月上旬に郵送いたします。ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ及び役割説明は直接会場にお越し下さい。

事務局　：1997AIDS文化フォーラムin横浜事務局
　　〒231　横浜市中区常盤町1-7
　　横浜YMCA　ワールド・コミュニケーション・センター
　　TEL　045-662-3721　　FAX　045-651-0169

キ リ ト リ

1997AIDS文化フォーラムin横浜　ボランティア申込書

ﾌﾘｶﾞﾅ 氏　名		性　別 男・女	生年 月日	（ボランティア保険用） 19　　年　　月　　日生（　　才）
住　所	〒 TEL　（　　）			
ボランティア希望日時　○印で囲んで下さい。 8/8(金)　a・b・c・d　　8/9(土) a・b・c・d　　8/10(日)　a・b・c				
ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ：参加　・　不参加→ 役割説明：8/8・8/9・8/10　時間：9:00～・12:15～　に参加				

1997AIDS文化フォーラムin横浜～8/9-8/10～ボランティア募集中

2．ボランティアオリエンテーション

A．ボランティアオリエンテーション
日　時：１９９７年8月2日　１０：００～１２：００
場　所：かながわ県民センター　１０１・１０２会議室
内　容：1．挨拶・開催経過・目的・特徴（長沢　勲）
2．実行委員紹介
3．第1回～第3回のＡＩＤＳ文化フォーラムの様子（矢部尚美）
4．ボランティアマニュアルの説明（矢部尚美）
5．会場からのお願い（吉田信雄：かながわ県民活動サポートセンター）
6．会場ツアー（岡島龍彦）
担当者：岡島龍彦・多田由加里・千代木ひかる・長沢勲・矢部尚美・吉田信雄

ＡＩＤＳ文化フォーラム実行委員会では、従来から、フォーラムの当日の会場運営をボランティアの方々に手伝っていただいています。ボランティアの方々には、ボランティアマニュアルをお渡しするとともに、事前に会場でのボランティアオリエンテーションに参加していただき、フォーラムへの理解を深めてもらった上で、参加していただきました。

B．当日の役割説明会
日　時：1997年8月8日～１０日　９：００～９：３０　１２：００～１２：３０
場　所：かながわ県民センター　１０１・１０２会議室
内　容：1．挨拶・開催経過・目的・特徴
2．役割説明
3．連絡事項
担　当：岩室享子・矢部尚美・吉田信雄

1997年度のＡＩＤＳ文化フォーラムでは、過去最高のボランティアの申込があったことや、当日に役割説明を行うこと等から、ボランティアのための控え室を設けました。
また、ボランティア担当として、岩室享子・矢部尚美・吉田信雄の3名が開催期間中のボランティア全体のコーディネイトを行いました。
期間中、ボランティアは、プログラム開始前に控え室内の各会場毎のコーナーに集合し、同じプログラムを担当するボランティアと顔合わせをし、ボランティアコーディネーターから最終の連絡や確認を受けてから、会場に移動しました。また、このフォーラムでは、ボランティアの方々から提案していただいた点は、例えば会場案内の追加掲示や、プログラム資料の追加コピーの円滑化等、できる限りその場で改善をしていくよう努めました。

会場ツアー

ボランティアマニュアルの説明

3．ボランティアマニュアル

１９９７ＡＩＤＳ文化フォーラムin横浜
ボランティアマニュアル

１．目的

「１９９７ＡＩＤＳ文化フォーラムin横浜」の実施に関して、ボランティアとして関わり、このフォーラムを支え、成功させることにある。このフォーラムは、神奈川県を中心としたAIDSに関心を持っている民間団体、N.G.O.が団体又は個人により組織され、すべてボランティアで行われる。別の表現では、自らの自由意志による手持弁当スタイルといわれている。

２．事務局

「１９９７ＡＩＤＳ文化フォーラムin横浜」の事務局は、横浜ＹＭＣＡ内にある。
〒231　横浜市中区常盤町1-7　横浜ＹＭＣＡ内
１９９７ＡＩＤＳ文化フォーラムin横浜事務局
TEL　045-662-3721　　FAX　045-651-0169
事務局長　長沢勲　　担当　千代木ひかる

３．組織

組織委員会

唐崎旬代	（横浜ＹＷＣＡ）	川本譲次	（横浜商工会議所ｴｲｽﾞ問題対策懇談会）
小久保一利	（かながわともしび財団）	榊原高尋	（横浜いのちの電話）
濱尾文郎	（カトリック横浜司教区）	吉村恭二	（横浜ＹＭＣＡ）組織委員長

実行委員会

広瀬　誠	（医師）実行委員長	岩室紳也	（神奈川県鎌倉保健所）副実行委員長
岡島龍彦	(H.I.　Voice　Act)	笠原　隆	（横浜AIDS市民活動センター）
鹿股久美子	（かながわﾚｯﾄﾞﾘﾎﾞﾝｸﾗﾌﾞ）	金　迅野	（神奈川県国際交流協会）
小島隆士	（横浜いのちの電話）	高村文子	（横浜エイズ勉強会）
多田由加里	（かながわ県民活動サポートセンター）		
長沢　勲	（横浜ＹＭＣＡ）	早川徳治	（神奈川県衛生部）
細井保路	（カトリック横浜司教区）	松江勝美	（横浜市海外交流協会）
矢部尚美	（ＹＭＣＡ　ＡＣＴ）	吉永陽子	（長谷川病院／家族機能研究所）
千代木ひかる（事務局）			

４．フォーラム開催場所

かながわ県民センター
〒231　横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2
TEL 045-312-1121　　FAX 045-312-4810

５．ボランティア

１９９６AIDS文化フォーラムでは、次のボランティアが会場運営を行う。
- かながわエイズボランティア育成講座受講生
- 川崎市エイズボランティア育成講座受講生
- 横浜AIDS市民活動センターボランティア
- かながわレッドリボンクラブメンバー
- その他（全国より募集したボランティア）

６．ボランティアの役割

- 実際の活動を通してボランティアについて学ぶ。
- エイズに関る人々との交流を通じてエイズについての理解を深める。
- 多くの人との交流を通しての成長。

7．当日の進行方法及び注意点

時　間	ボランティアリーダー	会場ボランティア
担当時間10分前	・ボランティア事務局（かながわ県民センター１０１会議室）に集合 ・シフトの確認　・出席表にチェック　・名札の受け取り	
講座開始20分前	・事務局より記録用紙及び入場者アンケート用紙を受け取る。 ・ﾋﾞﾃﾞｵﾃﾞｯｷ･ﾏｲｸ等の必要備品確認 ・事務局内の各担当コーナーで、会場ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱに連絡事項の確認をし、記録用紙を配布する。	・事務局内の各会場担当コーナーに集合 ・リーダーより記録用紙を記録用紙を受け取り、連絡事項があれば指示を受ける。 ・リーダーの指示により備品を会場に。
講座開始15分前	・ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱと共に会場に移動。 ・講座主催者／団体にあいさつ。 ・主催者と相談の上、会場のセット及び受け付け、ｺﾋﾟｰ等の準備。 ・ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ主催者へのお願い提示。	・会場に移動 ・リーダーの指示により会場のセット、受け付け、コピー等の準備をする。 ・入場者アンケートの配布。
講座開始	・講座の記録を取る。 ・講座中にコピーが必要になった場合には事務局を通してコピーをする。 ・講座中にイスが足りなくなる等の問題が発生した場合には、事務局まで連絡 ・リーダーは講座で配布した資料を事務局用に一部づつ回収する。 ＊マスコミによる取材の問い合わせは、事務局で許可を得るように案内する。 ＊写真についてはプライバシーに影響のない範囲内で報告書等に掲載する場合がある。参加団体には講座開始時に写真撮影の主旨を入場者に伝えてもらい写真に撮影されては困るという人はがいる場合にはリーダーが事務局の写真撮影スタッフが会場に入ってきた時に、撮影してはいけない方のことを伝える。	
講座終了後 （10分以内に）	・会場の片付けの指示。 ・記録用紙を集める。 ・記録用紙と資料を封筒にいれて事務局に渡す。	・リーダーの指示に従って会場片付け。 ・記録用紙をリーダーに渡す。 ・備品を事務局に戻す。
退出時	・名札を事務局に返す。 ・次回のシフトを確認する。（プログラムの関係上、最初に渡したものと変更になっている場合がある。）	
その他	・個人のプライバシーの尊厳のため、ボランティアとしてそのような事を知った場合には、秘密を守る。 ・ワークショップとワークショップの間の時間が一番忙しい時なので、会場の準備や入場者への会場案内等、積極的に動くように努める。 ・貴重品は各自で管理して下さい。 ・１０１・１０２会議室（展示場横）はボランティアの控え室になりますので休憩等の際にお使い下さい。 ・ボランティア担当の実行委員は、岩室・矢部・吉田となります。	
開催当日事務局	・本部事務局　３０６会議室　：　講座中の連絡場所 ・ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ事務局　１０１会議室　：　講座中以外のﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ連絡場所	

8．事務局　（1997AIDS文化ﾌｫｰﾗﾑin横浜及びかながわｴｲｽﾞﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ育成講座）

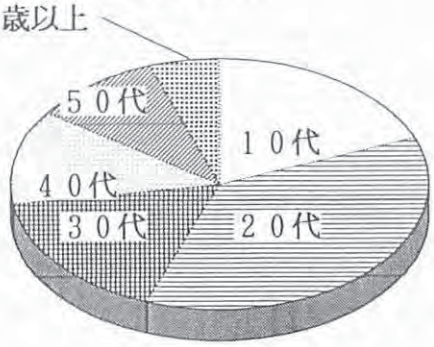
横浜ＹＭＣＡ　　ワールド・コミュニケーション・センター
〒231　横浜市中区常盤町1-7
TEL　045-662-3721　　FAX　045-651-0169

4．参加者の分析

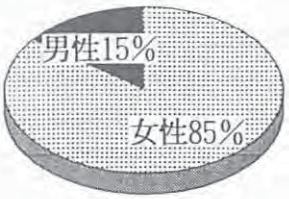
ボランティア参加者の概要

性別	女性					男性					合計	
年代＼参加形態	一般募集	YMCA育成講座	レッドリボンC	川崎育成講座	小計	一般募集	YMCA育成講座	レッドリボンC	川崎育成講座	小計	人数	比率
10代	22	2			24	1				1	25	19%
20代	12	20	5	4	41	2		3	2	7	48	37
30代	5	6	2	3	16	1	3	2		6	22	17
40代	6	3	4	2	15		1			1	16	12
50代	2	4	3	2	11		2			2	13	10
60以上	1	1	1	2	5	2				2	7	5
合計（男女比 %）	48	36	15	13	112（85%）	6	6	5	2	19（15%）	131（100%）	100%

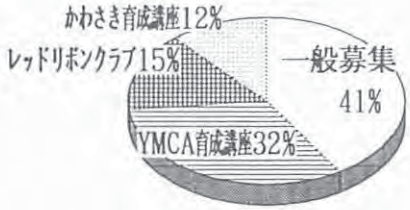
（年代構成）

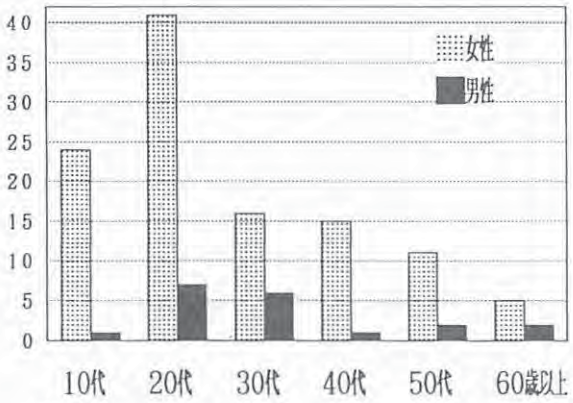


（男女比）



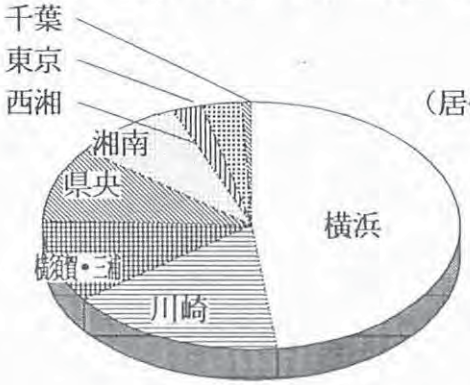
（参加形態）





居住地域	女性	男性	合計	比率
横浜	53	10	63	48%
川崎	18	4	22	17
横須賀・三浦	13	1	14	11
県央	10	3	13	10
湘南	11		11	8
西湘	3		3	2
東京	3	1	4	3
千葉	1		1	1
合計	112	19	131	100

（居住地域）



ＡＩＤＳ文化フォーラムを語る（実行委員座談会）　1997.12.4

＝フォーラムを終えて＝

（長沢）
１９９４年の横浜での第１０回国際ＡＩＤＳ会議に連動して始まり、毎年継続してきた「ＡＩＤＳ文化フォーラムｉｎ横浜」ですが、１回から３回までも含めて、今回の４回目を終えての感想をお願いしたい。私自身の感想としては、第１回目から考えてみると、第３回の１９９６年が一番苦しかった。でも、その苦しさが、今回（第４回目）の成功を生んだという気がする。

（岩室）
一言で言えば、続けていて良かった。こんなに続くとも思っていなかったし、こんなに需要があるとも思っていなかった。今回は4,600 名の参加者があり大盛況だったけど、ＡＩＤＳに関する世間の関心は昨年の方が高かったようにも思う。その関心が低下している状況でも、一か所へエネルギーを集中させれば、いままで集まりきれていなかったエネルギーが、行き場を見つけて集まってくる。ＡＩＤＳに関する潜在的な関心は決して低くはない。

（岡島）
アンケートを集計したが、県外参加者の多くから「地元ではＡＩＤＳで人が集まらなくなっていて意気消沈していたが、この文化フォーラムに来て同じ目的を持った沢山の人たちと出会えた。地元に帰って『まだまだやらなきゃ』というやる気がでた」という意見が随分あった。うれしい意見だったし、文化フォーラムの意義はそんな所にある。

また、今回は、サポートセンターに会場を移すとともに、入場者が減少傾向の中で逆に会場規模を倍にするという冒険もした。大胆でしたね。（笑い）
これで駄目なら仕方ないという居直りもあった。

（吉永）
第１回のときＡＩＤＳ文化フォーラムのことを本で紹介した。その時のタイトルの前に付けた『市民のための…』という言葉がとても気に入っている。国際ＡＩＤＳ会議は医療関係者の会議という意味合いが強いのに対し、ＡＩＤＳ文化フォーラムこそ市民のために続けるべきものであるという思いがあった。そしてずっと続いているからこそ、本当に市民のためのフォーラムになった。また、常にＰＷＡのニーズに答えているかという問い掛けがあったが、今年はＰＷＡ自身のセッションが出てきて、やっと目に見える形になってきたと思う。私には、その事がとても感動的であった。でも、これからですね。

（矢部）
第３回目までは、申込みのあった全てのプログラムに「場を提供する」だけだった。「全てを受け入れる」という姿勢であり、「自ら流れを作る」ということではなかった。言い方を変えれば、フォーラム自体がどの方向に進むのかがよく見えなかった。しかし、４回目の今回は、実行委員主催のシンポジウムを行うなどフォーラムの方向性が見えてきた。このことは大きいと思う。

＝実行委員会について＝

（岡島）
前回の第３回目に入場者が減少した危機感から、参加の各団体に「文化フォーラムのこれまでの評価と今後の期待について」アンケートを取った。こういう検証を重ねたことで、この実行委員会が何をやりたくて、何ができるのかが少しずつ見えてきた。
他の様々な実行委員会にも出席しているが、実行委員同士の関係を作っていく事がとても難しい。そういう信頼関係を、きちんと積み上げているこの実行委員会のノウハウを、他のイベントなどにも生かしていければなと常々感じている。ＡＩＤＳという個別のテーマだけに限定せず「組織論としての文化フォーラム」の有り様を広く伝えていきたい。

（長沢）
それは、それぞれに違うものを持っている実行委員で構成されていて、互いに違った世界を提供しあえていることが大きいと思う。また見過ごしてはいけない事は、このフォーラムが手弁当で、予算も無いし、プログラムも毎回ゼロから作っていかなくてはならないというマイナスというか、何も既得権を持たないこと。財産は信頼関係だけ、そういう人たちのつながりが、ひとつのエンパワーメントになっている。
でも良く考えてみると、ＡＩＤＳボランティア講座や、その卒業生で作られたレッドリボンクラブの参加等、このフォーラムを支える体制が、いつの間にか出来ている。

（岩室）
このフォーラムでは、どう人を集めるか？　どう人の関心をひくか？　というマーケティングの要素を、いろんな職種のいろんな考え方を持った人が、あらゆる物を拒否しないで、トラブルが無い程度のマネージメントでやっているからこそ、広がりを見せるのだと思う。誰かが、一人で考えたのなら、一定の枠にはまってしまったと思う。最低限のゆるやかな枠を、外に向かって提示しつつ「皆さん集まって下さーい…。」と言って枠を広げていくこの手法は、とても良いという気がする。欲を言えば、今後は、もう少し違う視点の人々にも実行委員になってもらってもいい。もっと多様になればいい。
来年は実行委員を増やしましょうか。

（多田）
私は今年初めてこの実行委員会に参加して、一つのイベントを作り上げていくプロセスに立ち会えてほんとに嬉しかった。対等で自由で各委員のキャラクターも素敵でワクワクしながら毎回の会議を楽しめた。もちろん本番の熱気も心地よいものだった。
これだけ全国規模になったなら、いっそ北海道ブロックは誰々、東北ブロックは誰々、九州は…なんて感じで５人ぐらい全国各地から加わってもらいアイデアの提供とその地域での広報を担当してもらうとか？
この喜びを、もうちょっと広げてもいいかも知れない。

＝事務局体制について＝

（吉永）
いつも気にかかっているのは、膨大な量の事務的な事をいつも横浜ＹＭＣＡに任せきってしまって申し訳ないなということ。横浜ＹＭＣＡの全面的な支えに甘えてしまっている。多様な価値観を受入れる横浜ＹＭＣＡの実績が多くの団体をつなげているのだろうし、その信頼に事務局がキッチリと答えている。この事務局の存在を、もっと、もっと評価してスポットを当てていくべきだ。

（千代木）
だれも事務局長１人に、事務局員１人の２人だけの事務局だとは思っていないでしょうね。（笑い）それも２人とも専任ではなく、他に仕事を抱えながらやっているなんてね。大きなオフィスがあって、臨時のボランティアが沢山つめているように思われているかも知れませんね。

（長沢）
逆に、事務局の人数が少ないからこそ、皆さんが支えようという気になるのかもしれない。あまり沢山の事務局員がいたら、もっと事務的になってつまらないものになってしまったかも知れない。

（千代木）
事務局が回りきれないことを、実行委員の方々が良く手伝ってくれるので、とてもありがたい。
私は、前任者の矢部さんから事務局を引き継いで１年目だったけど、実行委員の方が、仕事の休みの日に事務局に来て「今日はＤＭのラベルを貼りに来ました。」と言ってくれた時は、本当に自分たちで作るフォーラムなんだなと実感しました。また、前任の矢部さん、高村さんが、今度はボランティアの立場で実行委員会に加わってくれたのはとても心強かった。

（矢部）
実行委員会でＤＭの封入をしたこともありましたね。普通は実行委員というと会議だけをしていると思われがちですが。ＤＭ封入する病院長とか、看板を作る医師とかいうのも、あまり見られない光景ですよね。（笑い）

（千代木）
もう一つ今年は、会場運営のボランティアが、多彩だった。ボランティア育成講座の受講生がフィールドワークとして参加したり、レッドリボンクラブの面々が会場ボランティアのリーダー的な役割を担ってくれた他、一般の人たちのボランティア参加が目立った。この人たちは、県市が７月下旬に全県で実施したＡＩＤＳの新聞折り込み広告の中にたった一行『ボランティア募集…。』と出したのを見て応募してくれた。翌日から電話の問い合わせが殺到して、こんなにもボランティアという言葉に引力があるのかとびっくりした。

＝PWAのネットワーク＝

（長沢）
ところで、プログラム面での今年のフォーラムの特徴は何だったんでしょうか。

（岩室）
一つは、先程から出ているようにPWA自身の参加があったという点でしょうか。

（吉永）
舞台前にPWAが並んだ時は、壮観という気がした。今までは、大石敏寛さんの独演会という感じが強かったように、一人のPWAがカミングアウトすると、全てのPWAにその人の印象がつけられてしまうような怖さがあった。PWA自身は必ずしもカミングアウトする必要がないということと、でも限られた人だけのカミングアウトだとどうしても一人で全体を背負ってしまうのではないかということのジレンマがあった。
あれだけたくさんのPWAが前に並ぶと「いろいろなPWAがいる」という当たり前のことがよく分かった。入場者がどこまで認識したか判らないけれど、私には、こういう時代が来たんだ。と大げさでなく日本のPWAの歴史に立ち会ったと思った。

（岩室）
様々な思いはあるでしょうが、PWAが一堂に介することができた。また一堂に介する場として、彼らがこの文化フォーラムを選んでくれたことに感謝したい。

（岡島）
それは文化フォーラムが信頼されてきたからかも知れない。過去3回は、きっとどこかで見ていてくれたのだと思う。

（長沢）
ポジティブネットワークの今後に期待したいですね。

＝教育へのアプローチ＝

（岩室）
他には、AIDSは常に教育がワクチンであると言われながら、これまでは実際の教育現場の話しはあまり出てこなかった。今回のフォーラムでは、教育現場のAIDSへの取組の難しさも含めて、現場レベルでの意見交換と公開授業が実現した。実態が見えてきたし、教育のシンポジウムでは、入場者も多く、先生たちの熱心な姿勢もよく判った。
逆に学校では、教科書や文部省の考え方に縛られてしまい、限界があるようだ。その中で先生たちの工夫とか、挑戦も見えてきた。学校でできることの一つとして、学校の先生と学校関係者以外の専門家がチームティーチングをすることの重要性が明確になってきた。例えば、学校関係者が教えられないコンドームの事やSEXの事を、医者や保健婦が科学的に教えるという方法などもある。

（吉永）
もっともっと、行政・保健所側と、学校・保健教育側とが歩み寄るべきだ。AIDS教育のパートナーとしてお互いを認め合ってもらいたいですね。

（長沢）
このフォーラムでは教育の重要性の認識はできたと思う。それぞれの立場の専門家が集まり、協働して、AIDS教育をいかにして作り上げていくのかということが少し見えてきたと思う。そう言った意味では、AIDS教育の方向性を示せたのでは？

（岡島）
あれだけ教育関係者が集まったと言う事は、自分も何かしなくてはいけないが、どうしていいか分からないという教育関係者に一つの答えや、考えるきっかけを与えられたと思う。文化フォーラムで見た（得た）ものを、そのまま実行する人もいるし、工夫を加える人もいる。そして、その工夫をした人が来年、文化フォーラムで発表してもらえたらいい。

（吉永）
来年は、今まではAIDS教育だけはやりたくないと言っていた人のおしりに火がついて、今回の報告書が活用されるといいですね。

（千代木）
文化フォーラムが終わってから、教育関係者から資料を欲しいという問い合わせが実に多かった。

（長沢）
文化祭や授業のために、事務局に問い合わせてくれるのは、うれしいことである。そういったところから広がりをみせてくれることを期待している。

（岩室）
文化フォーラムと教育現場との間には、もう3年のギャップがある。今年から教育現場が動き出したなと感じたが、国際エイズ会議の頃、あっちこっちから流れていた情報は、今やほとんど枯れている。やっと動きだした教育現場が『情報が欲しい』と思った時には、もう情報が流れてこない状況になっている。だからこそ文化フォーラムが重要になってくるのだし、継続しているフォーラムの価値が見えてきたのだと思う。

（千代木）
残り少ない情報の枯れてない井戸なんですね。

（岩室）
そういう意味でもやはりPRが必要。もっと早い時期に徹底してやるといいでしょうね。特に教育関係者・医療関係者には年間計画を立てる4月頃から情報を流していく。

（吉永）
夏はAIDS文化フォーラム。お盆には田舎に帰れない。（笑い）

＝医療関係者へのアプローチ＝

（長沢）
今年は始めて医療、教育、ボランティアの３つのシンポジウムを行なった。今までは教育について触れてきましたが、医療の方はどうでしょうか。

（岩室）
良かった点は、マスコミの情報だけを見ているとＡＩＤＳはもう克服されたような印象を受ける。しかし、実際に治療効果の上がっている人もいれば、治療効果を上げるために非常に苦労している人もいる。感染しているシンポジストが、いかに薬が飲みづらいか、『食後に飲んで、食間に飲んで、朝晩に飲んで、朝昼晩に飲んで』といった話しをしてくれた。水を１日に２千cc飲まなくてはいけないこと等は大変なことですよ。フロアで聴いていた人は考えさせられたと思う。もう一つは、検査について、ＣＤ４という免疫の値をみる方法と、ウイルスの量を計る方法がある。シンポジストの一人が、「ＣＤ４というのは、病状の中で今どの位置にいるのかを示してくれる、ウイルス量を計るというのは、進行の加速度を計る。ウイルス量を減らすということは、スピードを減らすということだから、それ以上悪くならなければいいという意味で、もう一つの指標がでてきた。」という非常に分かりやすい説明をしてくれた。治療の難しさと進歩が見えたと思う。

（吉永）
医療のシンポジウムに関しては、食い足りないといった人が何人かいた。ただ、食い足りないという人はどんなレベルでもいるんです…。
そういう感想を聞きながら、やはり何かを求めてＡＩＤＳ文化フォーラムに来るんだなと感じた。しかし、逆に、感想文の中に、用語が分かりづらかったというものがあった。常に、初めて来る人を頭にいれておかないといけないと思った。この部分は絶えず工夫していく必要がある。

（岩室）
食い足りなかったとか、用語が分からなかったというのは、入場者のレベルの差だと思う。医療の可能性という表現を用いた時にＰＷＡとして来た人、当事者にとっては、自分の治療内容を説明されている程度にしか思えないというもの足りなさが必ず出てくる。それを素人に理解してもらうには、かなりやさしく話さなくてはいけない。その点で、シンポジウムの組み立てには苦労をした。
今後のフォーラム全体のターゲットをどこにおくかということで、あらためて皆さんの意見を聞きたい。私は常に両方においておくべきではないかと思う。ＰＷＡの人達に向けて医療のシンポジウムの中で一番言いたかったのは、性と性生活の問題であった。そういったところのサポートを十分に受けている人もいれば、全くサポートを受けていない人もいる。医療関係者でもそういった点に目を向けている人間がいるというメッセージを送ったつもりだ。もっと、こちらのスタンスを明確に出していかなくてはいけないという反省は持っている。

＝対象を明確にすること＝

（岡島）
今回は、誰に聞いて欲しいかを念頭に置き、シンポジウムのタイトル付けに実行委員会を１回費やした。今後も、絶えず、誰のためにやっているのかという事をキッチリ伝えるテクニックを磨いていく必要がある。この事は、何をするにも共通することだが今回少しはできたかなという気はした。

（吉永）
教育のシンポジウムは、教育関係者が集まり、十分に役割を果たしたと思うが、医療のシンポジウムはどうだったのでしょうか。タイトル付けの時「保健婦の研修の場にもなればいいね」って話がでていたけど実際に、その役割は果たせたのかな？

（岡島）
アンケートを分析してみると、一般の参加者は神奈川県内、教育関係者は首都圏内、そして医療関係者は全国から集まっていた。もちろん蓋を開けてみての結果であって最初からイメージして組み立てたものじゃないけど。

（長沢）
そういう意味でいうと、対象をどこに絞るかというのは、プロもアマもいる文化フォーラムではいつも実行委員も悩むところである。そういった意味では、はっきりとプログラムの対象をうたう事も必要かもしれない。

（岩室）
今年のエイズ学会は演題が２００を越えて、本当に最先端の情報を聞きたいという方は、ぜひ、そういった場に積極的に参加してほしい。やはりＰＷＡ自身とそれを支える家族や周りの方で、エイズ学会に参加しても専門的すぎるというような方が文化フォーラムのひとつのターゲットだと思う。

＝ボランティアって何だ＝

（長沢）
文化フォーラムのターゲットというのは、少しファジーでもいいんですね。
三つ目のシンポジウムはボランティアでしたね。

（吉永）
シンポジストの皆さんの話は、ぴったりとはまっていて良かったのですが、自分自身では、ちょっと反省している点もあります。結局はまとまりがないというのは、想像できたのですが…。
アンケートでも、入場者からの感想が短くあまり詳しく書かれていなかったので不安が残っている。本当のところが、良くつかみきれていない。

（岩室）
実行委員会主催のプログラムには、実行委員が少なくとも一人、講座に入って批判的に聞く必要がありますね。

（千代木）
反省点は、今回、実行委員を各教室で講座も聞けるように配置できなかった。

（矢部）
本部にいる実行委員と講座に入る実行委員を時間毎に決めることが必要ですね。

（長沢）
話は戻るけど、ＡＩＤＳにおけるボランティアというのは、始まったばかりで、まだまだこれからのテーマなので、今後も続けていかないといけない。

（吉永）
今回はシンポジウムだったので、段上に登らず、フロアと同じ高さにシンポジストがいたり、途中にリラクゼーションを入れる等の様々な工夫はしたのですが、本当の入場者の本音を引き出すまでにはいかなかった。
やっぱり入場者は「シンポジストのお話を聞きに来ました」とか、「いろいろと聞けて良かった」とか、本音が出ていないし、自分で考えていないのでは？　その本音を引き出すためには、ボランティアというテーマではシンポジウムとう形式がそぐわないのかもしれない。

（岩室）
テーブルディスカッション等の方がいいですか。

（吉永）
そういった感じで、言い合うか、本音が言える場が合っているかもしれない。

（長沢）
同じ高さのフロアーで椅子があって、すぐ後ろで入場者の声が聞こえるという感じかな。

＝社会的関心の低下について＝

（長沢）
そういったところも踏まえながら、ボランティアというテーマを来年も続けていきましょう。さて、ＡＩＤＳに関する社会的な関心が低くなっている事については、どうでしょう。

（岩室）
少なくともＡＩＤＳに関する報道は目に見えて少なくなっている。感染者が増加しているという記事も小さく出る状況です。関心は確実に低くなっている。週刊誌等での特集もない。新しいパンフレットもできてこない。全く関心のない人には、過去の病気だと思われている。

（岡島）
H.I.Voice・Act が、Bee hiveいちかわと一緒にイベントを行い、千葉県内の学校に、相当数のチラシを配ったが、あまり人は集まらなかった。反省点として、一言で言えば、学校の現場では「ＡＩＤＳってうつりにくい病気なんでしょう？」の認識しかなくなっている。かってに解決しちゃっているので、人は集まらないし、興味も少ない。以前の報道が多かった頃の特殊な病気でなくなったが、しかし感染者や患者は増えている。その辺を、もう少しうまく整理して、伝えていかなくてはならない。

（吉永）
学園祭に呼ばれても、強制的に学生に聞かせている場合以外は人が集まらない。

（岩室）
全国的にそうです。動員をかけているところ以外は、人が集まらない。

（長沢）
無関心なんでしょうかね。自分とは、関係ないと思っているのでしょうか。

（千代木）
世界エイズデーの街頭キャンペーンのメッセージ等でも「がんばってね」とかいったメッセージが多くて、所詮ＡＩＤＳは他人事という印象だった。

（長沢）
社会の関心は、低下している一方で、患者・感染者は増えているというギャップを誰がどう伝えるのか。行政レベル、民間レベルでそれぞれが働きかけているが、一致して社会に波を起こす事ができないのは、なぜなのだろうか。

（矢部）
こうしたら感染しないといったレベルの言葉だけは、知っているが、自分の問題として考える事ができない人が多いのではないか。ならば、ＡＩＤＳ文化フォーラムも「社会の関心が低くなるなかで」とか「自分の問題として考える」といった視点をはっきりと出す必要があるのではないか。

＝なぜ他人事になるのか？＝

（岩室）
なぜＡＩＤＳに関心が向かないのか？　なぜ他人事としてしか問題を考えられないのか？　というところに訴えかけなければならない。話は、少し離れますが、最近は献血での感染告知を明確に打ち出してきているが、そのおかしさに気付こうとしない。検査目的での献血はお断りしますと言っているにも関わらず、検査結果を告知する矛盾に誰も文句を言わない。そんなことをすれば、当然、検査目的の献血で感染が増えてしまうのに。

（吉永）
献血に関しては、海外に行った人、男性同性愛者はといった貼り紙を見ながら、献血をすることによって、ハイリスクグループのイメージが刷り込まれていく。そして、それに当てはまらないから自分には関係のない問題だと思ってしまう。

（岩室）
今でもＡＩＤＳ学会に発表するアンケートの項目に「不特定多数とのＳＥＸ」というのがある。しかし、不特定多数とのＳＥＸであっても、コンドームを使えば、感染しないし、特定でも相手が感染していれば感染する可能性がある。その項目設定の矛盾を質問しても『過去のアンケート調査と比較するため』と言われてしまう。日本人は「何でも他人事にして、深く考えない」という特徴があるのかなあ？

（矢部）
日本の一つの特徴だと思います。日本では「物ごとを自分の問題として考える」という視点での教育はされていない。

（長沢）
日本文化の中に、人の尊厳や人権といった意識が薄いので平気で告知をしたり、また、その責任をおわなかったりしていると思う。医療も含めて社会全体の中にもっと人間一人の存在が重いと考えられない限り、自分の問題として考える事はできないのではないか。

（吉永）
来年に向けて、臨床をしている先生等に再教育をするといったことを入れてもいいのではないか。

（岩室）
人間の尊厳を問い直すのは、良いことです。

（長沢）
人間のヒーリングのようなもので、医学・科学的な治療には興味があるだけでなく、心のある人間として接して治療していくことを大切にしなくてはいけないと思う。

（岩室）
社会の関心の低下には、フォーラムがもっと目を向けて、問い直せないでしょうか。

＝映画秋桜について＝

（長沢）
話しは変わりますが、映画秋桜は賛否両論ありながらも、入場者は多かった。

（千代木）
秋桜のことが、新聞等に紹介されるとその日は電話がなり続ける位反響があった。映画が無料ということだけで電話をしてくる人もいましたが…。
とにかく凄い反響でした。

（吉永）人寄せという意味は果たしたと？

（岡島）
映画や演劇は人が入りやすいのは事実だと思う。一歩足を進めるための役割はある。来年もぜひ、映画があれば上映したい。何か難しい話しをされるのではないかとか、ＡＩＤＳは自分には関係ないと思っている人にとっては、第１回～第３回のフォーラムは足が向かなかったのだと思う。映画があることによってそういう人をつなぎ止めることができた。映画で賛否両論あったけれど、ＡＩＤＳに関しての差別的なところも取り払われて、もう少しＡＩＤＳに関して勉強しようかという意見を書いている人もいた。フォーラムでは、シンポジウムが物足りないという意見の人にも、秋桜で初めてＡＩＤＳについて考え始めた人にも、入口を開けておかなくてはいけない。

（長沢）
実行委員会では、秋桜だけで、ＡＩＤＳを伝えようとしているのではなく、こういう「映画」という切り口で一緒に考えてみませんか？　というような問題提起を共通理解とした。確かにいろいろな方から賛否両論の意見があったし、すずき監督の話を聞き、会場との意見交換の時間も設けることできた。大切な事は最初のきっかけを作るという意味で映画を取り上げたということでしょうか。

（岩室）
この秋桜がなかったら、社会の関心の低い中で、このフォーラムの入場者は少なかっただろうと思います。秋桜には社会の関心の低下を少し回復する力があったと思います。また、この映画の主人公が全てのＡＩＤＳ患者ではないし、全ての人がああいったカミングアウトをするわけでないのですが、そういう一つ一つのことを批判していくと、多様性を認めないということが起こってくるのではないか不安です。もちろん、批判している人には、ＡＩＤＳに対する思いがあるからだと思うのですが、私は多様性をＡＩＤＳを、そしてこのフォーラムを通して学んでいる気がします。

（吉永）
私の場合は、秋桜がＡＩＤＳ文化フォーラムのプログラムの一つだからＯＫなんです。この映画だけで捉えられたら困るというのが本音です。文化フォーラムの中でなら、フォローもできますし…。

＝多様性について＝

（長沢）
多様性は認めていかなくてはいけないものであると思います。また、自分の意見を自分で持つという事は大切ですが、それを人に押しつける必要はないと思います。多様性を認め合える社会にしていく事は我々の使命であると思います。

（岩室）
多様性を認め合い、意見交換をできたらと思います。

（岡島）
多様性を認め合うということは、逆に自分の意見を持つということにつながる。多様性を認められることが自己決定につながるのだと思う。

（多田）
今まで、皆さんの話を聞いて、秋桜は入場者数も多く、初めての人には、ＡＩＤＳ文化フォーラムの中の喫茶店みたいなものだったのではないかと思いました。
お茶を飲むように気軽に入ったけれど、しかし、この秋桜を最後まで観てもらって自分なりの感想を持ってくれたり、すずきじゅんいち監督の話を聞いたり、他の観客の感想を聞いたり、段々と考える世界が広がってくるのだなと感じました。
とても大事な余白というか、遊びの部分があってフォーラム全体の「面白さ」とか、「入りやすさ」が自然に滲んでくるのだろうなと思った。そういう演出は必要でしょう。

＝文化とＡＩＤＳについて＝

（長沢）
第１回～第３回までの反省としては、写真展等はあったのですが、もっと映像や音楽をフォーラムに取り入れる必要があったと思います。その点でこれからのフォーラムで膨らませていくことが大切ですね。

（岩室）
例えばＡＡＡにボランティアで何かしてくれないかとお願いするというのもひとつの手でしょうね。

（長沢）
文化フォーラムの”文化”は、音楽や演劇等のいわゆる文化だと思いますが、まだ日本ではそういった活動がなかなかでてこないというのが、課題でしょうね。世界でもそういう傾向なんでしょうか。

（岡島）
日本の場合は「表現することは、社会に関わることだ！」ということになかなか結びつかない。

（岩室）
月刊通信誌のH.I.Voice とか、それを朗読するVoice•Act は文化ですよ。頑張ってますよ。

（岡島）
自分たちはそこまでいってませんが、それなりのアーチストの一流の人たちは、きっちりメッセージを届けることができるんです。そういう人たちの力をもっと集めていきたいですね。社会問題を文化で表現するスタイルを模索するのも、このフォーラムの可能性だし、面白みかもしれませんね。

（吉永）
今年はそごう美術館で行われたロバート・メイプルソープの写真展とは案内のパンフレットをお互いの会場に置くという交流をしましたが、今後も他の会場とのいい交流をしていきたいですね。

（千代木）
今後も、いままでＡＩＤＳや、このフォーラムと関連の少なかった所との連携を考えていきたいですね。ＡＩＤＳへの社会的関心が低くなっているからこそ、幅を広げていきたいですね。

（長沢）
今年は新しい協力ということでは、リーバイスが参加してくれました。

（岡島）
リーバイスはコミュニティプログラムとして、ＡＩＤＳに関わる活動を助成している。ＡＩＤＳ対策を大きな柱としてる企業の存在をＮＧＯに知ってほしいし、そういった企業に、さまざまなＮＧＯの存在をもっと知ってほしい。口コミレベルでしか伝わらなかったその種の情報を、文化フォーラムがキッチリ発信する場になれれば…。

＝まとめ＝

（長沢）
そういった意味では、文化フォーラムがもっと利用されるといいですね。それでは、最後に一人一人まとめの意見をどうぞ。まず私は「継続は力なり」

（多田）
今回初めてフォーラムの実行委員になり、協働というのを実感できたのが収穫でした。この実行委員会に参加して初めて、このフォーラムの多彩な面とか、自由な雰囲気だとかが判ってきた。まず一歩が大事。今後も、初めての人に「あっ喫茶店に入ってみようかな」と思わせる何かが必要だと思います。私は、そういう部分を考えることをしていきたい。

（矢部）
社会の関心の低下という点が気になっています。来年はその関心の低下の中でがんばっているフォーラムの姿を見せたい。一人ひとりがＡＩＤＳを自分の問題として考えられる手法を伝えたいです。
また、来年はテーマを決める時に、もっと伝えたいことと、できることを明確にして、テーマを決めたいと思います。

（吉永）
文化フォーラムの面白さは、いろいろな事ができる実験場であると思っているので、来年はどういう仕掛けをしようかともう考えています。小林幸子の紅白の衣装プランのような状態です。（笑い）
また、多様性と意味では、それを認めてもらえる事がいいと思っています。そういった意味では、本当に生まれたばかりの小さいグループがここに出てこれることこそ、文化フォーラムの真髄があると思います。

（岩室）
私にとっては、フォーラムは続けたいもの、続けなければいけないものになっています。どう続けて発展させるかということの課題は、一つ一つのプログラムはいいんだけれど、それが十分連帯できていないという事、多様性を認め合いましょうと言いながら、他の人たちとその思いを十分共有できていないので、その点を工夫したい。できたら、来年は、今年の２・３倍の人を集めたいと思います。

（岡島）
今後も、評価して反省するという積み重ねが必要だと思います。課題は、多くの団体が自分の団体の発表にだけ一緒懸命だったように感じました。他の団体と連携が生まれるだけの余裕を作るべきです。

（千代木）
今回は、ボランティアとして１００名以上の方が参加してくれた。そのボランティアからの感想や意見をキッチリ見つめていきたい。今年のボランティアや一般参加者が来年は発表者となれば…。
広報・宣伝についてもいろいろと考えながら、とにかく頑張りましょう。

＝座談会に参加できなかった実行委員からも一言＝

（細井）
「ＡＩＤＳ」というキーワードは、人間のことを真剣に考える切り口の一つだと思います。そういうキーワードに人が集まると、キマジメでないと許されないという雰囲気になりがちです。文化フォーラムのすばらしさは、握りこぶしをふるわなくても参加していいというスタンスにあると思います。これは大事にしていきたい。
最終的な夢は、キーワードなんてなくても人が集まれて、理解しあえる人間社会。じゃないでしょうか。

（高村）
今回は、個人、団体、実行委員という形で、３つのプログラムを準備しました。それぞれの立場で貴重な体験ができました。
次回は、自ら発信するものを減らし、他のグループとの共演（？）といった実験や、参加者として各プログラムへ積極的に参加したいと思っています。こんなに良いプログラムが数多く提供されたのに、聞けないコマがたくさんあり残念でした。つまり、そう思えるくらい質は高くなっていると思います。

（広瀬）
実行委員の方々の熱意により、成功裏に終わった事に、感謝してます。組織全体で事務局を支えてくれた横浜ＹＭＣＡの御労苦にも感謝したい。
私としては一般の方々にもっとＡＩＤＳ／ＨＩＶのことを知ってもらえるようにしたかった。
次回は、事務局も、実行委員も、参加団体もそれぞれの組織の中で、ＡＩＤＳ文化フォーラムの比重を高めてもらえれば、全国へ向けたメッセージをさらに大きく発信できるものと確信しています。
今後もそれぞれの立場でＡＩＤＳ文化フォーラムを支えてください。

この座談会の記録は、1997年12月 4日（木）の午後 6時30分より、かながわ県民活動サポートセンターで開催された実行委員会（反省会）の概要をまとめたものです。

＊実行委員会で1998年 3月に長沢勲写真展を開催

「1997 ＡＩＤＳ文化フォーラムｉｎ横浜」広報実績

（新聞報道）　　掲載頁

①	読売新聞	5月17日（土）	・エイズフォーラム　今年も８月に	240字	
②	神奈川新聞	5月25日（日）	・ハマで深める３日間　多彩な催し	720字／写真	… 110
③	神奈川新聞	8月 2日（月）	・AIDS文化フォーラムin横浜	130字	
④	毎日新聞	8月 4日（月）	・AIDS文化ﾌｫｰﾗﾑ in横浜　運営ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ募集	210字	
⑤	読売新聞	8月 5日（火）	・エイズフォーラム　横浜で８日から	380字	
⑥	神奈川新聞	8月 5日（火）	・「県民の窓」８～１０日横浜で開催	200字	
⑦	産経新聞	8月 5日（火）	・８日から文化フォーラム	280字	
⑧	毎日新聞	8月 6日（水）	・ＡＩＤＳテーマにシンポジウム開催	520字	… 111
⑨	朝日新聞	8月 7日（木）	・催し数は過去最高　啓発授業の公開も	600字	… 111
⑩	読売新聞	8月 8日（金）	・きょうから横浜で　教育、啓蒙に重点	780字	… 111
⑪	神奈川新聞	8月 9日（土）	・幅広い視点で考えよう　あすまで	760字／写真	… 112
⑫	神奈川新聞	8月10日（日）	・偏見ない社会へ　エイズ教育	740字／写真	… 113
⑬	毎日新聞	8月10日（日）	・中・高校教師４人が　授業を初公開	600字／写真	… 114

（情報誌等）

①横浜南リビング	7月12日（土）	・身近なこととして考えてほしい	2,400字／写真	… 115
②横浜東リビング	〃	全国各地のﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ団体も参加	〃	
③横浜南リビング	7月19日（土）	・編集長ｲﾝﾀﾋﾞｭｰ事務局長　長沢勲さん	880字／写真	… 116
④横浜東リビング	〃	未来への希望をつなぐ集いに！	〃	
⑤横浜青年７月号	7月 1日（火）	・領域拡大し８月にAIDS文化ﾌｫｰﾗﾑ	1,400字／写真	
⑥トランタン新聞	7月 1日（火）	・AIDS文化ﾌｫｰﾗﾑ in横浜　未来へのつどい	450字	
⑦おーぷん７月号	7月 1日（火）	・夏のイベント情報 AIDS 文化ﾌｫｰﾗﾑ in横浜	200字	
⑧週間医学界新聞	7月14日（月）	・1997 AIDS 文化ﾌｫｰﾗﾑ in横浜参加者募集中	450字	
⑨らびっと通信	7月20日（日）	・AIDS文化ﾌｫｰﾗﾑ in横浜　未来へのつどい	200 字	
⑩JUNCTION Vol.6	7月20日（日）	・巻頭文・ｲﾍﾞﾝﾄｸﾘｯﾌﾟ・鑑賞のおと	1,100字／写真	
⑪全県新聞折込み	7月28日（月）	・(7紙計280万部・ｶﾗｰ)夏のエイズイベント	250字／写真	… 114
⑫横浜青年８月号	8月 1日（金）	・全国規模60講座で８日から	3,000字／写真	
⑬情報誌ぱど	8月 7日（木）	・1997 AIDS 文化ﾌｫｰﾗﾑ in横浜未来への集い	120字	
⑭教養月報９月号	9月 1日（月）	・ＡＩＤＳ文化フォーラムの夏	500字	
⑮横浜青年９月号	9月 1日（月）	・教育などをテーマに4,600 人参加	2,200字／写真	… 117
⑯ﾚｯﾄﾞﾘﾎﾞﾝｻｰｸﾙ９月	9月 1日（月）	・97 AIDS 文化ﾌｫｰﾗﾑ in横浜	550字	
⑰JUNCTION Vol.7	9月20日（日）	・97 AIDS 文化ﾌｫｰﾗﾑ in横浜	特集3ﾍﾟｰｼﾞ／写真	… 118 … 119

（ＴＶ報道）

①日本大通り情報	7月15日（火）	・エイズについて　AIDS文化ﾌｫｰﾗﾑ	TVK 11：30～45
②首都圏情報	8月 8日（金）	・横浜でＡＩＤＳ文化フォーラム	NHK 6：45～
③たてながHAMA大国	8月11日（月）	・ＡＩＤＳ文化フォーラムの中で	TVK 12:10 ～25

（ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ等）

①ｻﾎﾟｰﾄｾﾝﾀｰ支援ﾍﾟｰｼﾞ7月～ 8月　・イベント告知 http://www.yic.or.jp/~wally/KVSC/

神奈川新聞　5月25日（日）

エイズへの理解

ハマで深める3日間

文化フォーラム　今年は8月8日から

シンポや模擬授業　多彩な催し

エイズへの理解と感染者の支援を目的とし、今年で四回目となる「AIDS文化フォーラム・イン横浜」が八月八日～十日の三日間、かながわ県民活動サポートセンター（神奈川区鶴屋町）を会場に開催されることが決まり、このほど実施概要が発表された。

県内の民間団体からなる同フォーラム組織委員会（委員長・吉村恭二横浜YMCA総主事）の主催。初回は一九九四年夏に横浜で開かれた国際エイズ会議と並行して開かれた。その後も毎年継続して行われ、今回は県との共催で行われる。

今年は前回の倍となる約六十団体が全国から集まり、プログラムも多彩。医療、エイズ教育、エイズボランティアなど日替わりのテーマによるシンポジウムや、中学高校を想定したエイズ教育の模擬授業、エイズ予防と感染者支援にかかわる企業関係者の報告、これまでエイズに関する知識がなかった人を対象にした意識啓発レクチャーなどが繰り広げられる。このほかエイズ関連の映画上映や、展示コーナーも。

「エイズにかかわる団体や個人が一堂に会する、全国で唯一のフォーラムです。今まではエイズに関する専門家の集会といった感がありましたが、今年は十代の学生から参加できるようなプログラムをたくさん用意します。みなさん気軽に参加してください」と、同フォーラムの実行委員会は呼び掛けている。

参加費は無料。問い合わせは、横浜YMCA内の同フォーラム事務局☎045（662）3721。

今年で4回目を迎える「AIDS文化フォーラム・イン横浜」＝昨年の同フォーラムから

毎日新聞8月6日（水）

AIDSテーマにシンポジウム開催

横浜・8日からフォーラム

毎日 8/6

エイズについて考える「第4回AIDS文化フォーラム in 横浜」（同組織委員会・県共催）が8日から10日まで、横浜市西区鶴屋町のかながわ県民活動センターで開かれる。1994年に横浜市で第10回エイズ国際会議が開かれたのをきっかけに「市民の手で開かれた会議を」と、フォーラムが開かれてきた。

HIV感染者をテーマに今年公開された映画「秋桜（コスモス）」の上映や、さまざまなテーマのシンポジウムが開かれる。

主なシンポジウムは「HIV医療の可能性を探る」（8日）、「AIDS・教育現場からの挑戦」（9日）、「ボランティアって何だ！」（10日）。

主な講座はエイズ感染者のメッセージを声を出して朗読し、共感を深める「H・I・Voice Act」（8日）や、前向きに生活するHIV感染者の話を聞く「ますますPositive」（8日）、「オーストラリアのエイズ医療体制」（10日）、市民グループが支援した外国人女性らについて話す「みずらから見た外国人女性への人権侵害」（9日）、「AIDS教育公開授業・高校編」（9日）など。

いずれも入場無料。問い合わせは同フォーラム事務局045・662・3721。

読売新聞8月8日（金）

エイズ文化フォーラム

きょうから横浜で　教育、啓もうに重点

エイズについて市民や民間団体が幅広い視点から考えるための「エイズ文化フォーラム・イン横浜」（同組織委員会・県の共催）がきょう八日から十日までの三日間、横浜駅西口のかながわ県民センターで開かれる。

一九九四年に横浜で開催された第十回エイズ国際会議をきっかけに、「市民の会議を市民の手で」との趣旨で、さまざまな民間団体を中心に組織委員会をつくり、毎年行われている。今年で四回目。

文化、社会、人権など十九のカテゴリーで各参加団体による六十の講座のほか、今年は初めて三つのシンポジウムも予定しており、これまでで最大規模となる。講師は全国各地から参加し、運営もすべて十代から二十歳代の若い人たちを中心とした約百五十人のボランティアで当たる。

組織委員会によると、今年は特に教育と啓もうに重点を置く内容となっている。新たに加わったシンポジウム「HIV（エイズウイルス）医療の可能性を探る」（八日午後三時半）、「AIDS・教育現場からの挑戦」（九日午後三時半）などには、実際にエイズの治療にあたっている医師や看護師、HIV感染者、現場の教師も参加して、最新事情の報告と討議が行われる。

開会に先立って八日午前十時から、今年公開されて話題となったHIV感染者をテーマにした映画「秋桜（コスモス）」の上映が行われるほか、展示ホールでは「AIDSを生きる」と題した写真家土橋正さんの写真展なども開いている。組織委員会は、昨年の約三千人を超える入場者を見込んでいる。

フォーラムの行事はいずれも入場無料。詳細は同フォーラム事務局（横浜YMCAワールドコミュニケーションセンター、☎045・662・3721）まで。

朝日新聞8月7日（木）

横浜で「AIDS文化フォーラム」

催し数は過去最高　啓発授業の公開も

8/7 朝日

ボランティアや市民団体が中心となり、シンポジウムや映画、講演でエイズについて幅広い視点から考えようという「1997 AIDS文化フォーラム in 横浜」（組織委員会・県共催）が八日から十日まであすから10日まで、JR横浜駅西口のかながわ県民センターで開かれる。今年で四回目だが、期間中の催しの数は六十と過去最高。中学・高校で実際に行われているエイズを正しく理解するための啓発授業が「公開授業」として初めて登場する。

シンポジウムは三回。それぞれ「HIV医療の可能性を探る」「AIDS・教育現場からの挑戦」「ボランティアって何だ！」がテーマ。映画は、エイズウイルス（HIV）に感染した女子高校生の生きざまを通し、命の尊さを描いた「秋桜（コスモス）」を八日午前十時、午後六時からと九、十日は午前十時から上映する。

現職の中学・高校教師が実際に行っているエイズ教育の公開授業は「おそらく全国で初めての試み」（高校編を担当する安藤博敏・県立弥栄東高教諭）という。保健体育と理科の二教科を、三人の高校教師が受け持つ形になる。エイズについての知識を得るだけではなく、実際に疾病予防に生かす形で幅広く知ってもらうのが狙いだ。

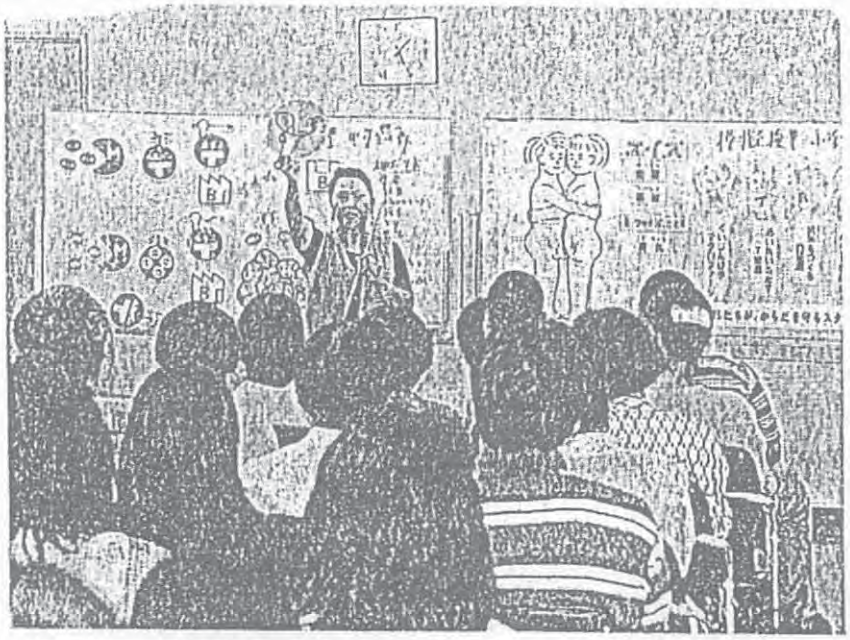
このフォーラムは、約百五十人のボランティアで運営され、入場無料。

問い合わせは事務局（045・662・3721）

神奈川新聞8月9日（土）

幅広い視点で考えよう

横浜でAIDS文化フォーラム　あすまで60講座



エイズを広範な視点でとらえようというフォーラム会場

エイズを幅広い視点から考える「第四回AIDS文化フォーラムin横浜」（同組織委員会と県の共催、横浜、川崎、横須賀市の後援）が八日、横浜駅西口近くのかながわ県民活動サポートセンターで始まった。十日まで、医療やボランティア、教育などをテーマにしたシンポジウムや啓発活動を中心とした講座が繰り広げられる。

初日は中高大学生ら若者が大勢来場し、講師の話に熱心に聞き入っていた。入場無料。

同フォーラムの基本コンセプトは「市民に開かれた会議を市民の手で」。

一九九四年に横浜で開かれた第十回エイズ国際会議をきっかけに、民間団体を中心とした組織委員会（委員長・吉村恭二横浜YMCA総主事）が発足。同年、第一回フォーラムを開催した。ことしは「未来への集い」をテーマに、教育と啓発活動などに関する過去最多の六十講座が開かれる。

鹿児島県や北海道などから自費で参加したNPO（非営利組織）や団体関係者が講師を受け持ち、また約百五十人のボランティアも運営に携わっている。主な講座は、映画「秋桜（コスモス）」の上映（午前十時～、二階ホール）、医療、ボランティア、教育をテーマにした「いのちの輝き」「はじめての性教育」「克服！感染経路差別」など。

吉村組織委員長は「市民の力で、開かれた勉強会をとフォーラムを始めた。性とのかかわりの中で人権、命、差別についても理解を深めたい。学校教育現場での問題としても考えてもらえるよう、学校の先生方にも参加してほしい」と話している。

問い合わせは同フォーラム事務局☎045（662）3721。

神奈川新聞8月10日（日）

開催中の「'97ＡＩＤＳ文化フォーラムｉｎ横浜」の一環として、高校教師が日ごろ実践しているエイズ教育の公開授業が9日、会場となっている横浜駅西口のかながわ県民センターで行われ、学生ら多くの人が参加した。公開授業を行ったのは、県立弥栄東高校の安藤博敏さん、県立有馬高校の五十嵐多賀子さん、県立柏陽高校の鉄俊之さんの3教諭。安藤さんと五十嵐さんは保健体育、鉄さんは理科をそれぞれ担当している。

エイズ教育 予防への"最良ワクチン"

偏見ない社会へ

横浜 高校教師ら公開授業

はじめに、安藤さんが「感染予防や差別・偏見のない社会の実現には、教育が最良のワクチンといわれている。学校現場から一歩外に出て、エイズ教育の重要性を一般の方にも理解してほしい」などとあいさつした。

五十嵐さんは、社会と理科の担当教師と共同でエイズ教育に取り組んでいる「チームティーチング」の事例を報告。「従来の発想を変え、生徒たちにエイズについて知りたいことをアンケートで聞き、その後の授業内容を決めるようにした。エイズ教育のために、細分化した現行の授業をどうまとめていくかに気を使った。生徒たちの感想は「よかった」など、その成果を語った。

また、安藤さんは、感染の仕組みや予防策など基本的な知識を説明した後、「性行為の話をいきなり出すと生徒たちは混乱するので配慮がいる。最後に強調することは『自分を大切に愛すること』。これが相手を大切に思うことにもつながる」などと話した。

鉄さんは「免疫と生命倫理」と題して、ウイルスや抗体などに関する生物学的なエイズ教育の例を紹介した。

現場教師が日ごろのエイズ教育を報告した＝かながわ県民センター

毎日新聞8月10日（日）

中・高校教師4人がエイズ授業を初公開

文化フォーラムｉｎ横浜

エイズについて考える「第4回ＡＩＤＳ文化フォーラムｉｎ横浜」（同組織委員会・県共催）が横浜市神奈川区鶴屋町のかながわ県民センターで開かれている。今年の企画の柱の一つは教育で、9日、今回初めて中・高校の現役教師による公開授業が行われた。

1994年に横浜で開かれた第10回エイズ国際会議を契機に毎年開催。今年は約50団体・個人が参加し、医療やボランティアなどをテーマに昨年の倍の60講座が繰り広げられている。注目の公開授業には教師4人が、約120人の参加者を前に実際に教室で行っている保健体育や理科の授業を再現した。

高校編に登場した柏陽高（横浜市栄区）の鐙俊之教諭(39)は、5年前から生物の授業でエイズを教材に取り入れた。ウイルスを題材にして、細胞の構造や遺伝、血液の役割などを教えているという。鐙教諭は「ＨＩＶ（エイズウイルス）を扱うことで、生命倫理や人の生きざまなど色々な方面に考えを広げられる。でも大学入試の制約があり、苦労しています」と話していた。

フォーラムは10日まで。10日は午前10時から、ＨＩＶ感染者をテーマにした映画「秋桜（コスモス）」の上映や、「感染者のネットワークを考える」「米国のボランティアの現状」「同性間性行為とエイズ」など15の講座、シンポジウムが開かれる。問い合わせは同事務局045・662・3721。

エイズ教育の授業をする高校教諭

全県新聞折込み7月28日（月）

1のエイズイベント

未来への集い

「1997 AIDS文化フォーラム in 横浜」

AIDSへのさまざまな取り組みの中で共に生き、連帯して未来への希望をつなぐ集いです。

日　時／平成9年8月8日(金)～10日(日)
　　10:00～20:00
場　所／かながわ県民活動サポートセンター
　　横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2
　　横浜駅西口より徒歩4分
入場料／無料
主な内容／教育・文化・命をテーマに、映画「秋桜」の上映やシンポジウム「HIV医療の可能性を探る」「教育現場からの挑戦」などのほか、NGOによるさまざまな催しが行われます。
お問い合わせ先／エイズ文化フォーラム事務局
　　横浜YMCA内　☎045-662-3721

※なお、当日の会場ボランティアを募集しています。上記電話番号へお申し込みください。

主催　「1997 AIDS文化フォーラム in 横浜」組織委員会

サンケイリビング7月12日（土）

身近なこととして、考えてほしいエイズ

1997　AIDS文化フォーラム in横浜

今年で4回目を迎える、「AIDS文化フォーラムin横浜」が開催される季節になりました。

私たちが生活していく上で、真剣に考えなくてはならない病気、エイズ。他人事のようにとらえている人も多いはず。しかし、エイズは特定の人の病気ではなく、どんな人も、ウィルスに感染する可能性はあるのです。未来の自分のため、家族のために、まずは、関心を持つことが大切です。

エイズに対する様々な取り組みの中、興味を持つジャンルから少しずつでも参加していきたいものです。

全国各地のボランティア団体も参加

エイズについて、みんなで考える

1994年8月に、横浜で開かれた国際エイズ会議をきっかけとして、「AIDS文化フォーラムin横浜」は始まりました。今年は、8月8日（金）～10日（日）、かながわ県民センターで開催されます。

4回目を迎え、ますますプログラムも充実。市民ボランティアの手で運営され、全国各地から多くの団体が参加します。

実際、ボランティアといっても、いろいろな関わり方がありますね。上の写真は昨年もこのフォーラムに参加した主婦グループ、「ABCキルトの会」のもの。東南アジアに増える、エイズ感染の子供たちのために、15㌢四方の布をつなぎ合わせ、肌かけを作って現地に送っています。

このほか、フォーラムでは、様々な地域、職域から、エイズを考え、積極的に活動する人たちが参加。講演やシンポジウムなども開かれます。プログラムによっては、対象者を限定するものもあるため、会場でもらえるプログラム表を参照してください。

★「秋桜」上映・入場無料

南米で事故に遭い、輸血によってエイズ感染した少女の物語、「秋桜（コスモス）」の上映があります。

「この映画は、精いっぱい、今を生きる人たちへの讃歌であり、応援歌です」と語る、監督のすずきじゅんいちさんも、フォーラム初日の8月8日（金）、午前の部に来場予定。入場無料。スケジュールは表参照。

問い合わせは、横浜YMCA ☎045（662）3721

開催期間＝8月8日（金）～10日（日）、午前10時～午後8時、入場無料

会場＝かながわ県民センター（横浜駅西口から徒歩4分／横浜市神奈川区鶴屋町2ノ24ノ2）

事務局＝横浜YMCA ☎045（662）3721

「秋桜（コスモス）」上映スケジュール
場所：かながわ県民センター
B会場2階ホール　入場無料

8月 8日（金）	10：00～12：00
	18：00～20：00
8月 9日（土）	10：00～12：00
8月10日（日）	10：00～12：00

かながわエイズボランティア募集

AIDS文化フォーラムの運営は、市民のボランティアの手によるもの。

そこで、この夏も、「かながわエイズボランティア育成講座」に参加したい人を募集します。

このボランティアの目的は、エイズのついての基礎知識を習得し、活動を通して、ネットワークを広げていくことです。

対象は、エイズに関心のある、ボランティアに初めて参加する人。表にある日程（全7回）に出席してください。フォーラム中、ボランティア活動を体験。参加費無料。

申し込み・問い合わせは、横浜YMCA内かながわエイズボランティア育成講座事務局 ☎045（662）3721

	日時	テーマ・内容
第1回	7/12(土) 14:00~17:00	ボランティアを始めるにあたって
第2回	7/19(土) 14:00~17:00	エイズ・いま，何をどう伝えるか
第3回	7/27(日) 13:00~16:00	AIDSの基礎知識 患者・感染者としての生活
第4回	8/2(土) 14:00~17:00	啓発活動と仲間同士のカウンセリング
第5～6回	8/8(金) ～10(日)	「1997 AIDS文化フォーラム」でのボランティア体験
第7回	8/10(日) 10:00~12:00	今後の活動を目指して

サンケイリビング7月19日（土）

編集長インタビュー

未来への希望をつなぐ集いに！

1997ＡＩＤＳ文化フォーラムin横浜
事務局長　長沢勲さん

8月8日～10日にかながわ県民センターで「1997ＡＩＤＳ文化フォーラムin横浜」が開催される。民間主導、ボランティアに支えられたこの催しも、今年で4回目。

「'94年に大々的に開かれた第10回国際エイズ会議は、学者や専門家が対象で、参加費も高価。これに対し、一般の人向けに難しくなく、タダで、エイズについての正しい理解を、と民間主導で始まったのが文化フォーラム。"文化"が付くのは、医学的なことばかりではなく、音楽や美術、演劇など、人間として生きるのに必要なことを取り上げたいと…」と事務局長の長沢勲さん。

民間だからこそ、行政では「なじまない」と、取り上げられにくい同性愛者やセックスのことにも肉薄できた。「行政は側面からの支援。マスコミも2年目、3年目になると注目しなくなった。でもそれが良かったのだとも思う。今年は52コマの発表、映画上映が4回、シンポジウムが3回…と、昨年の倍近いプログラムを実施。それぞれが、プロの医者から主婦グループ、個人まで、すべてボランティアによるもの。北海道から九州まで全国から手弁当でやってくるんですよ。こんなパワーが日本にもあるんだ、日本のボランティア……

プロフィル　横浜ＹＭＣＡワールドコミュニケーションセンター室長。東京都出身、横浜市中区在住。趣味は写真と絵はがき作りなど

も捨てたもんじゃないと思う」。地道に、でも着実に波は高まってきている。

―エイズと関わるようになったきっかけは？

「'94年2月に写真家のビリー・ハワードがエイズの患者を撮った写真展を観たんです。写真も素晴らしかったが、添えられたそれぞれの患者さんの言葉に強烈に感動して。厳しい偏見や差別に囲まれた人たちの言葉、それが、エイズとの出会いでした。今の日本でも、まだ病名を隠さなければならない現実がある。今回のテーマは"未来への集い"。偏見や差別をなくし、共に生きていくことを目指し、未来への希望をつなぐ集いにしたいですね」

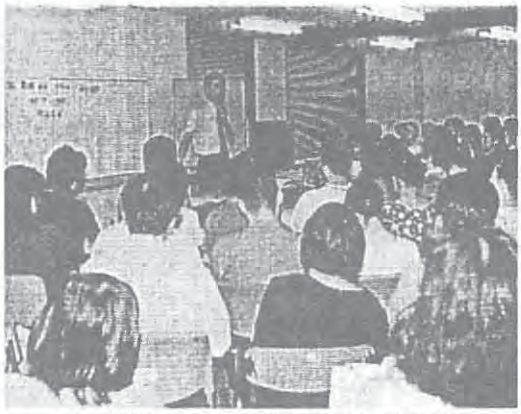
自分にできることから始めたい。問い合わせは事務局☎045(662)3721へ。（渭川恵理子）

横浜青年9月号9月1日（月）

横浜青年　1997年9月1日

第4回ＡＩＤＳ文化フォーラム

教育などをテーマに4,600人が参加



▲高級教師による公開授業には120人が参加した

エイズについて市民が幅広い視点から考えていこうと「第四回ＡＩＤＳ文化フォーラムｉｎ横浜」が、八月八日から十日まで横浜駅西口のかながわ県民活動サポートセンターで開催されこれまでで最高の四千六百人の市民が参加、エイズの予防や感染者との共生、青少年への教育などについて学びを深めた。

このフォーラムは、一九九四年に横浜で第十回エイズ国際会議が開かれたのをきっかけに、「市民に開かれた会議を市民の手で」を基本コンセプトに、横浜ＹＭＣＡ、ＹＷＣＡ、横浜商工会議所、青年会議所などの民間団体、組織を中心に組織委員会（委員長・吉村恭二横浜ＹＭＣＡ総主事）が作られ、第一回フォーラムが開催された。その後参加者から「継続して開催を」との要望が寄せられたこともあり、毎年八月に開催され、市民の関心は着実に広がってきている。

エイズについて市民や民間団体が考える全国でも例のない機会として、各地の関係者からの関心も高く、実行委員会（広瀬誠委員長）には、北海道から沖縄まで全国からこれまでを上回る約五十の団体やグループ、また研究者などからエントリーが寄せられた。この中から今年は教育と啓発活動を中心に、同センターの一階から三階までの七会場を使って、六十を超す講座が連日開催された。

このうち九日には中学、高校の教師によるＡＩＤＳ公開授業が行われ、三人の現役高校教師が教室を飛び出して保健体育と理科の授業を再現した。県立有馬高校で保健体育を担当している五十嵐多賀子さんは、社会と理科の担当教師と協力して実施しているティームティーチングの事例について報告した。また県立弥栄東高校の安藤晴敏さんは、感染の仕組みや予防策について説明し、「生徒たちに一番伝えたいことは、自分を大切にすることです。これは相手を大切に思うことにもつながります」と語った。百二十人の参加者の中には、教師も多く見られたがその中の一人は「どこまでどう教えればいいのか悩んでいたが、切り口がわかってよかった」と感想を述べている。

このほか今年のフォーラムでは、新たに「ＨＩＶ医療の可能性を探る」、「ＡＩＤＳ教育現場からの挑戦」、「ボランティアって何だ」のテーマでシンポジウムが連日開催された。このシンポジウムでは、さまざまな活動を展開しているボランティアや専門家などを交え、それぞれのテーマに基づいて現状から課題を探った。また期間中、今年公開されて話題となったＨＩＶ感染者をテーマとした映画「秋桜（コスモス）」の特別上映が行われたほか、展示ホールでは「ＡＩＤＳを生きる」と題した写真家土橋正之氏の写真展、ＮＧＯ活動発表パネル展なども行われ、幅広い視点からエイズについて学ぶ機会となった。

なお、フォーラムの開催にあたっては、全国からの講師をはじめ、当日の運営スタッフまで、すべてボランティアの手によって行われ、とくに、当日の運営には十代～二十代を中心とした百六十人の市民ボランティアがあたった。

JUNCTION Vol.7　9月20日（日）

特集1

1997AIDS文化フォーラムIN横浜

映画「秋桜」や土橋正之写真展などを含む、68のプログラムと3つのシンポジウムを展開した今年のＡＩＤＳ文化フォーラム。この紙面では、３日間の催しの中から、サポートセンターで活動している団体を中心に編集部スタッフの目で見たフォーラムの紹介です。

■性教育グッズで考えるいのちの大切さ
■横浜エイズ勉強会
■連絡先：TEL 045-662-3721

ＡＩＤＳの勉強会を進めるうちに性教育の重要性を感じ、同時に体の不思議・すごさも知ってもらうきっかけになって欲しいとの考えから、布の人形やカルタを使って明るく楽しい雰囲気で性教育を実践しています。今回の参加者は学生から主婦まで幅広く、性教育カルタなどで大いに盛りあがり、その楽しそうな笑い声は部屋の外にまで響いていました。（ひろ）

■キルトをぬいながらエイズを語る
■ＡＢＣキルトの会横浜支部
■連絡先：TEL 045-844-8124

ＡＢＣキルトは、エイズにかかった赤ちゃんたちや難病で入院している子どもたちに愛と励ましを贈る目的をもってアメリカで始まったキルトづくり運動です。日本では1994年の国際エイズ会議を機会に横浜支部が発足し、作られたキルトは主にアジアの国々の子どもたちに贈られています。小さな力が集まって大きなものが作られていくこの活動から、若者たちが、エイズを、そして生きるということをみつめるきっかけになって欲しいと、昨年は学校の文化祭や青少年育成活動の中でもキルトづくりを行ってきたそうです。若者からお年寄りまで幅広い年代が参加できる“縫う”ボランティア。このフォーラムでもにぎやかに楽しい時が過ぎていきました。（せい）

取材はできなかったのですが、サポートセンターを利用している団体です。

■ＡＩＤＳ電話相談員パネルディスカッション
■（社福）横浜いのちの電話
■連絡先：TEL 045-333-6163

■コンドーム・バージン
■かながわレッドリボンクラブ
■連絡先：TEL 045-662-3721

JUNCTION Vol.7　9月20日（日）

展示場には未来への希望をつなぐ想いが満ちていた

■朗読ワークショップと劇場
■H.I.Voice・Act
■連絡先：TEL 045-784-9659

AIDS患者やＨＩＶ感染者のメッセージを声に出して読むことで、その人の想いをこころとからだで共感し、理解を深めることを目的に活動しているＨＩVoice Act。このフォーラムではＡｃｔのメンバーが観客を前に、舞台の上で表現する「Ｈ．ＩVoice劇場」と、参加者自ら感染者、未感染者双方の手記を読み上げていく「朗読ワークショップ」を実施。ワークショップ参加者には高校生など若い世代が多く、簡単なゲームを行って緊張をほぐしてから朗読が始まりました。朗読という行為によりＡＩＤＳの持っている問題が、少し身近な存在になったように思います。（ひろ）

■文化の中でＡＩＤＳと生きる
■ＣＲＩラテンプロジェクト
■連絡先：TEL 045-982-5692

ＣＲＩはブラジルでＨＩＶに感染した子供たちや日本の外国人感染者への支援活動をしています。ブラジルではケアホームや診療所を開設し、子どもたちへのエイズセミナーや識字教育を行い、また国内では保健所内に相談所を設けるなどの活動を行っているとか。今回のプログラムでは現在の活動状況やそれに付随する問題点などについての報告が日本語とポルトガル語で行われ、参加者からの盛んな質問に関心の高さをみる思いがしました。また展示場ではブラジルでの取り組みを紹介した写真展も開催していました。（ゆき）

■バリアフリー　企業・地域・医療
■ソクラテスプロジェクト
■連絡先：TEL 045-453-6711

ソクラテスプロジェクトは、阪神・淡路大震災被災者で首都圏に生活している人たちへの電話相談や交流会を実施している、福祉関係専門家を中心としたグループです。生まれながらにみずみずしい個性と感性を持つかけがえのない存在であるはずの私たちに、なぜ「生きづらさが生じるのだろうか」という問題意識のもと、今回は「バリアフリー」をテーマに、企業・ボランティア・ソーシャルワーカーなど、様々な面からのレポートがありました。バリアフリーというと設備面をいう場合が多いのですが、ボランティアやＨＩＶ感染者、更に被災者自身の心の中にあるバリアをいかに取り除いて接していくかが、これからのメンタルケアの鍵になるのではと考えさせられました。（ゆき）

支　え

「1997 ＡＩＤＳ文化フォーラムｉｎ横浜」を支えた個人・団体等

組織委員

唐崎旬代　川本譲次　小久保一利　榊原高尋　田代正樹　濱尾文郎　吉村恭二

実行委員

岩室紳也　岡島龍彦　笠原隆　鹿股久美子　金　迅野　小島隆士　高村文子
多田由加里　長沢　勲　早川徳治　広瀬　誠　細井保路　松江勝美　矢部尚美
吉永陽子　千代木ひかる

ボランティア

相羽利昭　秋田絹子　秋山早苗　荒井智子　荒川しをり　安西　耕　安藤貴子
安藤洋子　石井静穂　石井志歩　石井町子　石川淳子　石黒由美子　石田朝美
石田麻希子　石原誉一　伊藤美幸　伊藤陽三　伊地暢子　稲葉辰子　今村　讃
岩根弘子　上田慎也　内田早苗　WOODFORK栄　榎本勝子　遠藤郁子　遠藤　渚
大久保遼太　大沢利佳　大谷るみ子　尾形直子　小川恵美　小川真一朗　沖　奈美
奥山順子　尾島公子　小寺詩歩　香川裕子　加賀美美穂子　笠原嘉子　勝間由香
加藤恵美　金内真二　金子美紀　金子祐子　神山雅子　川村清子　菊岡ノン子
木口圭子　吉川明子　木下芳余　木村輝美　草木亜紀子　久保田紫乃　熊澤純子
小泉智子　小島和夫　小島和子　小島洋子　小瀬良満幸　小瀬良光代　後藤郷子
後藤紀子　小林由美子　小林樹恵　坂井　純　酒井普美枝　佐藤理枝子　重村英子
柴田　智　庄司　文　白鳥弘子　城田美樹　菅野昌充　菅原智子　杉本貴子
鈴木育乃　鈴木乃里子　鈴木美知　鈴木美なみ　関根幸子　高城由美　高倉幸子
高津寿美江　高塚美里　高橋亜弥　高橋　健　高林宏江　高見由美子　滝沢道子
竹重美奈子　武田純子　田崎智宏　田嶋恵美子　多田むつみ　橘　美智子　田中千絵
田中利左子　田村啓子　寺嶋宣子　名嘉涼子　中村栄子　長崎功子　長崎三生
長瀬牧子　奈良雅子　成田恭子　成瀬範子　西　志保　沼田雅子　萩原精子
萩原麻衣子　萩原みゆき　畑福由紀子　原田千世乃　浜田佳子　濱田嘉信　平野靖弘
廣仲よし子　藤江直樹　藤本洋一郎　船木由起子　古山結香　星原さやか　星原たつこ
細井　彰　堀口さやか　益田ゆり子　松家さおり　松本恵美子　松山孝義　三井順子
皆川　剛　三浦祐美子　宮田春奈　務台　法　村本俊子　本村弥恵子　森　若菜
矢島尚子　弥延友記子　山崎正美　山田郁子　横山彩子　和田　望　渡辺友美
岩室享子　浜村嘉允　吉田信雄　杉本徹也　岡島すみれ　樋山　茜　関口豊樹
成田右子

資金・その他

（１）資金援助：カトリック山手教会
カトリック横浜司教区福祉委員会
横浜商工会議所エイズストップ支援金
エイズ予防財団日本エイズストップ基金

（２）物品提供：（株）ユニマットコーポレーション（飲料）
小岩井乳業（株）（飲料）
大塚製薬（株）　（飲料）

（３）会場提供：かながわ県民活動サポートセンター

「1997 ＡＩＤＳ文化フォーラムｉｎ横浜」報告書

発行日：１９９８年3月３１日
編　集：1997ＡＩＤＳ文化フォーラム　報告書編集委員会
（岡島龍彦　多田由加里　矢部尚美　千代木ひかる）

発　行：ＡＩＤＳ文化フォーラム実行委員会事務局
横浜市中区常盤町１－７　横浜ＹＭＣＡ内
ＴＥＬ:045-662-3721 ＦＡＸ:045-651-0169
印　刷：社会福祉法人　東京コロニー